

阿倍野レリジョンカフェ 第1集

Abeno 'Religion Cafe' Vol.1

URRP

「レリジョンカフェ」報告書編集委員会 / 阿倍野プラザ 編

Religion Cafe Report Editorial Committee
and Abeno Plaza, edited,

阿倍野

Religion-cafe

阿倍野
Religion-Cafe
第 1 集

阿倍野Religion-Cafe第1集 刊行にあたって

大阪市立大学の都市研究プラザは、大阪市内を中心に、現場での出会いと関係づくりの強化と包摂型まちづくりの社会実験道場として、7つの現場プラザを設置してきた。第6番目に設置された、阿倍野プラザは、2009年3月に阿倍野区昭和町の一角にある1933年築の近代長屋の一つをスペースとしてその活動を始めた。活動の目玉として、本レポートシリーズのタイトルにもなっている、阿倍野Religion-Cafeを、2009年8月から始めることになった。

阿倍野、Religion、Cafeという3つのタームには、それぞれ企画者の意図が込められている。編集委員の川浪剛は浄土真宗の僧侶であり。その職能を活かし、経済的弱者への法要や葬送支援を実践してきた。また、編集員の白波瀬達也は宗教者によるホームレス支援を研究テーマとしてきた。このような実践や研究の積み重ねのなかで「宗教は社会を、人を応援することができているのか」という問いが生まれた。そこで私たちはパイオニア的な実践者＝宗教者を発掘・招聘するべく、Religion-Cafeを発足させる構想に至った。

レクチャーでは堅苦しいので、スイーツとドリンクをアフターレクチャーに味わい食しながら、カフェ気分、レクチャーと語り合おうということで、カフェと名付けた次第である。なお、私たちは、Religion-Cafeで提供するスイーツを、阿倍野プラザの近辺で営業している店々から取り寄せることで、地域社会とのネットワーキングも同時に図っている。

加えて、Religion-Cafeの会場である近代長屋は、かなり水準の高い建築物であり、昭和初期のある種レトロな雰囲気は、企画者の一人で建築学を専門とする黒木宏一が作成するフライヤーに十分反映されている。この昭和町は、近代長屋の宝庫でもあり、昭和戦前期、大大阪郊外のホワイトカラーを中心とする小市民社会が大阪でも最もよく地理的に展開したエリアでもある。その意味で近代長屋はそうした系譜を演出する絶好の空間ともなっている。西成区ではない阿倍野区で包摂型まちづくりを仕掛けることは、大阪の懐の深さを、そして支援の多層的展開を図る意味でも、有意義なものになると確信している。西成プラザや大淀プラザとは立地的に少々異なる阿倍野プラザの意義は、このへんにある。

このレポートは、平成22年度科学研究費（新学術領域課題提案型）「ITACOによる新しい地誌学の創生と地域の人縁生成に関する試行研究」を使用し、編集、出版されたものである。地域の系譜を掘り起こし、そうした系譜の自覚から新たなまちづくりのエネルギーを得よう、というこのプロジェクトの柱に、Religion-Cafeはしっかりと根ざしている。

なお第1集は、「宗教と翻訳言語、および芸術表現」の観点から4つのレクチャーが収録されている。第2集以降、テーマの共通性より、たとえば「まちづくり」とかを柱としながらいくつかのレクチャーをまとめ編集するというスタイルで、継続的に発刊する予定である。

2011年3月

阿倍野プラザ Religion-Cafe報告書編集委員会

水内 俊雄（都市研究プラザ教授）

川浪 剛（都市研究プラザ研究補佐員）

黒木 宏一（都市研究プラザ特別研究員）

白波瀬達也（都市研究プラザ特別研究員）

阿倍野 Religion-Cafe 第1集

<目次>

ページ

I. 宗教と言語表現

「浄土真宗入門～日本語で読むお経（法事）の実践より～」 1

Cafe-Time..... 16

「カトリック入門～聖書を原語から訳し直す～」 26

Cafe-Time..... 39

II. 宗教と非原語表現

「浄土真宗入門II～阿修羅像のバックグラウンドを知る～」 52

Cafe-Time..... 69

「ゴスペルの歴史と現代における展開」 82

Cafe-Time..... 99



阿倍野Religion-Cafe



気軽に本語が話せ、大塚原宿街に遊び来よう

1. 宗教と言語表現

「浄土真宗入門 ～日本語で読むお経(法華)の実践より～」 ++P1-24

浄土真宗入門
～日本語で読むお経(法華)の実践より～

- 浄土真宗の歴史と宗義
- 浄土真宗の修行と生活
- 浄土真宗の宗義と実践
- 浄土真宗の宗義と実践

「浄土真宗入門 - 日本語で読むお経（法事）の実践より -」

2009.8.25（火） 18：30 - 21：00

■講師：戸次公正（べっきこうしょう）さん

1948年大阪生まれ。大谷大学大学院修了後、1970年から真宗大谷派南溟寺住職。

真宗大谷派全国仏教青年同盟委員長、真宗大谷派宗議会議員などを歴任。

1. 出会いの場としての阿倍野プラザ

都市研究プラザの水内と申します。今日は、初めての試みなのですが、ちょっとだけ言いますと、うちの大学、都市研究プラザっていう新しい組織を3年前に立ち上げて、大学ですけども、地域で色々な資源を活用しながら、研究や教育、そして地域の方々と一緒に大きなくりで言うともちづくりになるのですが、色々な人たちとの出会いをつくって、大学も地域と一緒に、大学の中にももらないっていうかたちでの取り組みを始めております。

で、船場と、西成プラザっていうのが太子の交差点、あいりん地域の横に一つあるのですが、あとは豊崎っていう所にもございます。これは、民家一軒、このような民家を借り切って、それをちょっと改造して、建築学の方たちがやっていますし、天六ですけども、今度お風呂屋さんを、今日はオーナーの方も来ておられるのですが、それらを借りて市内に四つ五つあって。阿倍野プラザっていうのは、今年の3月から、大阪の典型的な近代長屋、これはもう築80年位かと思うのですが、戦前のわりと閑静な住宅街ですが、大阪の小市民的な雰囲気ですね。ここで、川浪さんと一緒に、大阪市大と阿倍野プラザっていうことを連携しながらやらせていただいています。

阿倍野の方では、川浪さんの今までのお仕事の中で、やはり宗教っていうものをもうちょっと社会に、私たちホームレス支援っていうものをやっておるのですが、そういうことに代表されるような、なかなか行政の手が行き届かな



い人たちに、日本の宗教っていうのが何か貢献できるっていうような場を設定したいということで、今月から毎月一回、川浪さんのアレンジによって、連続講座を開いていただくっていうような企画を始めさせていただくことになりました。

今日は、その最初を飾っていただきます戸次公正さんにおいでいただき、仏教を現代語化するというような、非常に魅力的なタイトルでお話を聞きながら、また後でスイーツとドリンクを用意して、楽しんでいただくっていうかたちで、また色々なお話ができればいいかな、という風に思っております。

泉大津の南溟寺のご住職でいらっしゃる川浪さんも昔そちらでおつとめされていた所でございますが、私が紹介するまでもないので、戸次先生は色々なことをやっておられて、今日はそれも交えながらご紹介いただきたいな、という風に思っております。レジュメがございますけども、しばらく、一時間ほどということでございますか、その後また下の方でゆっくりしていただくということでございますので、よろしく願いいたします。

2. 仏教との出遇い

皆さん、こんばんは。初めまして。多分、初めましての方が多いと思います。今回、不思議なご縁をいただきまして、川浪さんを通して、お話をすることになりました。皆さん方の知的欲求や、色んな学習意欲に堪えられるような話になるかどうかは自信がありませんけれども、この機会に、一緒に、私たちの人生にとって非常に大切な宗教という問題、とりわけ、仏教ということ、現代においてどう表現するのか、そういうことをずっと考え続けて色んな試みをしてまいりましたので、そのことのご報告も兼ねて、少しお話をさせていただきます。

今、少しご紹介いただきましたが、ちょっと自己紹介も兼ねて、自分のことを申しますと、私は泉大津市に住んでいます。今日も南海電車で泉大津からやってまいりました。南溟寺というお寺の住職をしております。真宗大谷派というのがあるのです。浄土真宗の東本願寺という教団に所属する一人でございます。

私は1948年生まれですから、今年、はやアラカン（アラウンド還暦）ですね、還暦を過ぎまして61歳になってしまいました。そんな年になっていますけれども、未だに色んなことに好奇心や関心がありまして、あっちこっちへ行って人と出会ったり色んなことをやってみたりしている者でございます。

今日は川浪さんの方から、日本語で読むお経、仏教の聖典、お経の話を、ということがテーマとして掲げていただきましたので、それをもとにレジュメに書きました、仏教の現代化ということについてのお話をしたいと思います。

どうぞ皆さん、足をお楽に、気楽にお聞きい



ただけたらと思います。それから、眠たくなっても休んでいただいて結構ですから、私全然、寝たりしても怒りませんから、生理の赴くままに安らかに、いびきだけはちょっと控えていただけたら、と思います。

と言いますのは、宗教的な話、仏教の話というのは決して目と耳からだけ入るのではなしに、その場に臨んだ、その場の雰囲気から、私たち一人ひとりに、何かこう伝わるものがお互いにあるのではないだろうか、そういう響き合うものがありますので、決して、一日の疲れで眠たくなって、うつらうつらされても、今日は来て決して損はなかったなあと言えるように、お互いできたらと思いますので、その辺もお楽な姿勢で、お気楽に聞いていただけたらと思います。

偉そうなことを言っておりますけれど、私もお寺の住職をしていますが、もともと坊さんになってお寺を構えてという考えは頭の中になかったのです。正直に自分のことを告白しますと、子どもの時分、たまたまお寺に生まれた、それだけです。お寺に生まれて、あとを継がなあかんよ、とお寺の檀家さんから言われて、周りの人からも期待されたのですが、長男に生まれましたので、それが嫌で、もうお寺から逃げ出すことばかり考えていました。

また、よそのお寺は知りませんが、うちのお寺は人間関係も家族関係も、色んなこと

も、暗かったのです。お寺も暗いけども人間関係も非常に抑圧的なものがある、こんな所にはもうおれないし、さっさと出て行こうと、静かに心に決めておりました、私はなりたいたいのがあった、したいことがあった。これは恥ずかしいから内緒にしときますけども、あるものを志すようになったのです。

で、途中で中学校か高校くらいになったら、お寺を飛び出そうと心に決めていたのですけれども、父親や母親も、「ああそうか、お前はもうお寺が嫌で、他でしたいことがあるのやったら、もう出て行ってええよ」と言うてくれたのです。それで安心して、大体自分なりに、将来こんなことをやってみようと思ってね。思っていた最中、たまたま16歳の時です。高校一年生の時です。父が、急に死ぬのです。お寺の住職をしていた父ですけども、病気になって。かなりお酒飲みでしたから、肝臓やいろんなところも傷めていた。戦争中には戦争に行っていた。そして帰ってきて、戦争体験のことはほとんど語りませんが、いっぱい色んなものを抱えていたのじゃないかと思えます。すごい酒浸りになって、体を壊して、検査のために入院をして、たった二週間のうちに忽然と死んでしまったのです、病院で。

それで私も、仕方なくお寺を飛び出せなくなりまして、周りのお寺の檀家さんも、お寺を嫌がって飛び出すのを知っていますから、出て行ったらあかんと捕まえられまして、嫌々その状況に自分を順応させなくてはいけないような状態になってしまったのです。

それで私ノイローゼになりましてですね、かなり悩んで。その時分はまだ仏教にも、親鸞、法然、日蓮、そんな仏教の教えを説いた人たちの、先輩たちの教えにも全然出会っていません。ただ寺に生まれて育て、一応形だけ、お坊さんの資格を、知らない間に取らされて、お

経を口ずさむことができるようになっていただけで、お経の中に何が書いてあるのか、そもそもお経っていうのは何なのか、全然分からなかった。ましてや自分の所属する教団の教えなんか、もう全然知らなかった。ですから、その悩んだ時にすぎるものとしてなかったわけです。仏教に救いを求める、それ以前の問題です。

で、私はその時に何に救いを求めたか。16か17になる私が、本当に真剣に求めたのは占いです。父が急に死んでしまって、その時また家族の中に不幸なことや色んな厄介なことがいっぱい続いて起こる。これはよっぽど何か、具合悪いことがあるのじゃないかと。ああ、これは占いしかないなあと、すぎるものと思いました。

で、占い、また私凝り性ですから、全部やりました、色んな占い。詳しいですよ、だから、一時そのことにかかりました、3年くらい。手相、人相、骨相、足の相というのはその時分なかったのですけど、発見をして。

最高なのは四柱推命学ですね。今、細木数子さんがやってはる、あれですね。占いの中では最高峰ですね。私は、本気でその占い、四柱推命学に救いを求めて、先生について習いだしたのですけども、どうやら習いだしたらその道でプロになるためには、色んな裏技があるというのを教えられるわけです。テクニックの問題だと。

つまり、自分の占いを信じて、人にお金を出させて、そしてそれで営業していくようになるためには、そんな難しいことは学問的に知らなくても、ある程度知っておいたら、口と度胸だけでできるのや、というテクニックを教えてもらって私は愕然とするのです。これやったら占いと言うたって、詐欺師と変われへんのと違うか、と。まだ若かったものですから、真剣に純粹に占いに救いを求めていた私は、その先生に

よって裏切られた思いがしまして、冷めてしまうのです、占いに。

その時初めて、死んでいった父がたまたま遺していった何冊かの本の中で、一冊の本に惹かれて読んでみた。その本は、お坊さんが書いた本じゃなかったから私にとって良かった。もうこの方は亡くなった人ですけども、米沢英雄というお医者さんです。お医者さんで、非常に仏法に得心の方でしてね。全国各地に講演に行ったりされている。そして、精神分析などもされる、内科のお医者さんですけども、仏教と心理学や科学との結びつきを非常に詳しく知っておられる先生。

その人が、高校生向けに書いた本を出しておられたのです。タイトルは、『もう一人のあなたへ』という題だった。薄い本です。でも、その『もう一人のあなたへ』というタイトル、私、今、悶々として占いにすがって裏切られて、それでも尚、仏教の「ぶ」の字も分かんるところに立っている私が、とりあえずこの、「もう一人のあなたへ」と呼びかけてくれているこの著者、お話をもっと聞いてみたいと思って、この本を読んだ感想文をその著者に書いて送ったのです、手紙を。でも、そんな偉い先生から手紙の返事なんて来るはずもないだろうと思っていたら、一週間もしないうちに長い長い手紙が来まして。それが、また全部手書きの、筆で書いてあって読めないのですよ。

仕方ないから、近所のお寺へ行って、嫌いなお寺の坊さんに読んでもらったら、非常に懇切丁寧に私の悩みに一生懸命に応えようとして下さる、そういう米沢英雄というお医者さんの語りかけがあったのです。

で、この人に会ってみようと思って会いに行った。福井市の町のだ真ん中で開業医をしておられた方ですけども。そこから私は、「戸次さん、あなたは親鸞、浄土真宗にご縁があるの

だから、浄土真宗と言えば念仏、南無阿弥陀仏ですよ」と。「あなた、南無阿弥陀仏と称えたことがありますか?」「いや、そりゃうちはお寺なので称えていますけども、私はあんな言葉、意味も分かん南無阿弥陀仏なんて呪文みたいなもの称えたくありません」「そうですか。けれどお父さんが死んで、あんたは不安になって、占い師にすがって自分もいつ死ぬか分からん、死の不安におののいているのやろ。今、南無阿弥陀仏称えへんかったら、もう明日にも死ぬかも知れへんねんで。一生のうち称えるチャンスなく死んでしまうか、意味分からんでもとにかく南無阿弥陀仏という言葉あったんや。お釈迦さんの仏教の中に、すごく長い伝統がある。その南無阿弥陀仏、意味は分かんでもいいから、とにかく心の命の糧、食べものやと思って食べるように、南無阿弥陀仏と嘯み締めてつぶやいてごらん」と言われたのですね。それでも抵抗があつてね。「恥ずかしいやろうけど、何でもそうや」と。「習い事でも何でも、お茶でもお花でも宗教でも、始めは口伝てに人の真似をして、そしてあなたやったら南無阿弥陀仏、日蓮宗の人やったら南無妙法蓮華、そこから始まるのや。それをやらないと、あんた。知識で、仏教とは何か、親鸞とは何かと知っても全然意味ない」と。

「親鸞がなぜ、南無阿弥陀仏という言葉に全てを懸けようとしたのか、それをあんた、一生かけて探していったらいいねん。そやけど今から、何も分かん呪文みたいなものを称えるのやったらおもしろないから、先生になんば言われてもよう称えんと言うたら、いつ死ぬか分からんあんたは、一生称えるチャンスがないかも知れんぞ、どないする」と、こう言われたんですね。

それで、この先生は何かすごいなあ、本物やなあと思ひまして、生意気だったんですけども、よし、この先生についていこうと思って、

色んなお話を聞かせてもらったり手紙のやり取りをするようになった。

それが、私が、ほんのささやかですけども、仏教の門口に立ったきっかけでした。それが17、8くらいの時。その出会いがありましたので、やはり、今までやりたいものがあつたけども、お寺へ残って、お寺の仕事しながら仏教も勉強しようと、そう思いながら京都にあります大谷大学というところへ通いだすようになりました。

3. 意味不明な漢文経典

そこで、仏教を学び、仏教の歴史を学んでいくわけですが、そうこうする中で、私は、今日のテーマであります仏教の聖典であるお経というものです、現代の日本語で翻訳した、そのものを読むというそういう営みを、だんだんしようと思うようになります。



しかし、それは、しようと思っても簡単にはいかないのです。私たちの教団だけでなしに、日本の仏教界全体が、お経を日本語で読むということをしていないんです、ほとんど。今でもほとんどと言っていいくらい、その取り組みは遅れています。

私は、それこそ子どもの頃から、何で意味も分からん、あの漢文のムニャムニャというお経を読むのやろうと。まるでほんまに、ちんぷんカンブンやないかと、漢文のまま読んでも意味分からへんでしょ。

ありがたいお経です、確かに内容は。訪ねていけば。しかし、言葉の響きだけで皆さん、聞いていても分からへんでしょ。ニョーゼーガーモンイチジーブツザイシャーエーコクギージュージョクコードクオンヨーダイビーケーシュー・・・

中国人が聞いたら分かるのですけどね、漢文ですから。中国人はすごいですよ。やっぱりちゃんとインドの言葉を中国語、漢文に訳してですね、一千年の歴史をかけて翻訳を何度も何度も繰り返してきた。有名な阿弥陀経や法華経や般若心経、そういうお経でも、何度も何度も中国人は自分の国の言葉にするために訳してきた。

日本へそれが伝わってきて、漢文で読むお経の響きありがたい、それが何か先祖の霊を慰めたり供養する、そういう道具として用いられるようになる。さらには、国家安泰、天皇のお身体を丈夫にさせていただくための祈願、そういう国への祈願とか。また、国にあまり協力的でなくて、税金を払わんような奴は呪い殺すぞ、と言ったような内容のお経もあつたわけです。ですから漢文で読む、今読んだあのムニャムニャという読み方が、何となくありがたいので、皆それでお布施を出すわけです。あれ、意味が分かった言葉をそのまま読んでしまったら、何やこんなことかって、意外とですね、あ

りがたみが失せてしまうかもしれないですね。

今日はちょっとこの中身、実演もいたしますけれども、なぜ私がそういう漢文で読むお経、それもやりながら、尚且つ日本語で読むお経という取り組みを始めたか。そのきっかけが、自分のそういう子どもの頃からの悶々とした思いがあったということですね。

中学生くらいの時、私、牧師さんの息子の友だちができてね。キリスト教の教会へ呼ばれて礼拝に行ったことがあります。バイブル、キリスト教の聖典を渡されて、あれ一冊に全部、キリストの教えが収まっている。読んだらすぐ分かる。英語と日本語を並べてですね、イエスはこうおっしゃった。心の貧しい者は幸いである。天国は彼らのものである。すぐ分かるのです、一読して。

同じ宗教なのに、世界三大宗教と呼ばれる仏教のお経がなぜ、ムニャムニャと意味不明なまま、ちんぷんかんぷんですと、ちゃんと訳していないのか。もちろん、主要なお経は専門家によって、かなり厳密に、学問的なテキストとして翻訳はされているんです。学問的なテキストとして立派なものとしては文庫本になっております。岩波文庫から、浄土三部経と、妙法蓮華経、般若心経と、それらは仏教を代表する主要な経典です。

それは、ほんの一部ですけども、厳密な現代語訳がなされています。これはインドの古い言葉サンスクリット原文。そして中国の漢文訳、チベット語の訳。全部、相互に対照して、日本語にちゃんと訳してある。だけど、あまりにもこれは学術的な文献学としてのテキストですから、これ読んでピンと来んのですわ。意味は、分かるような分からんような、却って難解になってしまっていて。何か、キリスト教のあのバイブルのように、読んでぐっと胸に響くような、そんなお経がないものかと、ずっと探し

ていたんですね。探していたと言うよりも、そういう思いをずっと高校生くらいまで抱えていて。

で、大学行った時に、仏教の教え、その歴史を学び始めて、またその歴史を学べば学ぶほど、仏教のすごいプラスの部分と、仏教のすごいマイナスの部分、正の遺産と負の遺産に出会いますので、愕然とするようなこともある。また、仏教ってやっぱり素晴らしい、と出会い直す部分もいっぱいあるわけですけども、その中で、私が今思っているような、日本語で読むお経がなぜないのか、ということをもっと早くにやっぱり気が付いていた人、気にしてやりだしていた人がおられた、という出会いがあるわけです。

これは大学に入った時、桜部建という先生がおられまして、この人の授業で仏教をこれから勉強するのだったら、これだけの本を基本図書として読みなさいと、黒板にいっぱい書いて下さった。その中に、木津無庵編『新訳仏教聖典』という本があったのです。

レジュメ見ていただきましたですね、レジュメの左側の二番目の②、日本語訳大蔵経をもたない日本仏教。これはその現状のことをちょっと言うてるのですが。国訳一切経。これが漢文の仏典を読み下し文にした、日本で初めての聖典です。1935年ですから、かなり早くにできています。

それから南伝大蔵経。これは南方系の、ビルマとかセイロンに伝わってきた、パーリ語で書かれた仏教の経典があります。これは近代、明治になるまでずっと日本の仏教徒は知りませんでした。近代になって、それも東南アジアやアジアに侵入していったヨーロッパの人たち、その学者によってこんな仏教の経典があると発見されて、それが日本へ初めて入ってきて知られた。だから、これらの研究はまだ新しいので

す。

でも、そういうことを踏まえて、日本語のお経をつくった人がある。その先駆けとなったのが今言いました、木津無庵編『新訳仏教聖典』。これはなんと1925年、大正14年につくられておるのですね。私、その本、家へ帰って探しますと、お寺の父親、祖父が遺していた本の中に、ちゃんとその聖典があったのです。ボロボロのもので、私も大事にしていますから、今日は現物を持って来ませんでしたけれども、真っ黒の革表紙の素敵な聖典なのです。

で、そこから私は、貪るように読みまして。大正時代の訳ですから、かなり古い。でも大正浪漫の空気に影響された、まさに日本語なのです。単なる漢文を読み下した文章ではない。日本語として、苦勞を重ね推敲して、ルビも丁寧に全部ふって、読みやすくしてある。読んだら、本当にバイブルのように分かる。お釈迦様の誕生から出家、そして悟りを開き、そしてお亡くなりになって涅槃に入る、その80年の生涯の間に、どこそでどんなお経を説いた、ここではこんな説法をされた、ここではこんな出会いがあった、ここでは殺されそうになってこんなことをされた、色んなエピソードを交えて一冊の聖典になっているのです。

これには私、感動しました。こんな聖典をつくる人ってどんな人やったんやろうと、すごく興味を持ちましたが、その時はそこまで深く思わずに、これなら、これを基にして、私もできるんじゃないか。と思い始めた矢先、今度はもう一つの、聖典に出会うわけです。

これは今日持って来ましたが、こんな仏教聖典。これ、皆さん見られたことがあると思うのですよ。ホテルへ泊まったら置いてあるでしょ。日本の主要なホテル、外国でも大抵、グデオンのバイブルと共にこの仏教聖典というも

のが備え付けられている。これですわ。これを開いて読みますと、今言った木津無庵という人が大正時代につくったものが基になってつくられたと書いてあった。あ、これもやっぱり木津無庵が元々はつくったのだ、と。

でも、その木津無庵という人のことはすっかり忘れられてしまいましたけれども、私は、まさに、今言ったように、お釈迦様の生涯と共に、主要な経典がほぼ抄出、日本語に意識されている。学問的にも基礎的なことをちゃんと押さえた上で、読んで分かるようにしてある。後でこれ読んでちょっと実演してみますけども、今日はこれ5冊ほど持って来ましたから、欲しい方にはお土産に差し上げますけども、また開いて読んでいただいたら。

それでこんなことをした人もいます。これはまた別の人です。木津無庵を受け継いで、戦後になって、世界中のホテルにバイブルと共に仏教の聖典を置きたいから、資金をつくるための会社。精密機械の会社でありますミットヨという会社を起こした人がいるのです。沼田惠範という、やっぱり西本願寺出身の僧侶なのですけども、その人が、これを作るために起業をして、会社を始めて、その事業をずっと昭和40年代からしてきた人がいるわけですね。

それに出会いましたので、私はこれを基に、自分たちの宗派の中で使うお経、全部収められていますから、抄出して法事で読むようにし始めた。始めはすごい抵抗がありまして、さっき言っていたような、意味も分からない、「ニョーゼーガーモンイチジューツァイシャーエイコク」、はぁありがたいと言うてたのが、ある時お釈迦様がこうおっしゃいました、云々ということ朗読するわけです。まったく有り難くない。何あんた一体それって。でも、法事の席に座ってくれていた若い人たち、子ども

たちにはすごく受けたのです。今までやったら、おじいちゃんおばあちゃんやお父さん、親戚の法事行ったら、あの一時間のあいだ苦痛やった。何言っているのか分からんお経を、黙って聞いておって眠とうなって、嫌やったけれども今度のお坊さんは何や、読んで聞いて分かるお経。しかもこれはみんなに配るのです、テキスト。こちらの手の内を明かして、何ページ開いてください、ここ読みますから、と。これが、今までずっと意味分からんかったけれども。漢文でずっと、ムニャムニャと、呪文のように読んでおったお経はこんなことが書いてあるのです。

これが本当に分かったら、もちろん、深い意味での先祖供養ということにも繋がりますし、意味が分からないまま読んで、何となくありがたいのがいいのか、やっぱり、ああ、こんなことが私たちの、そして自分の心に響くような、生きることの道しるべになるようなことが書いてある、そういう言葉に出会うような、そういう法事をやってみませんか、とあちこちで説得して始めたのです。

でも始めは抵抗がありまして、8割方やめてください、と言われました。2割くらい受け入れてくれて、おもしろそうやからやりましょう、と。始めはだから、抵抗がありましたから、法事が済んでからまた散々です。何、今日あの法事は。まるで、あんたあんなんやったら、本の朗読してるだけやん。あんなんやたらもうやってほしくないわ、来てくれんでいいわ、と言われて拒絶されたんですけど。

いや、なかなか面白い、斬新な取り組みで、本来、やっぱり意味が分かってこそ、何でもそうや。お経に限らず、日本の古典かてそうや、と。源氏物語だって、ムニャムニャと原文で読んでいたら分からんけど、現代日本語に谷崎潤一郎が訳していたり。読んだら興味が湧いてき

て、原本も読んでみようと思うわけです。お寺さんがやっていることも、なるほど、日本語でそのまま読んだらあんまり有り難味がないけれども、そういうことが書いてあったら、今度はほんまに原文をちゃんと漢文で読んでみようだとか、インドの言葉で読んでみようかという気になるから、これでやりましょう。で、やっと、受け入れられていってですね、少しずつそういうことが理解されていくようになったわけです。

しかし、お寺同士の中では、やっぱりこれは反響が鈍くて、そんなことしてもうたら、手の内を出してもうたら困るやないのと。お経は意味が分からんから、後ろで聞いておっても、何となく、お坊さんに対するありがたみもあるのに。お経をそのまま朗読して、意味も分かるようにしてしめて、手の内明かしたらですね、坊さんの値打ちが下がると、いうことを言い出す僧侶の仲間、教壇の人たちもありましたですね。

それでも、やっぱり少なからず、そういうことに関心を持っている仏教者たち、僧侶たちもいましたので、少しずつ、私もやってみたいけれど、どうやったらいいのか、どんなテキストを使うのか、具体的にどんな、あんとんとこの法事にいっぺん参加させて、というような形で来る人、ちょっとずつ増えてきたりして、今では、私以外にも、そういうことを思ってたっていた各宗派の、禅宗でも、真言宗でも、日蓮宗でも、浄土真宗でも、気が付いたら、私もこんなことやっていたっていうお坊さんが少なからずおったのですね。で、出会いもありまして、今ではちょっとはこういうことも通るようになってきたわけですからね。

でも、まだまだ少数派ではありますね。で、今日は皆さんもこういうことを直接聞いていたでいて、関心をお持ちになっていただいたら、

いてあります。それと、新井満訳の般若心経、これはねえ、名訳です。

外国人の訳した般若心経の訳では、ベトナムのお坊さんで、ベトナムから亡命をして、フランスへ行った、ティク・ナット・ハンという人がいます。この人は、エンゲージド・ブツィズム、社会と繋がる、行動する仏教ということで、世界中に、禅宗のお坊さんですけれども、回りながら、社会の問題と関わりながら、現実の問題と関わり行動する。ベトナム戦争の時には、先輩たちが焼身自殺というかたちで、ベトナム戦争に抗議する、そういう行為をとった仲間の一人です。その人は、自分を焼身するということは、敢えてしないで、ベトナムにおれなくなりましたけれども、亡命して、フランスで活動しながら、今でも、世界で、非戦平和の運動と繋がりながらやっている。この人が訳した、般若心経の訳も素晴らしいのです。日本語訳されています。これも、大きな書店へ行ったら、ティク・ナット・ハンという人の本がたくさん並んでいます。非常に尊敬する世界の仏教者の一人で、現存している方です。例えば、そういうものがもう既にいっぱい出ています。妙法蓮華経、法華経、これも素晴らしい訳が色んなところから出版されていますので。岩波文庫のものだけは、難しく、読んでも分かりませんから、やめといた方がいいと思います。

これから読みますのは、阿弥陀経、これは実際にちょっと朗読をしてみたいと思うのですが、このお経は、日本の宗旨で言いますと、浄土宗、浄土真宗などで用いる、大切な聖典です。一番よく読まれているお経じゃないかと思えますね。

中国でこのお経を、阿弥陀経というお経の名前で翻訳をした人が、有名な鳩摩羅什というお坊さん、三蔵法師。三蔵法師というのは、インドから日本、中国へお経を伝えて持って帰っ

て、そして中国語に翻訳する、そういう仕事をした人を三蔵法師。三蔵法師というのはいっぱいいたのです。鳩摩羅什とか、玄奘とか、何十人、何百人という三蔵法師がいて、その中の一人の、玄奘という人の玄奘録が、『西遊記』という孫悟空の物語になって知られていますけども、あの人もその一人です。

ですけれども、鳩摩羅什という人も素晴らしい翻訳者で、たくさんの有名なお経を訳していますが、この人が訳したお経で最も有名なのが、今言いました般若心経です。それから阿弥陀経、そして妙法蓮華経、法華経、この人が訳しているのですね。だから、仏教の歴史の上で、この鳩摩羅什という人のおかげで、日本の坊さんは皆、おまんまを頂いているわけですね。私は、この鳩摩羅什に感謝する法要をしたいくらいのことを思っているのですけどね。その人の翻訳したものを読んでいますが、先程も言いましたように、それをそのまま読みますと、仏説阿弥陀経・・・意味分からへんですね、何のことか。で、それを日本語に訳してみたら、例えば、お経にはこんなことが書いてある。私は、これを基に、これに仏教賛歌とか音楽を挟みながら、また、今日は持って来ませんでしたけども、素敵な、レジュメにも書いていますけれども、仏教音楽として素晴らしい、こういう朗読のバックに流すのにいい、作品がたくさんあるのです。そういうのも取り入れながら、朗読をしたりしています。今日は、素のまま読んでみますけれども、阿弥陀経というものを、ちょっと、法事を務めるようなつもりで読んでみますので、聞いていただきながら、もし良かったら、途中で一緒に口ずさんで、静かに口ずさんでいただけたらと思います。

阿弥陀経

みほとけの説かれた阿弥陀経

わたくしはこのように聞いております。
ある時、釈尊はインドのコーサラ国にある祇園精舎において、大いなる聖者たちをはじめさまざまな人々を前に説法の座を開かれました。釈尊は智慧第一とされる舎利弗尊者に語りかけてゆかれました。

舎利弗よ、ここから西の彼方に十万億のみほとけたちの世界を過ぎた所に極楽という国がある。そこには阿弥陀仏というみほとけがいて、今現に法を説いている。その国では人々が煩惱の苦しみから解放され、さまざまな喜びを身に受けているから極楽というのだ。

また、舎利弗よ、想像してみるがよい、極楽の風光を。

その国ではどの建物も環境もみなことごとく宝石でできている。そこには七つの池があり清らかで潤いのある功德の水がたたえられ、大きな蓮の花が咲いている。その花は、青や黄色、赤や白などで、おのおのが光を放ち、清らかな香りをただよわせている。

天上からはたえず音楽が響きわたり、一日に六度、曼荼羅華が雨ふる。人々はその花びらを集めて他の世界のみほとけたちに供える。

また、極楽にはさまざまな鳥がいる。その歌声は人々に平安をもたらし、阿弥陀仏のおしえが聞こえてくるので、みな仏法僧の三宝を念じるようになる。そのおしえは聞く者の身と心をよく調べてさとりへといざなう。

この国には、人間の煩惱が作り出す地獄、餓鬼、畜生という悲惨な状況はまったくないのである。

かすかな風が吹くとき、宝でできたもののみなが動いて、妙なる音色を奏でる。このようなみほとけのすぐれたはたらきがおごそかに満ちているのが極楽なのである。

阿弥陀仏の光は、どこまでも絶えることなく、あらゆる世界をあまねく照らし、なにものにもさえぎられない。

阿弥陀仏の命は永遠であり、その世界に生きるものも無限の命をもつ。このように光と命が果てしないみほとけを阿弥陀仏と呼ぶのだ。

極楽浄土に生まれた人はみな必ず仏に成ることが決まっている。

だれもがこの国に生まれたいと願うがよい。この国ではあらゆる人々と共に、生きることの根拠にふれることができるからだ。

男であれ、女であれ、だれでも阿弥陀仏のみ名を聞き、一日ないし七日、一心不乱に称えつづけると阿弥陀仏はまのあたりに現われ、すぐに極楽に往くことができる。

舎利弗よ、世界中のみほとけたちもまた、阿弥陀仏をほめたたえている。

東方にも、南方にも、西方にも、北方にも、下方にも、上方にもそれぞれ、ガンジス河の砂の数ほどのみほとけたちがいて、大いに演説して、念仏の真実を信じ、ほめたたえることを勧めている。

だからこのお経を、すべてのみほとけたちに守り念じられてきた聖典というのである。

みほとけたちは、わたしをほめたたえている。釈迦牟尼仏は、この現実世界の五つの濁りのただなかで、この理解しがたい教を説いたのだ、と。

五つの濁りとは、時代が乱れて戦争や疫病や飢饉がひろがる劫濁、ひとつの主義思想を絶対化する見濁、むさぼりや怒りや迷いに束縛されてしまう煩惱濁、身も心も弱まり、共に生きることができなくなる衆生濁、人や物、環境もその寿命がどんどん短くなる命濁である。

舍利弗よ、わたしは世間の人々にはどうも信じがたい教を説いて聞かせた。まことに難しいことであった。

釈尊が説法を終えられると、その座にいた人々はみな、天の神々や、闘いの神である阿修羅たちでさえも、この教を聞いて身と心によるこびを抱き、信じて受け入れ、去っていきました。

これが釈尊の説かれた阿弥陀経でございます。

こういう訳でございます。ありがとうございます。

例えばこういう風に翻訳をして、法事を実際にやっているわけですが、お聞きになっただけで、いかかかな、と思うのですけれども、或いは、こういう試みをしているお坊さん、先程も言いましたように、少なからずおられますから、お聞きになった、出会ったこともあるかもしれませんが、今日はまた、こういう機会ですからね、こうした試みを通して、現代に生きる私たちが、お経に限りません。先輩たちが残してくれた大きな精神の遺産である、古典、その一つがお経ですね。また、様々な古典、もちろんその中には、イスラム教のクルアーンや、キリス

ト教のバイブルも含まれております。そうしたものを、私たち現代人の、特にこの日本に生まれた日本語で、聞いて分かるように、私たちが読んで受け止め、味わうということは、大切なご縁になるのではないかと思います。こうしてお勧めをしておるわけでございます。そういうことを、私の取り組みの一つとしまして、ご紹介に替えさせていただきます。

なお、このレジュメの中で、右側の方ですね、四番目に日本語で読む仏事法要ということで、私が実際に、お寺の門徒の、檀家さんのご家庭でやっているものの選択肢を載せております。法事をお寺へ頼み込まれましたら、Aコース、Bコース、Cコース、どれでしますかと聞くのですね。

ここに書いてありますが、Aコースというのは、従来通りの、漢文のままで読む。それで読んでもらわんとありがたくない、法事らしくないから、ということで思う人は、それにプラス一部を訓読にして、つまり読み下した文を付け加えて、読むと。で、意識で読んだ、例えば阿弥陀経やったら阿弥陀経の部分は、こうして意識で読んだ部分も含めて、こういう読み方もあるのです、と、日本語でやっているのもご理解くださいというのをご紹介する。

Bコースは、漢文の音読も含めて、一部。半分くらいを意識の日本語で読んでいます。

Cコースは、先程紹介しましたこの仏教聖典、これを皆さんに配りまして、それで、今日はここを読みますからページを開いてくださいと言って一緒に読む。また、間に仏教の賛歌を、キリスト教の賛美歌のように歌ったり入れたり、BGMを入れたりしながら、一緒にやる、というやり方をとっております。

5. 芸術として表現された仏教の教え

その他にも、最後に、朗読・視聴覚のために、仏教精神が表現された芸術作品・著書の紹介ということ、例えば、私は自分の好みとか言いますと、宮沢賢治の作品には、どれも素晴らしい仏教精神が、お説教臭くなく、さりげなく、童話のかたちで、詩のかたちで入っている。その中でも、『よだかの星』はもとより、『二十六夜』というお説法が好きなのです。これは面白いのです、ふくろうの説法の話なのですね。この『二十六夜』というのは朗読でやったこともありますけども、それから『銀河鉄道の夜』『やまなし』『ビジテリアン大祭』など、全作品がそうですけど、私は特にこういった作品の中に、非常に深い仏教精神が、広く宿されていると思います。

また、私は、よそへお話に行ったり、お寺でお話をしたり、子ども相手に子ども会もしたり、お寺でもしているのですけども、絵本も好きなのです。皆さんも絵本とかに非常に興味もあると思いますが、絵本もなかなか、すごいです、このごろは。いいものがいっぱいあります、うちのお寺では絵本を何百冊と揃えているのですけども、大人に非常に響きますね、この頃は特に。その中でも、あっ、これは非常に宗教的なテーマを宿している、仏教的な精神と深く繋がる、親鸞の教えに何か響く、というような感じがしたのが、例えばここに紹介している『スーホの白い馬』、有名な絵本ですね。

『じごくのそうべえ』これは面白い、古典落語の有名な『地獄八景亡者戯(じごくばっけいぼうじゃのたわむれ)』、桂米朝師匠が再現したやつですね。もう今では誰もがするようになっていますが、これをもとにつくられた、田島征彦の絵本なのですね。これが面白いのですわ。大人が読んでも子どもが読んでも、抱腹絶倒、子ども会で子どもにこの『じごくのそうべえ』を読んでいると、もう夢中になりまして、もういっぺん読んで言うてせがまれるくらい面

白い。

それからもう一つ、『あらしのよるに』という、全五巻のですね、これもアニメ映画にもなった有名な絵本。これは皆さんもよくご存知。それから、古いのでは『ごんぎつね』。先程の阿弥陀経、これも絵本になっています。今では二種類出ていますね。これも本屋さん行ったら、児童書、絵本のコーナーに探すことができます。

もちろんアニメ、宮崎監督の『もののけ姫』や『千と千尋の神隠し』などは、私もすごく宗教的な深いものがあるので大好きですし、お寺で上映して、その会得というか、その心をまた、一緒に学んでいこうとしたりすることもあります。

それから、これも日本の戦後の古典と言っていい名作の一つに、石牟礼道子さんの『苦海浄土』という作品があります。その石牟礼さんの著書の中に、『花をたてまつる』という、素晴らしい、仏教のための詩があるのですね。石牟礼さん自身は、特定の宗派宗教を代表している方ではありませんし、お坊さんではありませんけれども、この方の書いたノンフィクション、ドキュメンタリーか小説なのか、その、生と死の淡いと、ノンフィクションの淡いを超えて、何か死者の思いや願いを再現しようとする、そういう試みが、この「苦海浄土」という有名な小説ではですね、これは文庫本にもなっていますけれども、味わうことができます。私はこれもまた、現代のお経だというふうに頂いております。

それから、先程紹介しました、ティク・ナット・ハンというベトナムの僧侶、禅宗のお坊さん、この人の著書を挙げておきました。これは大きな書店でしたら、紀伊国屋とかジュンク堂とかやったらいつでも置いています。『微笑を生きる』とか、『ラブ・イン・アクション』、それから『般若心経』。この『般若心経』が素

晴らしい名訳です。もちろん、ティク・ナット・ハンの英訳を日本語に訳したものになっていますから。英訳と両方ありますけども。ちょっとこれを読んだら、えっ、と、やっぱり般若心経に対する世界観が変わるような、目からウロコのような。

もういっぺん目からウロコが落ちたのが、さっき言った新井満さんの般若心経。これは素晴らしかったですね。こんな風に受け止めることができるのか、っていうのがびっくりしました。

その他に音楽の作品としては、映画音楽をたくさんつくられた武満徹さんの作品、『秋庭歌』これは現代雅楽なんです。雅楽と言えば東儀秀樹しか皆知らん人もあるかもしれませんが、一番雅楽を戦後の現代音楽に取り入れて、世界的に絶賛される作品をつくったのは武満徹なのです。色んな日本の有名な映画の音楽も武満さんはいっぱい書いていますけれども、その中にもそういうものがいっぱい出てきますけれども、それから武満さんの音楽をBGMに流しますと、そのままこのお経を読んでもぐっとくるんです。特にこの『秋庭歌』という雅楽は、オーケストラと雅楽、笙、箏、太鼓、全部入った、この合奏で、えっこれが雅楽って？でも、単なるオーケストレーションではない、すごいと驚嘆するような芸術作品なのです。それと、武満徹さんのまさに宗教的なテーマを踏まえた『レクイエム』、これは素晴らしいんです。

それからこれはあまり知られていませんが、廣瀬量平という、去年くらいに亡くなった人で、すけれども、これは現代音楽の作曲家でして、この人がたくさんの『カラヴィンカ(迦陵頻伽)』とか『クリマ』という作品を、CDにしています。これも私は阿弥陀経を朗読する時に使うのですけれども、先程の浄土の、極楽浄土で風が吹いたら、鳥が鳴いて、カラカラと寶石

の音がしているような、それを音楽にした音楽なのです。まさに。そういうことをやっている人がいらっしまった。

それと、これは現役で活躍している、尾上和彦さんという合唱音楽の作曲家。この人は『オラトリオ 鳥の歌』とかですね、オペラ『仏陀』、『藤戸』これは平家物語を描いたオペラ、そういった楽曲を作曲している素晴らしい作曲家で、このおっちゃんとは、しょっちゅうお酒を飲んだりして、議論をしながら、この仏教の語り合いをしている仲間です。

それから、東祥高さんという、この人のシンセサイザーの曲は、私はそれまで喜多郎、今でも喜多郎のも好きなのですが、喜多郎のシンセサイザーばかり聴いておって、他のを知らなかったのですが、この東祥高の『救いの宇宙』というCDを聴いた時、まさにこれもまた目からウロコが落ちるくらいびっくりした。こんなに重厚な、深い、宗教性を湛えた音が出せるのかと。喜多郎もいいけども、喜多郎とはまた次元の違う素晴らしい作品をつくっておられる。東祥高さんっていうのはまた、昔の人なら知っていると思いますが、フォークグループに五つの赤い風船というのが昔ありました。あの一人なのです、東さん。この人が現代では、現代音楽を代表する、シンセサイザー作曲者になっておられるのです。この人の作品もCDで手に入れることができますので、また機会があったら。

私も、現代のそういう思いを綴った詩を書いたりしていますので、『しんらのブルース』とか、『蓮如挽歌(エレジー)』とかいうのをつくっていますが、今日は恥ずかしいですから持って来ませんでしたけれども、機会があったらまたご紹介をさせていただきます。

と、ということで、時間もあれでございまして、お話の方はこれくらいで、また色んなご意見とかご質問とかご批判がありましたら、受け

たいと思います。どうもご静聴ありがとうございました。



～Cafe-Time～

1. 伝統の力

水内：基本的にはQ & A でも結構ですので、お食べいただきながらまた色々お話いただけたらと思います。

川浪：これからフリートーキングなので、どんどん、先程のお話の中で質問とか、これまったくお話と関係ないけど聞きたいということをもどんどん投げかけていただいて…

A：伝統的なお経のリズムがあるじゃないですか。あれが今、なかなか作ってできないのと、もう一つはね、それはまさに同じところがある。意味を、どうしても理屈っぽくなるのですね。それをどういう風にこう、韻を踏ませて、音楽性を持たすのかというのが、ものすごく難しいなって。

戸次：そうですね。それはまさに仏教、あの読み方がずっと意味が分からなくても、韻を踏んで、いうので、踏んでおるのですよね。

A：すごいそのお経、儀式に見えないところですごい工夫されているっていうかですね、その部分をどういう風に宗教儀礼としてやっていくのか。

戸次：これからの課題ですね。やはり、これまでの伝統的なものに匹敵するようなものに、どこまでできるか、まだまだ違和感が残るので、おっしゃる通りです。

A：その漢訳について、中文で二千年、それからパーリ語でたしか三千年くらいですよ。それに対して日本語が、まだ日本語になって何十



年とすれば、すごくね。でも、その時代に、二千年前に、確かに中国人はそれをしたわけだから、二千年もかけながら、伝統をつかってきたわけやからね。今から始めるとしたら、すごい壮大な事業に。

戸次：だと思えますね。それと始めて金光教のお話も聞きましたけども、それも含めて色々教えてください。

A：祝詞がしたいときには、元々はその、神官が書いていた祝詞を現代語式に替えてやっているのだけれども、文語体なのです。ですから、それで枕詞とか、やっぱりずっと、ほとんど意味はないのだけれども、繋がるような、それこそ今日、先生が言われたように、若い人たちに苦痛でしかない。で、それを読む人は、思いを込めて読んでいるから一生懸命で、気が付いてないのだけれど、年寄りはそのを許さないような雰囲気、それを改めて文語でやったのですよ。採用してやっているのですけれど、韻を踏まして、言葉の持っている伝統の力というものはずいずいすごいですね。

戸次：文語はいいですけどね。私も好きなのですけど。

A：ただし、それでいいのかと思った時にね。

戸次：たいへんいい、示唆的なことをお聞かせ

いただいております。

A：とんでもないです。

戸次：私はまた、仏教だけやなしに、さっきも言いましたようにキリスト教なんかにも関心がありますし、いわゆる教派神道と呼ばれてきた、私は民衆宗教やと思うのですが、そういうのに興味があるのですが、それぞれ色んなところへ訪ねて行ったりして、ちょっと取材したりもずっと続けているのですが、大本教なんか大好きなのですかね。

A：今日は天理教を研究している人も来ていますし、立正佼成会の方も今日は来られていますので。白波瀬君なんかは、仏教を…、祀り祀られる側として、ああいう現代語訳の葬儀とか、感覚的にどうなの？

白波瀬：個人的には、お経みたいなのが好きですね。僕はキリスト教の研究をしているのですが、でも家は仏教で、クリスチャンでもなくて、キリスト教の世界に、比較的こう惹かれるのは、今日おっしゃられていたように、意味が分かる。その中で、どの人も多分そうだと思うのですが、これすごいな、というメッセージがあって、ここにぐっと惹き付けられる。で、残念ながら僕なんかは、ずっと仏教の檀家で生きてきて、お寺との付き合いもめっちゃめっちゃ古いんですね。古いうちなので。あるのだけど、その中でそういう、おっ、と思うことが一度もなかったという、経験として。で、おっと思うのは、自分からぐっとやるのじゃなくて、たまたま出会いがあったりだとかいう瞬間で、おっと思ったりとか惹かれたりあるから、仏教も興味ないわけじゃないけれども、今までの出会いの中でそういうのがなかっただけやなあ。

戸次：キリスト教の研究をされていた？

白波瀬：キリスト教のホームレス支援、その取り組みを研究していて、教義学とかではなくて、社会活動を研究しているのですが、そういう意味では今日は良かったし、自分の宗派でもそういうのをやってくればな、と。

戸次：宗派は何なのですか。

白波瀬：臨済宗です。

戸次：臨済宗だったら面白い人がいますよ。作家の玄侑宗久さんというのが臨済宗。

白波瀬：だから、こういう取り組みを広げていったらね、伝統的な宗派とかも

川浪：9時までなので、短い自己紹介してもらって、感想とか質問を。すみません、一応9時までになっていますので、短い皆さんの自己紹介と、感想か質問を戸次さんにちょっと投げかけていただきたいと思いますので、こちらから回します。どうぞ。

2. 非言語表現としての宗教

B：西成の方から参加させてもらいました、Bと言います。どうもありがとうございました。おいしいかぼちゃスイーツを頂きまして。ご馳走様です。

C：都市プラザの研究員をやっているのと、あと西成の方で色々Bさんとやっています。最初にちょっと寝てしまってもとおっしゃっていたので、安心して、つついあれやったんですけども、日本語でね、読むっちゃうのは、なかなかおもしろいなって思って、色んな本を紹介

していただいたので、読んでみようかなって思いましたありがとうございました。

D：Dと申します。阿倍野区の方で立ち飲み屋をやっております、川浪さんがお客さんで来ていただいています、川浪さんのお話を聞いて、常々仏教ということに関して、勉強したいなってずっと思っていたのです。で、川浪さんに仏教講座してくださいよってずっとお願いをしていて、今回こうしてさせていただいて非常にありがたくて、しかも、今日のお話で、私もすごい疑問に思っていたのが、法事でお経をあげていて、経本を読んでも、何が何だかさっぱり分からないということにすごい疑問を抱いていたんです。そのことを、今日こうして日本語でやっていただいたということは、非常にありがたい話やったなと思います。だから、これを機にまた勉強させていただきたいなと思いました。ありがとうございました。

E：Eと申します。阿倍野区のドーナツ屋で働いておるのですけれども、実家の方は神道なのです。それで嫁ぎ先が浄土真宗でおまつりしてはるのですけど、お母さんがそういうまつりごととか法事ごととかにびっくりするくらい興味のない方で、それで私、そういうことをお母さんから習うってということがなかったものですから、ちょっとそういう、浄土真宗、それから仏教のことを少しちゃんと、ちゃんとではないのですけど、それを知って、娘がいるものから、そういう子どもたちに、自分の家の宗教というものを伝えていきたいなっていうのがありまして、それで今日参加させていただきました。これからもちゃんと本当に知っていききたいな、と思っています。ありがとうございます。

F：浄土真宗本願寺派の僧侶のFと申します。
(お隣の人) Gと申します。ちょっと今日は二

人で、お昼は三角公園の炊き出しの方に参加させていただいて、Aさんの紹介でそれでこの会にも参加させていただいたのですけれども、お経が分かりにくいということは私たちが常々思っております、皆さんに分かりやすいような、ということを考えて、色んな、他の方も、本願寺派のほうでやってらっしゃる方もいらっしゃったので、今回こういう機会を頂いたので、また是非、先生の訳でやらせていただきたいな、と思っております。ありがとうございました。

川浪：この会ってというのは毎月一回ずつやるのですけれども、一つの宗派で二、三回やっていただきたいという風に僕は思っております。次の9月22日ですかね、その火曜日にも戸次さんに来て頂く。で、今日は一回目、僕は常々思っているのですけど、宗教ってというのは言葉で伝わるのか体験するものなのかって、言葉っていうことに今回着目したのですが、次は言葉でないものってというのは、いっぱいありますよね。絵で表現するとか、彫刻で表現する、儀式というもので表現するっていうことで、先程Eさんがおっしゃったように、仏教の中でやはり、お飾りって言うのですかね、仏壇を荘厳する、仏さんを荘厳するお飾りすることとかも、非言語的な宗教の伝達手段だと思うので、次はそういったことに、ちょっと焦点を合わせていただいて。お参り、礼儀作法、なぜ礼をするのか合掌をするのかとか、そういう作法。

E：いつもなんちゃってみたいな感じでやってたもんで、そういうものを、気持ちの方が大事なんでしょうけど、そういう。

川浪：かたちで迫っていくっていうことを。浄土真宗はどういうことを考えて、どういうアプローチをとっているのかっていうのを、最近阿

修羅の像が東京で非常に人気になっている、仏像ブームということがありますし、そういうことも重ねて、ちょっと戸次さんの方にお話、次は9月22日火曜日。また、スイーツは違うところのお店からとり寄せますので、手を替え品を替え、やらせていただきますので、よろしくをお願いします。

H：阿倍野区に住んでいるHと言います。今日はこのデザートを提供していただいたクメールロータスさんから紹介してもらって、こんなあるよっていう。何をするか全く分からなくて来たのですが、聞いてみて、すごく大事なことだなあと。全然漢文で普段分からないのが、意味もすごい、ありがたいこと言っているのやろうけど、その意味を知らないままっていうのはもったいないと思います。そういうのについて考える、いい機会になったなと思いました。

I：西成から来ました、Iと申します。今日お話聞いていまして、やはり日本語訳っていうおもしろい試みをやったというのは、すごく感じました。しかし、やはり言っただけのように、世代によってまったく違うなっていう意識がすごく感じました。やっぱり、訳が分からなくても、お経っていうのはすごくありがたい。僕なんか多分そっちの方に思ってしまうところはあるのですが、もう一方で日本語訳として意味が伝わるっていうのはすごく大切なのですが、その葛藤みたいなものはこれからも、ひょっとしたらずっと続いていくのかなっていうのはすごく感じました。どうもありがとうございました。

3. 宗教間の対話

J：堺から来ました、Jと言います。私は立正佼成会という宗教団体に所属しておりまして、立正佼成会はさっきもちょっとお話に出てきました、法華経の教団で、一仏教者です。ちなみに仕事の方は、新宗連、正式名称は新日本宗教連合会というところの事務局で働いていまして、宗教間の対話とか、そういったことを仕事として連絡調整係みたいな。色んな教団と触れ合う機会が多いのですが、そういった関係で川浪さんとか、Aさんとかとも、普段からお付き合いをさせていただいております。今日は戸次先生のお話を聞かせていただきまして、私もそういう新宗連の仕事に携わりながら、宗教がどういう風に理解されているって言うか、価値をもう一度取り戻していく働きが色々あればいいなあとこののを、常々仕事柄考えさせられるみたいなどころもあるのですが、そういう意味で今日のお話は非常に貴重だったなあとおっしゃっていただきました。私自身も、そういう教学の意味を知って、初めて親がやっていることを理解できたと言うのですか、そういうところもありましたので、やっぱりそれを理解するのは大事ななあと感じさせてもらいました。ありがとうございます。

J：こんばんは。私も立正佼成会から来させていただきました、Jという者です。普段からJさんと同じ宗教団体に所属しているっていうのもありますし、またその新宗連の方で、ちょっとお世話になっているもので、普段から新宗教という色んな教団の方とお話させてもらっているのですね。で、その中で、やはりその新宗教の中では、色々同じような思いであったりとか、似ている感覚であったりとか、そういう部分を共有できる楽しさっていうのを、新宗連っていうところで味わわせてもらっているのですけれども、今回、Jさんの方から、もっと違う、もっと広い宗教っていうのは、一体、Jが

考えている新宗教だけじゃなくて、色んな、僕らがよく言う伝統仏教さん、のそういう部分もちゃんと知っておくことも大事ですよっていうことを教えていただいたので、今回、ちょっと僕、体でっかいのですけれども、小心者なのですが、ちょっと頑張ってお話を聞かせていただきました。本当に今日、そういう意味では、私ら普段、先程ここでお話させてもらっていたのですけれども、訓読というか、漢字ではないとか、なんですけれども、なかなかやっぱりその、書いてあることであったりだとか、っていうところまで意識がいかないっていうか、私なんか小さい頃から親がやっていたもんで、何となく聴いている、その何となくっていう部分も、含めて、漢字だったらもう一つだったんだらうな、とか、そういう風なかたちで、色んな膨らみというか、色んな想像を掻き立てられるような思いでした。先程、二回目は儀式だったとか、っていう部分での信仰観っていう部分を勉強させてもらえるっていうことなので、時間等合えば、また参加させていただきたいと思っておりますので、どうぞまたよろしく願いいたします。ありがとうございました。

L：本願寺派の西本願寺の方の仏教音楽儀礼研究所っていうところに勤めております、Lと言います。だからその研究所の観点で、儀礼とか音楽とか、そういう意味というよりもどっちかって言うとかたちの大事さみたいな、そっちを見直そうみたいな、立場から研究している。だから、意味も分からないけれども、とにかくやってみることで、そのまま、普段の自分では分からないものと出会うっていうか、そういう面があるっていうのも、事実だし、そうやっているうちに、それについてやっぱり意味を分かってくっていくということも大事だし、そのやっている中で分かってく、色んな試みをやっていくっていうことはすごく大事で、それを翻訳

みたいなかたちでやったり、もっと分かりやすくしたり、その試みをやっておられる、という風に理解しました。それを色々反対もあると思うのですけれど、やっておられるっていうので、すごく参考になりました。ありがとうございました。

M：大阪市立大学の都市研究プラザで研究員をしております、Mと申します。普段は大学院生、大阪市立大学でしてまして、宗教とは全然縁がない、環境問題になっていて、特に工場跡地とかの土壤汚染をどういう風に改良していったらいいかっていう、本当に宗教とは全然関係がない研究をしていて、今日は、この建物を都市研究プラザで以前研究会をしたことがあって、何か雰囲気が好きだから、ここでやるイベントにまた参加したいと思って、単純に知的好奇心から参加させていただきました。今日の感想なのですが、今まで宗教っていうのは私にとって、訳の分からない存在でして、家には仏壇があるけれども、近くの神社は神仏習合で、お寺と神社が一緒になっていて、っていうような感じで、何か地域のお葬式には神主さんがいらっしゃるとか、野菜を供えるらしくって、よく分からないなっていうような存在だったのですが、今日は戸次先生の話聞いて、体感するっていうのをちょっと改めて感じました。先程阿弥陀経を朗読された時に、ちょうど窓から冷たい風がふわっと入ってきて、空気が変わったなって、その瞬間にちょっと驚いて、これがその体得するっていうことなのかっていう風に、ちょっと宗教が身近になったかなという感じがします。今日は貴重なお話ありがとうございました。

N：北区の天神橋から来ました、Nと申します。今日は阿倍野プラザを体感したいのと、家が浄土真宗の本願寺なので、お話をお聞きした

いと思いましたが、伺いました。4年前に父を亡くしてから、家の宗教の行事に関わるようになりまして、お経が最初分からなかったんで、自分でインターネットで調べて、その時は意味を理解するんですけど、いつも考えているわけじゃないんで、忘れてしまって、次行ったらお坊さん来ていただいた時にお経をありがたく読むというだけで、何かルーティンワークになってしまっているんで、たまに意識とか日本語訳を読んでいただいたり、自分で読んだりして、ちゃんと意味を分かって理解しないといけないなと思いましたが。ありがとうございます。

白波瀬：大阪市立大学で研究員をしています、白波瀬と申します。私は宗教社会学といって、宗教の研究をするものなのですが、仏教のことは身近すぎてですね、いまいちちゃんと分かっていないところもありまして、家は臨済宗というお寺なんですけれども、法事も何回も出席していましたが、お経の内容についてはですね、ほとんど何も知らないという、そういう状況でしたので、こうやって今回、阿弥陀経の、訳を聞かせていただいて、もともと身近な仏教なんですけれども、もっと身近に感じられたなあと、もっと知る機会がどんどん増えていったら、またその見方も変わるだろうし、もっと皆さんの見方も変わって、仏教に対する捉え方、本当に変わっていくのじゃないかな、と。こういう実践は非常に広がっていけばいいなと思います。ありがとうございました。

O：一昨年大阪市立大学を卒業して、社会人二年目で、今銀行で働いています、Oと申します。本日は貴重なお話ありがとうございます。私は、多くの若い人がそうだと思うんですけど、お経の内容とかも全く分からないまま、そのリズムとか雰囲気とかで先生がおっしゃられていたように、ありがたいなとか、お経を讀

んではる時に、亡くなった人のことを思い出したりする程度しか感じてなかったんですけど、今日初めて日本語訳、普通に聞いても理解できるようなお話を聞けて、でもそれでもまだまだ知識がなかったので、絵本とか紹介していただいて、読んだことあるんだけど、そのどこに仏教観が宿っているのかっていう、そこまで理解できなかったの、また本屋さん行ったりとか、ツタヤに行ってDVD借りてみようかなと思います。そういう身近なところから始めてみたいのかなと思う、そういうきっかけになりました。本当にありがとうございました。

4. 宗教の希薄化

P：Pと申します。都市研究プラザのお手伝い、色々業務をさせていただいております。今日は遅れて来てしまったので、内容等ちょっとお聞きできなかったの、途中からレジュメ見せていただいて、我々の世代がもう、無宗教というか、宗派あるんですけど、そこをあまり意識せずに、いるっていうことで、もう少しそういったことを聞きながらまた伝えていかないといけないかなっていうことで、また次回からは参加したいなという風に思いました。ありがとうございました。

Q：都市研究プラザのお手伝いをしています、隣の大学の大阪府立大学のQです。今日はものを取りに、借りに来てしまいました。ただ川浪さんからは、こういうカフェをやるっていう案内はもらっていましたので、どんなもんかかって。私は親が田辺、南田辺小学校の前に長い間住んでいたの、今日、ここ歩きながら、鶴ヶ丘によく似ている感じの町並みだなあと、この辺をちょっとうろろして、上でお話を伺っている間この辺をうろろして大変申し訳ありませんでした。我が家は神道なもんですから、

父親が死んだ時、神道式の葬式っていうのは、何か知らんけど唸ってみたり、何か歌ってみたり、神棚をこの前買ったばかりで、何をどのようっていうところからやらないといけないので。ある意味では同じ、宗教で、子どもは何も分かっていませんで、改めて色々感じるところも。今日はどうもありがとうございました。

水内：今日はどうもありがとうございました。都市研究プラザの水内です。一応この阿倍野プラザの運営も責任者なのですかね。しておりますので、ちょっとまだ普請の方が、ちょっとまだ手を入れなければならぬところがあるかと思いますが、川浪寺にいつでもまたお布施をいただければ、直していききたいなあとは思っておりますが。今日のお話しですが。僕は今日新宮から、和歌山の間人なんですけど、今日は新宮から電車でちょっと戻ってきて、極楽浄土の新宮から参ってきたんですが、家が和歌山なんで、よう考えたら仏や神様いっぱいあるんですね当たり前のように。高野山に当たり前のように真言宗があって、僕は全然気が付かなかったのですが、嫁さんが貝塚の浄土真宗なので、お経がちょっと分かりやすいのと、きらきらしているものがあんまりないなあとか、卒塔婆がないなあとかですね、お墓行ったら何か、石ばかりごろんごろんとあるなあとかですね、何かそんなことが何て言うか、二十歳くらいまでは普通にあったような感じなんです。ですから法事とかお寺参りとかお墓参りも、何回忌何回忌の時に当たり前のようにあったのです。で、当たり前のようにしびれきらして、当たり前のように何か、音楽として聴く、音楽と言うか、あれあの音楽、お経の読み方、音調を変えたらどんななるかなあとかアホなこと考えながら、あれちょっとでも変えたら全然違うようになるんやろなあとか考えながら聞いてたりして、ああいうのって何か音階があるんやろ

な、とか、あのお香の匂いと、何かそんなのが自然にあったんですね。今ふと思うんですけど、僕もそのホームレス支援とかいう現場で、キリスト教の影響がものすごく強い。北九州でホームレス支援やっている団体っていっぱい行ったことあるんですけども、こそと参列する人が、やっぱりこれ仏教やないと感じ出えへんわなあというんですね、やっぱりあのお香の匂いとかないなあ、何かどうも、言うてること分かるっちゃうのはようないな、ですね、そういう話もあって、やっぱりそういうので、人を看取るという時の、あるいはそれを偲ぶという時はやっぱり肌身で感じるとやっぱりそんな方が入ってくるのかな。それは言語表現ができないですけども、そういう意味で、逆に最近、法事は全く知らない。お坊さん見たことないっていう世代もおられるっていうことが分かってきてですね、全く知らないのですね。全く無なのですね、そういう知識が。そういう家が段々育ってきて、その子どもさんが増えてくるっていうことは、僕らみたいに自然に解釈しようとはしてないけども、何かあるような仏教でないような。そういったものが日本にできてきた時に、一体仏教心って何やろな、って思ったりもします。生活困難の人の看取り、川浪さんも戸次先生も非常にやっておられて、それはやっぱり日本の持っている仏教心っていうのになるのかなと思うのですけど。それがなくなった時に、何なのだろうなあとか、ちょっと考えたりもしています。韓国とか香港とか中国とか台湾とかよく行ってるのですけども、仏教っていうのはやはり見方が全然、韓国みたいに儒教がね、仏教をなくしてしまって、お寺が全部山の中にある。韓国人がよう言うのですね、留学生が。街の中にお寺がある。結構びっくりするらしくて、どっちか言うたら、時々街にあるのですかね、何か色んなことがあって、同じ仏教と言っても、今度かなり色んな意味で違うので、また

そういう面も勉強していきたいな、と思っております。今後一ヶ月にっぺん、こういう形で開かせていただきたいと思いますし、今日は本当言ったら都市研究プラザの研究者ですね、実はあっちこっち出回ってまして、主力部隊がちょっと台湾に行っていたりですね、調査に行っていたりと、来月は韓国に行っているのですが、ちょうど戻って来られますので、主力部隊もまた来ると思います。結構この宗教の問題は重要やなと思っておりますので、今後ともよろしくお引き立てのほど、お願い申し上げます。伝達手段とはまた、今日もおいでいただいた方には連絡させていただきますので、また来月戸次先生お話をいただくとお思いますけれども、今後ともよろしくお祈り申し上げます。どうもありがとうございました。

5. 家の宗教、個人の宗教

R: 水内の息子です。まさか最後に話すとは思ってなかったのですが、僕は1987年生まれにしては、宗教とかちょっと興味あった方なので。さっき真言宗って簡単に言ったのですが、僕の本家は200年300年くらい前はお寺やってまして。高野山直系やったのですね。それは曾祖父、ひいおじいちゃんの代は真言宗なんですけど、簡単にころっと根来のお寺にかわたりして。ふわっときてるんですけど。僕は親父よりもちゃんと法事も行くし、お彼岸もお盆もちゃんと親父の代わりにやっているのですけど。さっきホームレスの、ちょっと言ったのですが、日本ってお墓は家じゃないですか。ヨーロッパは個人ですよ。で、だからホームレス支援になるのかな。神様の前に直接人がいるから、ヨーロッパや教会の方々はホームレス支援とかをさらっとやるのかな。やっぱ日本の場合は、ワンクッション家が、儒教社会は家を挟むのかな、とちょっと思いまし

た。そんな感じです。

川口: 大阪市立大学の大学院生で、博士課程の3年にいます、川口夏希です。色々さっきからお話で出ているGCOEでは、水内先生がユニット長をしている社会包摂ユニットのリサーチアシスタントをしています。去年くらいからですね、川浪さんとか水内先生とか黒木先生とかと、この阿倍野プラザとか、あとこのレリジョンカフェの話をしていて、それでやっと今日、第一回目が実現したなあと、すごく嬉しく思っています。私は普段、消費文化とか都市文化の研究をしていて、その話を川浪さんとしていた時に、こういう宗教のお話と、あとちょっと街でお茶をするとか、雑貨を見て楽しい思いをするとか、そういうのを繋げられないかな、という話をしていたので、今日は皆さんに美味しいお菓子を食べて、色々お話をさせていただいて、すごく嬉しく思っています。またよろしくお祈りします。

黒木: 大阪市立大学の都市研究プラザの特別研究者をしております、黒木と申します。主任補佐員というか、お手伝いをメインになっているのですが、こうやって皆さんに来ていただいて、本当にありがとうございました。こういう場を色々開こうという話を川浪さんと一緒にやっていった中で、やっぱり全然違うフィールドの人とか専門分野の人とかがこういう場所に集まって、宗教を一つのテーマにして語り合う場っていうのは本当におもしろいことだなあと考えていて、そこでまた色んな人の繋がりができていって、新しいことが生まれていくと、すごくおもしろいことだなあと考えています。また来月も開きますので、是非お越しください。ありがとうございました。

S: すみません、遅れてきましたSと申します。今はOLをしているのですが、学生

の時に釜ヶ崎で炊き出しをやったことがきっかけで、色々参加させていただいてまして、家は日蓮宗で創価学会の女子部員なのですが、私が19歳の時に発心をしまして、毎朝毎晩、お経を唱えながらやっているのですが、こういう場所に来ることで、普段全然聞くことのできないお話、今日は残念ながら聞くことができなかったのですが、聞いていて、お話をしていけばいいなと思っています。マザーテレサさんが、愛することの反対は憎むじゃなくて無関心であるってという言葉が言われていて、だから、私は、例えば創価学会員だから他の宗教は別にどうでもいい、知らないってのは違うなってすごく思いまして、まだまだ、浅いところが多いのですが、これから一つ一つ、深く聞いていけばいいと思いますので、よろしくお願いします。

A：金光教のAと言います。教会をしております、羽曳野で教会をしております。川浪さんとは釜ヶ崎の関係とかで知り合いました、こういう場がいいなと前から話をしていまして、今日は貴重な話を聞かせていただいて、勉強になりました。ありがとうございます。

川浪：川浪と申します。普段は、河内長野にある公園の仕事をやっております、この家はほんまにいい家でどうぞ皆さん、もっと有効活用していただきたいと思っておりますので、またよろしくお願いします。来月も9月22日火曜日やっております。皆さんにメールでお知らせしたりですね、ホームページを見ていただいたりして情報を発信していきますので。本当に浄土真宗ばかりではなくて、神道の方、金光教の方、創価学会の方、色々いらっしゃるの、どんどん、違う宗教のお話を聞いてですね、同じだなあと思うところと、違うなあと思うところ。僕自身は戸次さんの、南溟寺というところ

に所属している僧侶ですが、僕の家は別にお寺ではなくて、おじいさんは生長の家という、新宗教の道場をこの近所でやりましたんで、こういうのをやっぱり開いて、おじいさんにどんどん一歩ずつ近づいて行って、浄土真宗から離れていくような。自分でもちょっとびびっております。また皆さんとおいしいお菓子を食べ、またEさんのお勤めのあたりきしやりき堂のドーナツも、沖縄ドーナツもまた出てくると思いますので、また皆さんよろしくお願ひします。

戸次：思っていた以上におもしろそうな人がたくさん来ておられましたので、私もすごい刺激になりましたので、本当にありがとうございます。今日のような話で良かったのだろうか、ちょっと心許ないのですが、もういっぺん、第三回のお話ということで来月は、先程もご意見が出ていました、仏教の仏事作法の基礎知識みたいなこと。これは宗派によって違うのですが、でも原点に還ればお釈迦様の教えと行動の中で、三帰依という基本的なことがありますから、そういうことから、今の儀式がどうやってきたのか、それから仏像の話とか、仏具とか飾り物とかですね、建物も含めて、非常に大きな時間と空間の狭間の中で育まれてきた芸術としての仏教。ですから、仏像という話もありますので、私も仏像のことをなかなか大好きですから、今ちょっと仏像ブームでね、阿修羅がブームですので、実は私は阿修羅が大好きで、阿修羅にはかなり詳しいのですが、阿修羅のこと喋りだしたら五時間くらいかかるのですが、それをダイジェストして、阿修羅論を含めてやってみたくて思っていますので、またよろしくお願いします。今日はどうもありがとうございました。

阿倍野Religion-Cafe



阿倍野中継の会館を会場にした阿倍野に於ける中継カフェ

I. 宗教と言語表現

「カトリック入門 ～聖書も聖詔も6訳しなす～」・・・P28-50



■日時: 2009.11.26(火) 18:30~21:00

■講師: 本田哲郎(ほんだてつろう)さん

1942年生まれ。上智大学、ローマ教皇庁立東京
研究所卒業。フランススコ全訳および、新井謙次聖
書の翻訳に専事。カトリック司祭、社会福祉法人「あ
るさとの家」副代表員。

■スィ ッ

ドイツでアリス・マスを逢った時分に受けられたシュテート
ン・ホルン国立大学聖書学研究所のアリス・マスの特別研究員
の助言者平野さんの提言です。

「カトリック入門 -聖書を原語から訳し直す-」

2009.11.25 (水) 18:30 -21:00

■講師：本田哲郎（ほんだてつろう）さん

1942年生まれ。上智大学、ローマ教皇庁立聖書研究所卒業。フランシスコ会および、新共同訳聖書の翻訳に従事。カトリック司祭、社会福祉法人「ふるさとの家」運営委員。

謎解きみたいになしながら。

1. ベストセラーとしての聖書

川浪：それでは、本田神父にお話をさせていただきます。よろしくお願いします。

本田：よろしくお願ひいたします。ご紹介いただきました、本田哲郎と言います。

今、住んでいるところは釜ヶ崎の中で、私は個人的には主に野宿を強いられている人たちの散髪をやらせてもらってまして。大体、毎日30人くらいの散髪をしています。

今日は聖書の翻訳を通して、カトリックというのはそもそもどんな性格を持っているのか触れることができればいいのか、と、そんな思っています。

カトリックで、教えの源泉というのは、仏教で言う色んなお経と同じように、旧約聖書と新約聖書になります。旧約聖書はヘブライ語、一部、アラマイ語で書かれている。大体このような。ご承知の通り、ヘブライ語は、今はユダヤ人たちが、イスラエルの人たちが、聖書のヘブライ語を復活させて、現代でも使うっていうね。これが、新約聖書のギリシャ語ですね。こっちの方が馴染みがありますね。ご承知の通り、ヘブライ語はアラブ語と同じように、右から左に読むのですね。ギリシャ語は、私たちが慣れている左から右。そういうことを楽しみながら、



聖書は、隠れたベストセラーというふうに言われていて、世界で一番売れている本ということらしいのです。信仰をもって見るか、あるいは単なる関心で見るとか、教養として読むか、それは違いますが、少なくとも一番売れている本らしいです。

ただ、隠れたベストセラーになるもう一つの要因があって、ある一つのキリスト教宗教団体が、とにかく聖書を配布している。再版を重ねている。そういう状況になっています。

普通、カトリック教会では聖書の翻訳というのは、その国の司教団というか、カトリックの統治メンバーですね。日本地図を大きく16のブロックに分けています。それぞれに教区をつくって、その責任者が司教と言うのですけどね。その司教たち16人の司教協議会というのがあって、そこが認めない翻訳は公認の聖書とは見なさない、と。そういうことがあったりします。

カトリックとプロテスタントの違いなんかは、大体お分かりですか？

同じキリスト教でも、大きくは、カトリックとプロテスタントに分かれています。以前は、旧教と新教、旧教は古くからあるカトリック。新教というのは、カルヴァンやルターなどによる宗教革命以降におこったプロテスタント教会というものが存在するわけですね。

けれども、宗教団としての悲しい性というか、せっかく、古い体質を持った、ひきずった、カトリックに対してプロテストする宗教団体ができたにも関わらず、いつの間にか、宗教団ですからね。組織としての宗教ですから、似たり寄ったりになってしまう。権威主義であったり、自分たちが既に築き上げた新訳に引き継いできた解釈以外は聖書の翻訳と認めない、とかね。カトリックもプロテスタントも大体同じようなところがあったりします。

2. 解放の神学の経験

皆さん、新聞とかラジオ、報道関係で以前は聞いたことがあると思いますけど、解放の神学っていう、ブラジルなどの中南米で起こった聖書の再解釈の運動があります。本当に貧しい農民が中心になって、農民の集会みたいなものがある、そこで一緒に聖書を読んで、初めて本当の聖書のメッセージが伝わってくるはずだ、という神学運動が始まって、フィリピンとかね、インド、パキスタンなどのかかなり貧しい国々で浸透していたことがあります。

でも当然、解放の神学に対する揺り戻しの動きはしっかりあります。それは、ある意味で、

日本での解放同盟の働きのおかげで、人権とか人としての尊厳というものが、一般市民や教育の場、それから役所関係までかなり浸透しました。そういう意味では、すごい働きだったのだけれども、今、在特会とかね、ああいう反人権、反外国人の取り組みが堂々と市民デモをやるような時代に揺り戻っているフシがある。それと似たような動きなのかな。右にずーっと行ったら、左へと、かなり大ぶれな動きがあるわけですね。

そういう中で、キリスト教というものを眺めていくと、従来の新訳で、もうカバーしきれない、つじつま合わせが間に合わない、この社会の出来事がいっぱい出てきているわけですね。

そういうことと同時に、もう大昔から、宗教の世界がいつも落ちこぼしてきた、社会の周縁に追いやられた人たち、底辺に置き去りにされた人たち。その人たちは、どう政権が変わろうと、全然変わりなく落ちこぼされていつている。そして、時々まぐれで、変な宗教的な哀れみの心とか、施しの精神とかね。一見、まぐれ当たりで底辺に立たされている人たちとのコミュニケーションがちょっとは始まるのですけれども。

だけど、いつまで経ってもそれが本当の意味で大きな動き、渦にはなっていないのです。宗教そのものとして、哀れみとか施しっていうものを、宗教サイドはよしとしているのですけれども、それを受けねばならない側の立場から見たら、それは、黙って放っておかれるよりもっと傷つけられる。哀れまれること、施しで何か物を融通してもらおうこと。そういうところに、なかなか気が付かない。

解放の神学なんかでは、そこが逆転していて、

そういう痛みを知っている人たちこそ、聖書の本来のメッセージをちゃんと、感覚で感じ取っている。それに共感する神学者たちが、きっちり言葉化していく。そういうかたちで、できていたのですけれども、それがまた元に戻りつつある。

私もそんな中で、今から21年前に、釜ヶ崎に生活の場を移すことができたのです。そして釜ヶ崎へ来て初めて、従来の聖書解釈というのが、どれほど中流以上の人たちにとって都合の良い解釈であり、そして既存の体制を守っていく上でとても都合が良い説明になっていたのか気付かされました。

それ以前、ローマの神学校を出て、東京に戻って来てからすぐ、一つの司祭養成所みたいなところ、神学院と言うのですけれども、その神学院で聖書学を教えたりして。その時同時に、新共同訳という、聖書の色々な訳があったのです。口語訳とかね、文語訳だとか、古いラゲ訳とかね。色々な訳はあったけども、もう少し皆で、エキュメニカルな、カトリックもプロテスタントも、あるいは日本キリスト教団に属していない教派の人たちも、一緒に使える聖書を、共通のものを翻訳しよう、ということで、14、5年がかりでつくりあげました。

私もローマから帰ってきてからすぐ、その翻訳委員の編集員というかたちで参加したわけですが、そういう中で、やっぱり学者たちの限界というものが、はっきりと見えてきました。どの分野の学問にしても、水内さんたちの学問にしても、ある程度、先達の築き上げた、たどり着いた、今のところ一番頼りになりそうな学説というものを、一応踏まえて、それに反論するにしても、踏まえて十分咀嚼した上で、

ここはこういう意味でこれでは不十分だ、というようなものをやっていくということが学問の世界では常識ですよ。その到達点を踏まえて、小さな手直し程度しか、大体、学会というのは認めないですよ。全部ひっくり返してしまうようなことは、学会の性格上、ほとんど無理みたいですよ。

だから、よっぽどカリスマ性のある人でないと、そういうところまで踏み込めないのです。聖書学も同じです。だから、私たちが尊重すべき先達の、まだ生きている聖書学者たちは、彼らがまだ若い頃、自分たちの先達として、その人たちを指導してくれた聖書学者たちを十分踏まえてはいけません。そういう仕組みがあって、基本的に学問というのは、代々そう簡単には変わらない。同じ路線です。ちょっと手直し程度はありけれども、基本的には繋がっていくしかないのです。それだと、やはり、相変わらず昔からの、社会的弱者の視点が置き去りにされたままなんです。そんな限界が見えてきました。

3. 私訳の試み

そして、私なりに破門を覚悟したのです。カトリック教会には、旧教と道徳に関する書物を公にする場合には、司教の所属している、司教の、何も問題はありませぬ、という承認があるわけですね。それが無いものは、教会の中で販売はできないし、強いてそれを強行すれば、教職停止とか、そういう断罪が下る。大学で教えることは認められなくなる、とかね。そんなような歯止めがいっぱいあるわけです。

だけど、釜ヶ崎の視座から、従来、自分が属

してきた教会、キリスト教の教えっていうものを見れば、どれほど屈辱的と言うか、どれほど独りよがりか。新約聖書にもともと書かれている、あのイエスの生涯とは全く矛盾した教えが、教会の教えとして開かれてしまっている。それは、やはり放置できない。最悪、破門されてもいいや、と。そういうことで、自分勝手にやっていました。そして、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの福音書の翻訳を始めて、その後、パウロの書簡、ローマの人々への手紙とか、ガラテヤの人々、コリントの人々とか、そういうものの翻訳を続けて、分冊という形で本を出しているんですけども。

その途中、ある司教団からクレームが、やはり来ましてね。その司教団のクレームを取り次いでくれたのが、大阪教区の司教さんなんですけれども。若い時からずっと付き合いのあった人で、私のこともよく分かっている人なんですけれどもね、その彼が、こちらの立場を考えてくれてね。「司教団から色々取り沙汰されているけれども、本田さん、こういうふうにしたらどうですか」と言って提案してくれたのがあったのです。それは、私の方から条件を出して、今の作業を続ける、という。その条件として提案してくれたのが、一つは、私が出すこの本には必ず、どこかに司教団公認の朗読聖書ではない、と一筆を入れるというのと、もう一つは、日本のカトリックの世界で唯一の広報誌と言われているカトリック新聞というのがあるのですけれども、そこに宣伝はしないっていうのと、それから、本の体裁を教科書っぽくする、というもの。聖書っぽくないっていうことでした。大阪教区の司教さんは「本田の方から司教団に、その三つの条件を出すことによって、今の作業を続けることができると自分は思う」と言って、そう言ってくれたのです。

私は、「司教さん、従来使っている聖書が全く不十分で、弱い立場に立たされている人たちが、ますます弱い立場へ追い込むようなことが、キリストの言葉であるかのように、あるいは教会のメッセージであるかのように、これまでずっと、そういうかたちの聖書しか出されていない。それでは、本来の聖書の原文の持っているメッセージとは、ものすごくずれてしまっているから、従来聖書の私にとってあんまり聖書とは思えない。これこそ、私にとっては、原文の忠実な翻訳だと思うから。司教団の方から、その三つの条件は、あんた守りなさい、と言って押し付けてくるのだったら、それは仕方なしに受けますよ。だけど、私の方から、この三つの条件で何とか勘弁してくださいっていうのは、立場上、それはできませんわ」と断ったのですよ。

そしたら、「じゃあ、司教団の方からお願いとして、その三つを守ってください」と言われて。例えば、最初に出した聖書のはしがきのところにね、こんなふう書いてある。「本書はこのような視点に立って、聖書の翻訳をしています。従来聖書とはおもむきが異なることは確かです。けれども、翻訳に用いた定本は、同じものです」ユナイテッド・バイブル・ソサイエティーズによる、ザ・グreek・ニュー・テストメントの、サード・エディションという赤い本、あれがそうなのですね新共同訳の原文もそれだし、これまで、従来、色んな聖書が訳されて、新改訳もそうだし、皆、同じ原文なのですね。それを使って訳したのです。

こういうふうに、向こうが条件として出した、司教団公認の聖書ではない、という一文をちゃんと入れて。ただ入れるだけじゃ癪だから、「なお、本書は日本カトリック司教団公認

の朗読聖書ではなく、貧しく小さくされた仲間たちこそ、地の塩よ、世の光であり、彼らこそ、主が輝きを現すために植えられた正義の樫の木であるという、福音を意識した、新しい聖書翻訳の試みです」と、こちらのポジティブなスタンスもはっきりそこに併せて書きました。

それから二番目の、カトリック新聞に宣伝はしない、というのは、それはちゃんと守っています。だけど、カトリック新聞に宣伝しなくても、けっこう、口コミか何かでね。とりわけプロテスタント教会の方たち。特に牧師さんたち、教師の人たちがたくさん買ってくれているのですね。

私の翻訳した聖書は新世社というところから出ています。新世社が出す本は非常に、人権の問題とか、人が人として、というような視点というか、解放の視点で出版を集中的にやっている会社で名古屋にあります。そこで出している本の中で、一番の売れっ子なのであって、これがね。

だから、カトリック新聞にコマーシャルを出さなくてもいい。そこの社長さんが、「自分にとって、これこそ、本当の意味での聖書だと思うから」と言って、「本田さんは司教団の指示通り、教科書っぽくするつもりであるなら、自分の方から司教団に言ってあげます」と。「その代わり、自分の責任において、いかにも聖書っぽくやります」って、金文字でね、黒い表紙でね、聖書らしくわざと装丁して、その点だけはちょっと違反しているのですけどね。そんなことも、あるということなのですけどね。

ただ、何十年も聖書の研究をずっとやっていて、今思えばね、「ああ、聖書ってそんなに読

まなくてもいい本なんだ」というのが、今たどり着いた結論なんです。聖書勉強会とか、聖書研究会とか。大体、聖書勉強会、聖書研究会に集まってくる人たちっていうのは、やっぱり時間にゆとりがある人が多いし、生活にそんなに困ってない人が大部分。だから、「そういう人たち相手に聖書をいくら読んでも、たいしたことないな」ってね。まして、従来の翻訳聖書は。ますます、体制をいかに守るか。そしてそこに、信仰とか神とか、霊的な働きとかっていうのを浸透させていくと、もっと強く、カルト的な強さを持ってしまうわけでしょう。

だから、釜ヶ崎に来てから特にそう思うようになった。文字に馴染みがない先輩たちがけっこういる。そして若い人たちでも、文章をばば一と読んで大体の意味をばつとつかむっていうのが苦手な人ってけっこういるんですよ。

そして、私たちより先輩の年齢の人たちの中には、実際に小学校を途中までしか行けなくて、後は家の仕事を手伝うしかなかった。その後、分からないまま中学まで行ったけども、中学でついていけなくて、学校もちゃんと行けなかった、行く気がなかった、とかね。そんなのでずっとくると、やっぱり文字通り、字が読めない、という先輩たちがけっこういたわけですよ。だけど、読めないって、自分の方から言えないし、つい、読めるふりをせざるを得ないと言うか。そうすると、そういうところがますますしんどくなって、そういう所には行きたくない、とかね。そんなふうになる。それが一つありますよね。

それと、中学、高校まで普通に行けた今の若者。30代、40代くらいの人たち。文字が読めないわけじゃないのだけでも、文字を読むこと

によって、何か大事なことを把握していこうという、そういう習慣と言うか、そういう環境になかった人たちがけっこう大勢いて。特に貧しい家庭で育ったりとか、アルバイトをしなればとてもやっていけなかった。家族をアルバイトで養っていた、そういう人たちもいるわけですよ。

そういう人たちを目の当たりにして一緒に礼拝なんかに参加していると、そう言えば聖書が執筆された頃、紀元50年くらいから100年くらいまでの間、新約聖書が成立したのはそれくらいなのですけれども。その頃、実際には聖書がまるまる、誰か個人が持っていたってことはまずあり得なかった。当時、紙というのは高かった。パピルスとかね、あるいは羊皮紙って言って、羊の皮をなめして、字を書くようにしていたでしょ。だから決して文字文化ではなかった。そういう中でもちゃんと伝わるものがあるはずなのです。

だけど、今は聖書がないと、キリストの教えってというのは伝わらないかのような錯覚を持たされてしまっている。だから、歴史的に見ても、釜ヶ崎の現実と、ずっと原始キリスト教団、あの頃の世相と比較してみて、たいして変わらんかな。そんなに聖書、聖書と言うはずがなかったっていうね。

だから、例えば、こんな細かい字で、日本語の訳ですけど新約聖書、旧約聖書、全部これ一冊に。これは新共同訳の聖書ですけど。これだけを、もしずっと読むとしたら、すぐ眠ってしまうような退屈な本なのですけどね。

4. 隣人になるということ

さすがにパウロはもっと現実的な宗教活動家だったみたいで、「聖書なんて全部を丸暗記しなくていいのだよ」って、こんなふうに言っているのですね。「あなたたちは、互いに大切にし合うこと以外、誰に対しても何の借りもあってはなりません。人を大切にしているなら、その人は、律法を全て守ったことになるのです」と。律法って言うと、また、パウロの時代、イエスさんが生きていた時代も含めて、完全にあの人たちはユダヤ教徒なのですよ。

もちろん、教会サイドではね、教会の出発点はイエスが十字架の上で磔にされて殺されて、そして弟子たちがおろおると、戸という戸に鍵をかけて、中にひっそりと集まる、小さな犯罪者集団というか、そんな感じで集まっていた。そこに聖霊が働いて、勇気を持つようになって、全世界に宣教を始めたのだっていう解釈からキリスト教っていうものが始まったと考えます。だから当然、パウロもキリスト教徒という位置付けなのですから、聖書を原文で、いくらきっちり読んでも、そうは読み取れない。パウロにしてもイエスさん自身にしても、あくまでも自分は、宗教としての所属はユダヤ教なのです。そして実際に、イエスが磔にされて、ユダヤ教徒として死んでいったわけですけども、その後、その聖霊降臨というか、ペンテコステというか、聖霊が働いて、みんなが勇気を持って全世界に宣教活動に出向いたその時、どういう出向き方をしたかっていうのが、使徒行伝っていうものに記録されているわけですけども、それを見れば見るほど、彼らはユダヤ教の会堂に行かずずっと話をしていたことがわかります。つまり、ユダヤ教徒の自覚を捨ててない。

だから、ここで言っているのは、モーセの律法っていうのは、旧約聖書全体を指す言葉。だからそれは、「人を大切にしているなら、その人は律法を全て守ったことになるのです」。そして、モーセの十戒の一部を引用してね、「不倫をするな、人を殺すな、略奪するな、人のものを欲しがらな」とかって、モーセの十戒の四つを挙げているわけですがけれども、その他、どんな掟があっても、この一つに集約されます。すなわち、「隣人を、自分自身のように大切にしてください」。これだけだって言うのですよ。

「人を大切にすると」とは、隣人に不当な仕打ちをしないということです。それで、人を大切にすることが、律法の完全遵守と見なされるのです。それをもっと絞ったかたちであらわしたのがレビ記19章です。レビ記19章では、隣人を自分自身のように大切にする時に、その隣人が誰を指しているのかって言うと、自分に一番近い人ではないのですよね。隣人っていう言葉を翻訳では使うけれども。文字通りのヘブライ語では、「仲間」っていうような言葉で使っていますよね。

イエス自身が、隣人とは誰かっていうことを、はっきり具体的に示した箇所があります。

エルサレムからエリコに下っていく途中、追いはぎに遭いました。ぼこぼこに殴られて、服を剥ぎ取られて、半死半生の状態で放置されていました。その側を色んな人が通っていきました。だけど、見て、「あ、やばい」と思って道の反対側に避けて通っていきました。レビ人が通った、祭司が通った、と物語を説明するんです。だけど、一人のサマリア人が通りかかって、ふっと気が付いて、わざわざその人のところに寄って行って、ロバを降りて、そしてぶど

う酒で傷を洗って、オリーブオイルを塗って、包帯を巻いて、そして自分の乗ってきたロバに乗せてやって、エリコまで下って行って、自分が泊まる予定の宿屋に彼を頼んで、用事が済んだらまた帰りに寄りますから、それまでの間、この人の面倒をお願いします、と言って去って行った。

そして、イエスが質問した人に向かってね、「その追いはぎに遭った人の隣人になった人は誰か」と問うたら、その質問した人がね、「その看病に関わった人です」って答えたわけなんです。「隣人を必要としている人の隣人に、あなたがなる」。これは「隣人愛」という言葉で教会が盛んに言っていることなのです。

だけど、なかなか教会の説教とかメッセージとか勉強会では、聖書にはっきりそういうふう書いてあるにも関わらず、あなたの隣人を大事にしないね。まず、隣人とは誰でしょう。家族でしょう、とかね。あなたが属しているこの教会の仲間たちでしょう、とかね。職場の同僚でしょう、とか、いつも自己中な発想でしか、隣人を説明しない。だから、そういうキリスト教理解をしている限り、自分の側にいない、社会的に落ちこぼされて、自分たち一人ひとりが何らかの形で加担して、後回しにしてきた、その人たちのところには、何かで本当に行かない限り、隣人になり得ない。だから、知らんぷりして、自分たちの周りを固めて仲良しごっこをして、それで「私たちはキリストの教えを守っています」、「信者です」って。そんなところに収まってしまうわけですよ。それは違うだろう。イエスは、そんなこと言ってないよ。隣人を必要としている人の隣人に、あなたが初めて、隣人として、自分が大切なるようにその人も大切にするとっていうことが生き

てくるっていうね。

カトリック信者の曾野綾子さんの発想の仕方も、三浦朱門さんの発想の仕方も、そのレベルなのです。曾根綾子さんの連れ合いの三浦朱門さんは、かつての教育審議会の会長をやっていて、その時に、とんでもないことを言っているわけですよ。「できない者は、できないままで結構。戦後50年、落ちこぼれの底辺上げることばかり注いできた努力を、できる者を限りなく伸ばすことに振り向ける。100人に1人でいい。やがて、彼らが国を引っ張っていきます。限りなくできない、非才・無才には、せめて実直な精神だけを養っておいてもらえばいいんです」と。でもカトリック教会の信者は、「あの有名人の三浦朱門さんがうちのカトリックのクリスチャンなんだよ」と、自慢げに思っているわけですよ。「あの有名な小説を書く、曾野綾子さんが、私たち、同じカトリックの信者なんだよ」と。そんな発想でいるっていうことは、全く同じ価値観。聖書をいくら読んでも、逆に読めば読むほど、そういうすり込みがなされてしまう。「優秀な人たちは、それなりにエリートとして育て上げることが、ひいては、いつかは底上げにも繋がるでしょ」という発想ですよ。

だけど、例えば釜ヶ崎もそうだけでも、一つの社会の底ですよ。釜ヶ崎とか山谷とか、そういう寄せ場だけが底だとは思っていませんけどもね、そこも底の一つ。そこから見ていると、どんなに日本の景気が良くなって、色々な文化人が日本にやって来て、なんだかんだ、先進諸国に恥じない日本国であるっていうところまで持ち上がっていたとしても、底は全然変わっていません。上が上がれば下もずっと上がっていくかって言うと、とんでもない発想で

すね。イエスの価値観っていうのは、いつも底から見る。そういうことなんですよ。

5. 底辺を生きたイエス

ですから、私が自分なりの翻訳を始めた時の最初の思いを、ここにちょこっと書きました。「なぜ、聖書の新しい訳を試みるか。止むに止まれず、福音書の私訳を試みました。やってみて良かったと思います。皆さんが持っている聖書と、ぜひ読み比べてみてください。できる限り、原典ギリシャ語に忠実に、できるだけ分かりやすく訳したつもりです。福音って何か、少し見えてくると思います。釜ヶ崎で毎週日曜日に大勢の労働者と一緒にミサを捧げ続ける中で、一つの思いが膨れ上がってきました。この、苦勞を舐め尽してきた先輩・仲間の労働者に、福音のすごさがピンとくる聖書があれば、という思いでした。しかしそれは、よくよく思いをこらしてみれば、私自身にピンとくる、腸に響く日本語の聖書が欲しいという願いに他なりませんでした。私たちキリスト者の多くは、聖書を読んで、福音が少しは分かったつもりです。分かったつもり部分を、聖書勉強会などで、参考書から得たことで膨らませて、値打ちをつけます。それで、ますます分かったつもりになるわけです。私たちの誰よりも、ナザレのイエスの境遇に近く、身を置く、世の小さくされている人たち。例えば、寄せ場の日雇い労働者にピンとこない解釈や言い回しがイエスの境遇とは程遠い生活に浸っている私たちに分かるはずはないのです。もし、分かったと思うとすれば、それは怖い話です。自分の価値観に引き寄せて聖書を読み、イエスの福音とは似て非なるものを頭に描いて、これまでの自分の生き方を多少の手直しをするだけでよしとする、

他の福音を聖書に読み込んでいる可能性が高いからです」と。

聖書をギリシャ語の原文で読めば読むほどです。福音書の主人公、ナザレのイエスは、穢れに満ちた罪の子として家畜小屋で生まれることを余儀なくされ、幼くしてヘロデ王の殺戮の手を逃れて、両親とともにエジプト難民の憂き目を見るという、悲惨な生い立ちでした。

当時はユダヤ教の世界ですけどね。モーセの律法「汝、姦淫するなかれ」という、十戒のうちの一つですよ。それに反するようなことであれば、明らかに罪人。姦淫そのものをした男女は、石殺しと言って、ユダヤ社会では、死刑の執行という、大体が協議制で、手ごろの大きさの石を一人ひとり投げて、皆が死刑執行に参加する。そういうことがあったみたいで、石殺して決まっていたくらいですね。そして実際、マリアが許婚のヨゼフの与り知らないところで妊娠してしまう。聖書はそれを、聖霊による懐胎だ、聖霊によって妊娠したのだ、っていうことで、上手に説明はしているけれども、だけど、その部分で上手に隠しても、イエスが大人になってからナザレに戻った時、村人から何て言われるかって言うと、「石切りのせがれ」「あのマリアの子」という言われ方をする。それは、マルコ福音書にはっきりとそのまま書かれているのですよね。

つまり、「マリアの子」と、イエスを指して言うっていうことは、ユダヤのヘブライの文化に全くそぐわない。あそこは、完璧な男性社会なのですね。そして、「だれその子」と言う時には必ず、父親の名前以外使わない。そこに父親の名前を当てはめられないで、「マリアの子」という言い方をする。「マリアの子」っ

ていうことは、父親が分からない子っていうのは、村人たち皆知っていたっていう、そういうことがはっきり書かれている。しかも、それを差別的に村人たちが言っていたっていうのは、よく分かる。その時のイエスのリアクションが、「預言者は、家族とか故郷では軽蔑されるものだ」という、軽蔑の言葉としてしっかり受け止めているわけだから、「マリアの子」と言われたことは、罪の結果、生まれているという認識が、ばれれば良かったということですよ。

だから、イエスは、よく聖書では、幼稚園なんかではね、ヨゼフ、大工さんの子どもとして生まれて、イエスも大工さんでした、っていうふうに、上手に説明しているけれども、大工さんだったら、ギリシャ語で、オイコドモスっていう言葉が、他でも聖書の中に出てくるんですね。オイコス。オイコスっていうのは、家。ドモスというのが、つくる人。家をつくる人、大工さんですよ。

だけど、イエスについて言う時、ヨゼフについて言う時は、テクトンっていう言葉、全く違う言葉を使う。テクトンっていうのは、切る人、掘る人、削る人。大工さんが、建築の素材として使う石のブロックをつくる。山から掘り起こしてきて、岩を縦横何センチ、高さ何センチ。そういうブロックに、朝から晩までノミと金槌で刻む、そういう日雇いの仕事、テクトンなんですよ。

だから、イエス自身、本当に底辺を這いずり回って生きる人だった。それは聖書そのものにちゃんと書いてあるのに、そういうところをきっちり踏まえない。踏まえにくい翻訳になっている。気付きにくい翻訳にされている。イエスは大工でした、と言われたら、例えば、どこ

の国でもカナダでもアメリカでもヨーロッパのフランスでもイタリアでも、大工って言ったら、別に貧しさとは関係ないのですよ。むしろ、田舎に行けば行くほど、有力者の部類に属する。

だから、イエスさんっていうのは、決して貧乏たれじゃなかったよ、っていうところで印象付けてしまう。その彼が、謙遜にもへりくだって、貧しい人たちのところに降り立ったのです、っていう、ここにもう一つライトアップするわけですよ。 「そうだ、キリストに倣うっていうことは、私たちが弱い立場の人たちのところに降り立つことなのだ」 「へりくだって、何かしてあげることなのだ」 みたいな、そんなふうな印象をしっかりと持たされるわけです。これがキリスト教の教えなんです。

だから、キリスト教徒が普通に、悪気なく、善意でやっていることが、たいていのそういう行為っていうのは、例えば、釜ヶ崎のしんどい思いをしている労働者の目から見たら、「おい、偽善者」って、こんなリアクションを呼び起こすわけですね。私も以前、偽善者って言われましたよ。最初は何を言っているのだろう、と思ってね。私はこんなに善意でやっているのに、と思って。だけど、労働者が言っていたのは、もっと深いところで見ていた。偽善者と言われて当たり前だった。

だから、そんなことを含めてね、聖書は、従来の聖書だったら、むしろ読まない方がいいのじゃないのかな、と私は思うくらいですね。そういう聖書を読むくらいだったら、聖書を読まないで、隣人を本当に必要としている人の隣人に一人ひとりが勇気を持って成っていく。そして、自分を大切にしてもらえたように大切にす

る、だから、こっちの押し付けでいいはずがない。基本的に、その人を中心に据えて、何が本当に必要なのか、という必要なことに連帯して、「私はこれができるから、じゃあこっちの分野で手伝わせてもらいます」「私はこれだったらできる。こっちの方で、彼、彼女が一番望んでいる環境づくりをお手伝いできます」そういう形になるはずですよ。

だけど、教会がそんなふうにならないうに「キリストに倣って、低みに降り立つ」それがいいことだと思っただけ、もちろん、「低みに降り立つ、私がいもをいっぱい持って行くのですよ。あなたたち、遠慮しなくていいですよ、はい、あげますから」って、こんな発想ですよ。だから、その発想っていうのは、本当に人の人としての尊厳、ディグニティをぐじゃぐじゃにしまうわけですよ。

だから、キリスト教の教会の感性っていうのは、自然に天皇制に結び付くのです。皇室が、例えば福祉施設を訪問されましたっていうのは、大々的に、日の丸と一緒に写真と飾っていることが多いですよ。だから、福祉活動がキリスト教で生き生きと続けられるのは、「してあげてます」「こんな人たちのところに、自分は降りてやるのです」。例えば、北原怜子さんっていう、蟻の町のマリアって言われた、あそこであの人は、「世が世なればすごい人だったのに、こんなところに身を沈めて」とかって、そういう褒め方をするじゃないですか。それはキリスト教の愛という言葉が、そういうふうにならないうに、全てを色づけてしまっている。それがいいことであるかのようにね。

だけど、聖書そのものは、一番弱い立場に立たされている、その人を介して、全ての人を解

放する。それが新約聖書も旧約聖書も一貫して語られているメインメッセージなのですけど。いっぱい持っている人が、少なくしか持っていない人に、分かち合いで融通しましょうっていうのは、これはキリスト教の根本的な教えではないのですよね。土地を造成する時の価値観。高いところを削って、低いところへぼんっと、平らにしましょうって、普通の発想なのですよ。それがキリスト教の大事な教えの一環だと思ひ込んでしまう。だから、持っている人は持っていない人に、っていうね。そこにはいつも、上から目線っていうのが拭い去れない。上から目線でいいのだ、っていう、そんな発想。

だから、マザー・テレサのやっていることは、私は最初、全く無批判に、すごい人だな、脱帽っていう感じで見ていたのですけど。釜の労働者でね、結核を患っていて、病院を出たり入ったりして、でも、労働組合の周辺でいつもビラ出しを手伝っていた、そういう労働者だったんですけど、もう亡くなりましたけどね。その彼がね、「マザー・テレサはたいしたものやけど、もう少し他にすることあったやろ」ってね。私はそれ聞いた時にね、「ええっ、マザー・テレサを批判するあんたは何者？」って、そんなくらいにしか思っただけでなかった。「何でそんなこと言うの？」って聞いたらね、「あの人はノーベル平和賞をもらうくらい影響力ある人やったのやろ。だったら、亡くなっていく時に手にぎって、相手の宗教を聞いて、同じお経を読んでくれるっていうね、それはありがたいけども、そんな亡くなり方しなくてもいいようにしてほしいわ」と言ったんです。

キリスト教のシンボリックな行きつく先っていうのは、マザー・テレサかな。だけど、それ

にきっちり、ちょっと待てよ、と言ってくれたのが、釜の一人の労働者で、しかも本当に体が弱っていた。「死んでいく時に手にぎってもらえるのは嬉しいと思う。自分も嬉しいと思う。だけど、死ななくてもいいようにしてくれたらもっとわしは嬉しい」と。やっぱり、社会正義の問題、社会構造の問題ですよ。それを、そんな言葉でぼーんと言っただけで、気付かせてくれる。

6. 愛とお大切という翻訳

隣人を自分と同じように愛しなさい。隣人愛っていう言葉で言うでしょ。「互いに愛し合いなさい」とかね。「敵をも愛しなさい」とかね。「神は愛である」とか。従来、キリスト教、カトリックもプロテスタントも異口同音に同じことを言っていますよ。だけど、例えば、「愛したくない」とかね、なかなか愛せないやつを「愛さなくちゃ」と思っただけで努力する時、自分をちょっと吟味してみたら、どれほどジコチューな思いで関わっているかっていうのが、よく分かった。「愛せないのだけど、愛さなくちゃ」。「私のこの関わりは、偽善的でないだろうか」とか。「本当にこの人を好きになっているだろうか、いや、なってない」とかね。そんなふうに、ごちゃごちゃやるわけですよ。だけど、それがたまたま例外的にそういうことができてしまう人がいると、「やっぱりこれを目標にしなくちゃ」というようになってしま

う。だけど、アガペーっていうね、ギリシャ語の、全部「愛」って訳されてしまっているわけなのですけれども。実際、明治時代の最初に訳された、その訳文では、愛っていう言葉を使っ

てないのですよね。「お大切」という言葉を使っているのです。実際、愛そうとしても、愛せないのは仕方ない。親友と同じように、好きになれるわけでもない。好きか嫌いかっていうのは、これは努力してなれるものじゃないからね。まして、愛するか愛さないかっていうのは、これは努力でできるものじゃない。

だとしたら、たとえ愛せなくても、たとえ自分の親友のように好きになれなくても、聖書が言っているのはアガペー。それは、大切にされる。その人はその人として、大切にされる。それが大事なんだ。こちらの気持ちが、好きな方に傾いているか、愛情を感じているか、そんなことを問題にしていたのじゃないんです。

それなのに、「キリスト教は愛の宗教」と、いつからかそういうものを抱え込んでしまっていて、カトリックもプロテスタントも聖公会もみんなそう。愛。だけど、愛せるはずのない人を愛そうとするっていうのは、そこは最初から偽善以外の何物でもないはずなのに、でも、めげずにそれを繰り返し繰り返し、やろうやろうとしている。クリスチャンのほとんどはそうなのです。釜ヶ崎のボランティアを望んでやって来るクリスチャンたちも、たいていはその発想です。だから、関わってもらう側としては、本当に、鬱陶しく感じるはずですよ。

だけど、「大切にしろ」っていうのが、イエスがずっと求めていたこと。大切にしようと思ったら、こちらから何をするかじゃなくて、その人にとって何が必要なのか、何が大事なのか、何が優先されるべきなのか、聞くスタンスしかなくなっちゃうわけですよね。そして、自分が持っているもので、自分が大学の先生だったら大学の教壇があるし、研究会があるし、色

んな発言の場があるし。あるいは宗教者だったら、宗教者として、その視点で何を成すべきか。自分のとこの教会に人集めするだけが全てじゃないわけですよね。本当に一番、しんどい状況に置かれている人が、大切にされているのかされていないのか。そこにこだわるように。だから、原文を丁寧にきちんと訳せば、それが、すーっと読めるはず。読み取れるはず。

だけど、残念ながら、今まで普通の聖書学者たちしか、聖書の翻訳はしていない。学者っていうのは、学者もいっぱいここにいらっしゃるのでしょうか。ギリシャ語で学者をスコレーって言うのですけれどもね、スコレーの元々の意味は、私が使っているこの辞書で見ると、暇人。暇を持って余している人。大体、学者っていうのは、そうなのかな。水内さんには悪いけどね。そういう部分もなけりゃあ、学問もできないだろうなあっていう。それは確かにあると思います。

だけど、特に人の命、生き方に直接関わりを持つ聖書学とか、神学とか、宗教学とか、そういう学問に関わる人が、自分の視座、視点で、これはこうだ、あれはああだ、っていう判断してもらいたくないわけですよね。だから間違ってしまう。聖書の文脈からいけば、一番しんどい思いをしている人の視座を借りると言うか、共有させてもらう。そこから判断して、行動を起こしていく。

だからもう、聖書は読まなくてもいいんじゃないでしょうか。隣人を必要としている人の本物の隣人になれるように一生懸命動いていけば、聖書に書いてあることは全部実行したことになっちゃいますよ。平たく言えばね。字が読めないからだとか、日本語が苦手だからとか、

自分の母国語の聖書をまだ日本に持って来てないし、っていう人であっても、全然そんなこと気にしなくていい。ということで、長話をしてしまいました。大変申し訳ありません。終わります。

川浪：それでは、ありがとうございました。本田神父のお話でした。

カトリックという言葉はですね、普遍、という難しい言葉なのですけども、いつでもどこでも誰にでも当てはまるっていう意味で、英語で言えばユニバーサルと言いまして、今でもユニバーサル・デザインってありますよね。ノン・ステップバスっていう、平たいバス。これは障害者やお年寄りにも優しい。障害者やお年寄りにも優しいっていうことは、健常者、あるいは若者でも乗りやすい、ということですよ。

ユニバーサル・デザインの他で言うと、シャンプーとリンスが同じような形にしていたら、どっちかがぎざぎざがあると思うのですが、目の見えない人でも、そのぎざぎざによって、どっちがシャンプーかリンスか分かる。僕らだって、目にシャンプーが入ったら、どっちがリンスかどっちがシャンプーだったかっていうのが一目で分かる。

だから、やはり、一番低いと言うかね。障害を持っている人とか、高齢者であるとか、しんどい思いをしている人が暮らしやすい社会というのは、そ

うじゃない人にとっても暮らしやすい、というふうに、私はユニバーサルっていうものを解釈してしまして、カトリックというの、そういうふうに解釈してしました。本田神父の言われることも、何となく、ええっ？ というふうに思うのですが、社会自身がそういうふうに、実はなっていると思うのですけれども。そういう視点を聖書から学んでいくべき、ということ、宗教者ももう一回、自分の襟を正していかなければならない、というふうには思っております。本日はどうもありがとうございました。

そしたら一階で、シュトーレンというお菓子を食べながら、もう少し本田神父に色々とお話を伺いたいと思います。ありがとうございました。

～Cafe-Time～

1. 原典語文化圏での聖書理解はどのようなものか

川浪：すみません、それでは、大分時間が超過してしまったので、お一人お一人、長い自己紹介は無理かな、というように思いますので、毎回来られている方は、他の方もご存知なんやけども、一言、二言で。どっちかと言うと、また神父さんに質問を投げかけていただいた方がありがたいかな、というふうに思っております。

では、こっちからいきましようか。

白波瀬：皆さん、こんばんは。白波瀬と申します。

本田先生とはですね、割と古くから面識がありまして、6年くらいになるかな。僕も、大学を卒業してから釜ヶ崎に出入りするようになって。今はそこで仕事もしていたりするのですけれども。社会の抱える問題とかですね、痛みとか。そういったものを本田さんを通じて色々教えていただいております。

今回、改めてお話を聞かせていただいて、おっしゃられていることが一貫されていて、同じ話なのですけれども、やっぱり聞けば聞くほど、自分の中に響いてくるなあという感じですね。

その中で、一度聞きたいなと思うのは、今日のお話を聞いて思ったのは、ギリシャ語とかですね、ヘブライ語の聖書の原典にあたると、実際に今、書かれている翻訳と

は大分内容が違う、ということですよ。それは、日本のキリスト教の翻訳過程における一つの特徴なのか、日本だけじゃなくて、世界のどこの国でも同じような誤訳と言うか、ミステイクを犯しているのかなあと思うのですね。

さらに言えば、例えばギリシャの方に行けば、ギリシャ語に通じた人もいると思うので、原典を理解可能な人がたくさんいるわけですけれども、そういったところだと、どういうふうなキリスト教の解釈がなされているのかなあということですね。そのあたりも含めてお聞きしたいなと思いますので、今じゃなくても結構なので、教えていただきたいな、と思います。

川浪：どうぞ。

A：Aと申します。この近所にあるのですが、長居公園の方でサボりながら夜回りと



カトリック入門

か色々としている者です。長居公園には野宿者のテント村があったのですけれども、そちらが強制排除になった後に、その人たちの有志とまた夜回りを行っています。

それと、南田辺っていう、もうちょっとここから離れて、南の方なのですけれども、そちらの方で、やっぱりこういうふうな民家を借りてですね、そこを拠点にして、色々と相談活動とかをやっています。よろしくをお願いします。

B: こんばんは。Bと申します。

私は今、川崎に住んでいて、たまたまこちらに遊びに来ていて、Aさんに連れてきてもらったのですけれども。

私は修士論文で野宿者のことを勉強しまして、それで本田さんのところに来るようになったのですけれども。

何回か労働者のミサにも参加させていたでいて、また今日も改めてじっくりお話を伺うことができ本当に良かったです。ありがとうございました。

C: Cと申します。どうも、こんばんは。

家の方は京都なのですからけれども、神戸に勤めておまして。

今日はどうしても、3年前にある方を通じて本田さんのことを知りまして、一度ぜひ、個人的にお伺いしたいお話があったので、ずっとお会いしたい、お会いしたいと思っていたのですが、著書を読ませてもらった時に、自分なりに答えを見つけることができました。それで、もうお会いしなくてもいいかなあと思っていたのです。でも、やっぱり、もう一度きちっとお会いして、お話を伺えたらなあと思って、今日来ました。



やはり、お話を伺っていた時に、自分が知りたいと思っていたことを今日は伺うことができましたので。ただ、もっと教えていただきたいこともたくさんありますので、ちょっと勇気を出して、労働者のミサにも私も参加させていただけたらな、と思います。どうもありがとうございました。よろしくお願いたします。

2. 宗教を宗教的に否定する

川口: このカフェのスタッフをしております、川口です。

私はもう自己紹介が4回目になって、しかも毎回お話が聞けないので、そろそろ困ってきました。今日は来てくださってありがとうございます。4回目にして、エプロンを支給されました。よろしくお願いたします。

黒木: 同じく、このレリジョン・カフェのスタッフをしております、黒木と言います。若干、エプロンが大きめなのですからけれども。

毎回、準備に追われてしまって、内容は

聞けないのですけれども、一応ブログの方でビデオを見ながら内容をまとめている時に、毎回すごく勉強になるなあと思っておりまして、今回もキリスト教ということで、楽しみにブログをまとめさせていただきたいと思っております。今日は皆さんいらっしゃってくださいます、ありがとうございました。

D：Dです。今回で4回目の参加になります。浄土真宗はちょっと知りたかったのですが、今日はやっぱり違う宗教の話も聞いてみようと思って寄せてもらいました。来て良かったです。また次回も寄せてもらいたいと思います。

川浪：Eさん。

E：始めまして。Eと申します。

今、本田神父がおられる釜ヶ崎の、いわゆるメインの場所からはちょっと離れた、同じ西成の外れにいます。くらし応援室という、おっちゃんたちの仕事づくりとか、生活の応援をしています。

昨年7月から、そのおっちゃんたち、あるいは精神障がいの人たちの学校をつくろうと思ひまして、楽塾という学校をやっております。毎週土曜日に、レリジョン・カフェと同じようなかたちですけれども、週に1回の授業をやっております。来年早々に本田神父にもまた来ていただくということになっていますけれども。皆さん、興味があったら、来ていただけたらいいと思っております。どうもありがとうございます。

F：私は2回目ですけれども、本田神父さんと

は、えらい隔たりのあるインチキ宗教家もやっています。ほとんど、インチキという。これは僕にぴったしなんですけれども。川浪さんと一緒に、同じ真宗の坊主なのですけれども。

本田先生のお話を聞いていたのですけれども、僕も、キリスト教というのはあんまり。ホテルに泊まったら必ず聖書がありますよね。暇な時に読んでいたのですけれども、どうも嫌悪を感じるというか、偽善的というか、何かこう、ええことばかり言うて、という。

今日は本田先生のお話を聞いていて、親鸞に近い発想で、非常に感銘を受けまして、僕もキリスト教の話っていうのは、若い頃に吉本隆明の『マチウ書試論』とか、田川建三さんの本とかをちらっと読んでくらくらいで。キリスト教のことにしましては収まりの悪さが先行して、あまり見なかったのです、読まなかったのです。そういう視点で読んだらおもしろいな、と改めて一回読んでみたい。先生の本の方をですね。非常に親鸞的な発想と言いますか。親鸞というのは、宗教を宗教的に否定する方向に持っていくのですけれども。絶対他者という発想は非常に近いな、と改めて思いました。

先生、僕は釜で色々遠くから見させていただいているのですけれども、いつもお世話になっております。ありがとうございます。よろしく願ひします。

3. 伝書鳩としての学問、実践としての学問

水内：本田神父のお話の中で3回ほど名前が登

場しました、大阪市立大学の水内です。

これにひきつけて一言、スカラー、学者、暇人ということですが、ほんまに、今まで学者っていうのは、あいつらにそんな暇与えんでもいいような人まで学者になって、暇な時間を持って余した方も多かったのですが、昨今、そういうわけにはいかなかったのですが。今、僕の仕事っていうのは、暇が持てる学者は守りたいな、と。そういう学者が2割くらいいないとですな、ゆっくりした長いスパンの、世の中の見方とか、切り口っていうのは出せないのじゃないか、っていうのは思っていますので。僕は残念ながら暇人じゃないのですが、そういう大学人っていうのは守っていききたいな、ということをおもっているのです。

今日のお話を聞いていて、神学っていうのは、すごく厳格な学問だっていうのは思っています。私は地理学をやっていますけども、まともに大学で地理学がkachと出たのが1870年くらい。ドイツで、プロイセンで初めて、ベルリン大学の中できたのですよね。ですから、ものすごく新参の学問でして、まだ聖書がないのですよ、うちの学問には。そういう解釈学っていうのは、ほとんど成立しないということで、珍しい学問です。社会学とか、他の学問は結構バイブル的な巨大な学者っていうのがおるのですが、地理学はいない、ということ。逆にこれが良かったのかなあ、何でもありで。

ひょっとしたら、これから一番ナウい、暇でない大学人をつくっていったら、新しい、抛って立つ大きなことば、大きな

学問があんまりないので、小さなことば、要するにどれだけ現実に接しながら、伝書鳩のようになりつつ分かりやすいことばで広めていく、と。大学って若い資産。学生さん、院生さん、共々にやっていききたいなと思っておられますので、そういう意味では、逆の意味で暇のある、立派な学者も育てていきたい、育ててほしいな、とおもっていますので、日夜あくせく働こうかな、とおもっています。

今日はどうもありがとうございました。

G: 皆さん、こんにちは。Gと申します。

韓国籍なのですが、日本に来て、今年で11年目になりまして、ほぼ在日化している状況です。それに関して色々研究したりしているのですけれど。

今は水内先生のもとの、大阪市大で研究しているのですが、韓国にいた時に、元々研究をやっていた人間じゃなくてですね。

貧困、いわゆる釜ヶ崎のような、そういう地域が韓国にいた時にはたくさんありまして、そういうところに自分も住み込んで色々活動、生活をしていた時がありました。その時に、自分もカトリック市民会ということで、会員として活動していたんですけども、当時、そういうような一番貧しい、低いところと共に暮らす。そして、貧困というものを、ただ不便なことであって、それと一緒に近づけるような、そういう生活をしようという人たちがたくさんいまして、本当に素晴らしい人たちだな、というふうに思ったりもしてたんですけども。今でも清貧、と言うんですね。それは聖人としている先輩たちがたくさん韓国にもいまして。

元々、僕はカトリックではないのですけども。どちらかというと仏教に近いような、子どもの頃からお寺に通ってまして、それで色々と活動もしたりしたのですけども。

私は貧困人として活動しながら、一つの宗教にこだわらず、さっき本田先生もエキュメニカルの話がされていたのですけども、今は割りと宗教的にフォーカスされているような感じですけども、非常にエキュメニカル的な活動について、たくさん色々なことがありまして、私も勉強していたのですけれど。

日本に来ることになってからですね、最初は東京にいたのですけれど、その時、ホームレスの支援活動に関わりながら研究もしていたのですけれど、そこで出会ったのが、昔の野宿者の政策を調べている時に、さっきおっしゃった隅田川の蟻の町ついても、色々調査をしたりしていたのですけれど。

あの時も、いわゆるカトリックの活動をされている方たち、聖書を持つだけじゃなくて、実際に行動に移す方たちが結構いまして、私が文献で調べていた中にはですね、隅田川の蟻の町を組織していた人たちの一部が、またそういう活動を神戸に来て紹介したりしていた、という話がありまして。

これは本当、おっしゃったような、単に聖書を読むだけじゃなくて、実際に何か行動に移すような。本当の隣人と共にするようなことはですね、日本にも昔からそういう活動がずっとあったのじゃないのかな、ということ。

そうこうするうちに、本田先生のお名前

も色々と伺っていたので、ぜひお会いしたいな、と思っていたんですけども、なかなかそういう機会に恵まれずに、今日に至って、こうやってお会いすることができたのですけども。

ぜひ、これからも、できれば色々な機会でお話を伺えれば、と思っていますので。

本田：私、ネットワークのメールではよく、Gさんのお名前も、文章も読ませてもらいました。

G：ありがとうございます。また、よろしくお願いいいたします。

水内：Gさんは宗教兵だったんです。徴兵の時に、宗教兵。

本田：宗教兵？

G：はい。軍隊で、そういう宗教給仕を担当するような役割をする兵隊さん。

本田：そんなのあるんですか。

G：はい。たまたま。

本田：初めて聞いた。宗教兵。

川浪：従軍僧とか、昔ありました。

F：従軍僧とは、意味は違うみたいですね。

G：本当にたまたまなのですけども。

4. 人が大切にされること

H：始めまして、Hと申します。

この前、ありむらさんの「歩く会」で、最終地点がここでして。だから、このおうちに上がしてもらるのは2回目ということとで。

本田神父さんのお話を聞いたことを、良かったと思っています。

「善人なおもて往生をとぐ、いわんや悪人をや」あれがすごく自分の心にあって、神父さんのお話を聞いていても、同じような視点でっていうことで。うち、おじいちゃんとおばあちゃんが熱心な浄土で、その言葉を知った時に、真宗の方がいいんじゃないかな、と思って、今日、本田神父さんのお話を聞いて、ああ、キリスト教もやっぱりいいな、とか。親鸞が最後、宗教捨てよって、どなたか言ったんやって言うてはったんで、宗教を捨てるのもいいな、とかね。色々思ったりしながら。

釜ヶ崎に関わるようになって1年にも満たない。大阪生まれなのですけど、南の端っこの方の田舎なので、なかなか足を運んだりとか、自分も興味とか、全くそういうことなしに、噂で聞いていて、たまたま1年くらい前に。

きっかけは子どもの出産とか、夜回りとか、ちょっと行っているみたいな感じで。釜学の方の、たまたま知って、最近はまだと言うか、参加せずにおれないような感じになって、多い時は、週に3回くらいあの辺をうろちょろしているような感じなのですけども。

今週末、たまたま、市民社会貢献人養成

講座っていうのを見つけたんで、それに申し込んで受けてみようと思って、段々、自分の中で軸足が釜ヶ崎の方に移っていき、何かできることがあったら、どんどんその比重というか、バランスを移していきたいなって、そんなふうに思っていますので、また、今後色んなところにちょこっと、浅く広く顔出すかも分かりませんが、よろしく願いいたします。

I：Iと申します。釜ヶ崎の西成市民館で、少しだけ、携わっておりますけれども。

元々は看護の方が専門で、私の看護の学生時代の大恩師が、私自身は全然、キリスト教も仏教もよく分からないのですけれども。ずっと看護の世界でのキリスト教なんかを用いて、アガペーっていうのを教えてくれていたのですね。当時は若かったので、よく分からなかったのですけれども。

今日は仕事の都合で遅くなって、最後の方、少しだけしかお聞きできなくて残念だったのですが、最後の方におっしゃってました、アガペーっていう意味が、愛っていうことじゃなくて、愛っていうことよりも、その人にとって本当に必要なもの、その人にとって大切なものっていうものを、大切にしていっていいのだなって、すごく安心できまして、そこだけでも聞かせていただいて良かったと思っております。ありがとうございました。

最後に、川浪さんがバリアフリー、ユニバーサル・デザインで締めておられましたけども、全然ユニバーサルじゃない階段を、上って下りて。

それで、ただ、ユニバーサル・デザインってすごいいいな、大事だなって普段は思っているんですけども、でもここに伺う

と、ユニバーサルでない階段、ひと時も気を許すことのできない階段ですよ。それでも、すごく趣きがあるなっているのを感じています。そこで、ユニバーサルと、日本の文化と、色々と考えながら、おいしいお菓子をいただいています。

以上です。また、今後ともよろしく願います。

平川：記録を担当させていただいています、平川です。一応、大阪市立大学の所属なのですが、普段はコルムとか、カマン！メディアセンターの方の手伝いとかで釜ヶ崎にすることが多く、本田神父とは、今は丁度、釜ヶ崎越冬という運動がありまして、そこでもお会いして、共に頑張っていきたいなというふうに思っているのですけども。

今回が3回目で、毎回おいしいお菓子を食べながら色々と皆と意見交換ができるというのはすごく楽しいな、と思っています。また次回も楽しみにしているので、どうぞよろしく願います。

川浪：ありがとうございました。
川浪と申します。

お知らせなのですが、12月は皆さんお忙しいので、12月はレリジョン・カフェを休まして、1月からもう一度始めますので、また、ご連絡差し上げますので、よろしく願います。

長屋に住んでましてですね、これはずっと私、色んなところで喋っているのですが。長屋というのはやはり、木造ですか

ら、火事にも弱い、地震にも弱い、また建て付けも悪くて、そこを閉めたらガラスが外れてくるので、冬は寒くて。

また、こういうふうな、良い面でもあるんですけども、悪い面ですよ。これ、建具を外したら、これだけ広がるのですが。非常にプライバシーを守ることがなかなかできないお部屋で、こういう部屋で昔は暮らしていたのですけども、今は本当に個室で、子どもも部屋の中からカギ締める、という家に住んではる人が多いので、こんな家は、もはや博物館に入ってしまうのかなぁと思います。

たまたま、ここのおうちはですね、お隣りとの間に通路があるので、壁一枚隔てるっていうことはないんですが、これもやはり、ここはちょっといい長屋なんでそんなに隣の声は響かないんですが、昔の家っていうのは本当にプライバシーもあまり守れなくてですね。

お年寄りにはですね、ノン・バリアフリーで。急な階段を上がり、この建て付けの悪い戸を開け、お手洗いはちょっとはきれいになりましたけども。そういうふうな、ちょっと不便なのですよ。でも、不便だからこそ、昔はですね、互いに融通し合ってますね、お隣さんと一緒に、お醤油がなくなったと言えばお醤油の貸し借りをするような長屋付き合いをしていた。狭いながらも楽しい我が家なんてことがありますけれども。

やはり、不便さがあるからこそ、人は助け合うってところもあるんじゃないかな、というふうな、このバリアフリーの話をうまいこと持って行って、まとめているような次第でございます。

それではちょっと最後に、白波瀬さんの質問とか、そういうかたちで、総括してください。

5. 伝統という権威

本田：白波瀬さんの質問は、翻訳ミスっていうか、違うメッセージに変わってしまったのは日本だけか、他の国の言葉はどうか。そして例えば、同じ新約聖書という言葉という意味で、今現在、ギリシャの世界でギリシャ語使っているわけだけでも、そこでの解釈はどうか、ということだったと思います。

大体、基本的に、聖書の翻訳っていうのが、どこでコントロールされるか、っていうと、これまで続いてきている体制としての教会と、それを守る神学と、聖書学の学閥。そういうものが、どうしても災いして、ヨーロッパもアメリカもフィリピンもどこも、大体同じような。だから、外国語の翻訳書を読んだら違うことが書いてあるかな、と思っても、それはちょっと甘い。同じ穴のムジナ的なメッセージしかない。

だから、同じようにキリスト教が広まっているところは、同じような価値観がどんどんどんどん浸透してしまっていて、たまにはいい面もあるかもしれないけど、マイナス面もかなり、悪影響を及ぼしていますっていう、そういうことですね。

それと、今現在ギリシャ語を使っているギリシャの、コリントとか、アテネとか、ちょっとだけ行ったことあるのですけれ

ど、全然通じませんよね。

イ音変化って言いまして、みんな、エとかアガイという発音に変わってしまっていて、聞いているだけではピンとこない。いくら新約聖書のギリシャ語をある程度読み慣れていても、なかなか合わない。

普通、「パラカロー」っていうギリシャ語は、「励ます」とか、「なぐさめる」という言葉で、「パラ カレオ」、「側に呼ぶ」という、文字通りのね。だけど、今現在の「パラカロー」は、同じ言葉を使っているけれども、「ありがとう」とかね、「よくいらっしやいました」とかね、そんなようなかたちになっちゃっていますし。

だから、生きているギリシャ語がずっと続いているので、ずいぶん中身は変わっています。

ただ、聖書のヘブライ語と、今イスラエルの使っているヘブライ語は、かなり同じなのですね。今から1000年、2000年前のパレスチナ地方で使われていたヘブライ語を、ある意味で復刻版のように、シオニストが、聖書の言葉を我々は喋るのだ、と言ってね。神が約束した、あの聖なる約束の地、あのカナンの地、と言ってね、イスラエルのあの領土。

だから、聖書が憑いたような感覚で、あの人たちは生きていますから。今、彼らが使っているヘブライ語と聖書に書き残されているヘブライ語は、そんなには変わっていないみたいですね。ただ、新しい言葉、その頃なかった言葉をどんどん作ってやっているのです、その点では違っています。

ただ、正直に言って、旧約聖書をそのま

ま読んだら、ブッシュのイラク攻撃。あの
人、立派なクリスチャンと言われている
のですけれど。あれだって、聖書の中
にはOKというかね。聖書の価値観からい
って、あれだってありだよ、っていう話に
なってしまうしね。それから、十字軍の遠
征にしても、火あぶりをやったりとかね。
オウム真理教以上のひどいことを聖書に基
づいてやってきたっていう、その怖さは、
未だにあるわけですよ。あれを同じよう
に、聖書として承認している限りね。

だけど、アウグスティヌスっていう人
が、紀元4世紀くらいの人なのですけれど
も、その人が聖書解釈についてのすごいヒ
ントを残しているのですね。「新約は、旧
約の中に隠されており、旧約は新約によ
って明らかにされる」っていう。だから、旧
約だけを旧約のコンテキストで読んで
、聖書としてのメッセージは読み取れま
せんよって。新約で語られていることも、
旧約の中に隠されてはいるけれども、それ
をはっきり掴むためには、新約のメッセ
ージと照らし合わせながら読まない限り、民
族抹殺も、旧約聖書では当たり前のこと
のように書かれていますね。

だから、聖書なんてものは、文字通り、
神のディクテーションであるかのように、
そういう読み方をするネオコンの人たち
の、ああいう聖書理解っていうのは、福音
派の聖書理解っていうのは、非常に危う
いと言うか、怖い。

当時の文化とか価値観に、逆戻りして平
気で、これは神の御言葉だ、みたいな感じ
でやってしまう危険性はある。だから絶え
ず、新約のメッセージと照らして、どこを
ちゃんと受け止めるべきか、っていうこと

をやらないといけない。

だから、先程「親鸞聖人は、宗教を捨て
なければならないとおっしゃっていた」と
おっしゃっていましたが、私も釜ヶ崎に
20何年いて、「宗教によって人は救われ
るのではない」というのが実感なんです
ね。だから、どの宗教が本物か、ってい
う、宗教間の競争も、あまり意味がない。
「たかだか、宗教じゃない」って。ただ、
自分が所属するところで、それがフィット
すれば、それはそれで良しとすればいい
じゃない。だけど、それを人に押し付け
たり、広めようとしたりっていうのが、
ちょっとまずいのじゃないって。人は宗教
によっては救われない。逆に言うと、宗教
に熱心になればなるほど、権威主義的にな
らざるを得ないし、権威主義になれば、そ
の裏は、差別と偏見が必ずくっついてくる
し。

だから、宗教を持っている人も、人を人
として関わる。キリスト教の我田引水じゃ
ないけど、そっちサイドから言えば、隣人
を必要としている人の隣人に私たちがきち
んとなる。それだけで十分。それによっ
て解放が生まれていく。お互いに解放され
ていく。そんなふうに思っています。同じ
だ、と思いました。

F : もう、何十年前にもなります。『マチウ
書試論』で、一番頭に残っているのが、宗
教的な特徴っていうのは、観念の絶対性、
という。その辺がどうしても突き崩せない。
数十年前に読んだ本が未だに頭に残っ
ている。そういうイメージで捉えるしか
ないかな、宗教というのをですね。キリスト
教に限らず。そういうところは、親鸞を読

んで解体していくところが意外とおもしろい。今は、全く親鸞の心を知らず、そういう言葉を述べたと思うのですけども。そういうのが全部、権威主義的な。親鸞というのは、別に寺もいらぬ、と。自分が死んだら、その辺へ放っておけ、と。そういうふうな考え方が全然違って、逆に人を縛っていくようなかたちになっているので。色々あるのですけど。そういう流れで、先生に非常に近いかたちかな、と僕も思ったのですけども。

6. 共感からの支援と宗教的支援

EE：ちょっといいですか。

数年前に、野宿者の全国調査をやりましたね。あの頃に、初めてそういう、全国に散らばっている支援団体の人たちといくつか会ったりしたのですけど、多くはやっぱりキリスト者が多いのですよね。圧倒的に多いですね。しかも、結構大きな規模のプロジェクトを組んで、色んなかたちでやってはる人がいてはりまして。

その中で色んな代表の人たちと話していた中で、僕は常に、動機って一体何なのだろうって。要するに、野宿者を支援する動機ってというのは、一体何なのだろうっていうのが、僕、常にありましてね。たまたま、お話を聞いている中で、支援活動をしてはる動機って何なのですかって聞いたのですけど、「私はキリスト者だから」って言うはるんですね。キリスト者っていう、ある種宗教者としての立場でしか、野宿者問題をできないのか、と。逆にね。そういう

疑問が常にあって。

僕自身は、キリスト者でもないし、仏教っていう、深いところもあまり見掛けられないし。でも、一体、自分の動機は何かになって思ったら、やっぱり、自分は同じような目に近いことが経験としてあって、そこから一つの共感みたいところでね、出発しているっていうところがあるわけですね。それが聞かれなかったのですね。

宗教っていうのが、人を助けるものかどうかっていうのは、まだ僕はよく分からないのですけど、その野宿者の問題に関して言えば、そういう支援団体の方たちは非常にたくさん参加されていて、しかも、結構精力的にやってはって。でも、その動機っていうのが、言うたら、宗教を一つの手段にして、言わば社会的な支援をやっているっていうのが、どうも自分としてはもう一つ、フィットしないのですよね。

本田：本当、そうですね。夜回りする場合も、おにぎり部隊って言ってね、婦人会なんか、せっせせっせとおにぎりを何百個って作って、そんな体制は割かし、ずっと組む。

だけど、そういう人たちも、その教会全体からいったらごく一部のはねっかえりなんですよ。貧しい状態に置かれている人たちと関わるっていうこと自体が、体制を危うくするっていうかね。平和な、そこそこ中流で楽しめるサークル活動なんか、それに水差されるみたいな。

だから、基本的に言えば、ああいう関わりをしている人たちも、変な目で見られている。だけど、変な目で見られていながらも、何でやるのっていうのはね、やっぱ

り、どこか、愛の実践とかね、そういう、間違った意味での、強迫観念みたいなものがなきにしもあらず。

E：釜の中では、結構、炊き出しの活動とか、たくさんありますね。僕は、あれに対しても、すごく疑問に思っているのです。一つは、本田神父の言葉で言えば、小さくされた人たちだとは思いますが、ただ、彼らの自立ってというのは本当はどこにあるのかって考えた時に、場合によって、炊き出しがあちこち行くところを大体チェックしておけば、大体一日、飯は何とか食べるやろ。仕事もしたくないんだ、せんでもええんや、みたいな人たちが結構いてたんですよ。

むしろ、炊き出しをすることで、彼らの足を引っ張っているんじゃないか、と言うか。それは愛でも何でもなくて、逆に施しじゃないかっていうのが常にあるのですね。

皆さんに大変悪いんですけど、僕は、西成の釜ヶ崎から、住宅、生活保護を受ける時は違うところに行こうよ、っていうことで、皆を違う方向にね、釜からは外させるように、今、しているのですね。逆に彼らを非常に釜ヶ崎のスタイルにしちゃう。それが僕はすごく気になっているんですけどね。一番、おおもとでやってはる神父さんたちには申し訳ないのですが、その辺が。

本田：同じキリスト教という名前は付いていてもね、全く、やること、人の尊厳を崩しているだけじゃないってね。まして、相手がひもじい思いをしているところで炊

き出しをして、それにセットで礼拝に参加させる、みたいなね。そういうセコいことをやっていること自体が、何考えてるの、って。だから、釜ヶ崎キリスト教協友会ってあってね、一応9団体入ってますでしょ。キリスト教協友会の最初に作った規約ははっきりしているのです。釜ヶ崎で、我々は伝道活動をしないっていうね。信者をつくるのじゃないんだ。それは健全な選択だったな、と思っているし、それが今、周辺の中にも出てきている色んなキリスト教の教会。炊き出しで釣って、集会に何人参加したか、それを本部に報告して、また本部からの援助金をもらう、みたいなね。そんな仕組みみたいですからね。それはちょっと違うな。

川浪：すみません、そろそろ、お時間になってしまっていて残念なのですが、先程も申し上げましたように、12月はお休みいたしますので、また1月に。まだ講師の方は決めていません。また、お菓子も決めていません。

今日は、せっかく黄緑の紙にメッセージを書いてくださった、製作者、Jくんという、ココルームという釜ヶ崎のところのカフェで、木曜日にお菓子とかお料理とかを出してますんで、また行ってあげてください。彼は、切々と、11月25日ということで、いわゆるクリスマスに向けて、ドイツではこういうシュトーレンを食べてクリスマスを迎えていくっていう、そういう時期ですね。

今日は私も演出しまして、鹿のローソク、トナカイか。奈良の大仏とごちゃまぜになってる。そういうもので、ローソクで雰囲気盛り上げてしたが、果たして盛り

上がったのかな。また、よろしかったら、お菓子を食へに来るだけでも結構ですので、また来て下さい。ありがとうございました。



II. 宗教と非言語表現

「浄土真宗入門Ⅱ -阿修羅像のバックグラウンドを知る-」

2009.9.22 (火) 18:30 -21:00

■講師：戸次公正（べっきこうしょう）さん

1. ブームとしての阿修羅像

川浪：どうも、こんばんは。6時半の定刻を回りましたけれども、阿倍野religion-cafe、チラシにreligionって英語で書いたら、なんのこっちゃ分からんと言われて、何って言うのも読めないの、宗教と言う意味なのですから、新しいチラシからは下に「宗教カフェ」と、漢字で書くようにしました。

本日の講師の先生は、前回に引き続き、泉大津から来ていただいております、浄土真宗の東本願寺の方なのですが、ご就職で戸次公正さんです。「戸次」（とつぎ）」と書いて「べっき」と読む、なかなか珍しいお名前でございますけれども。

前はですね、第一回目ということで、戸次さんが、ご自坊で試みられている、現代日本語訳で読む法事、というようなことでお話していただきまして、今回は、3月から東京の方の博物館で本当に大評判になって、160万人くらいの方が見ておられるという、今は九州の方に回っているんですけども、阿修羅像というものがありますね。仏教の中でもですね、阿修羅というインドの神様をですね、守り神というか守り仏として、ヒンドゥー教から、インドの神様なんですけど本当は、仏教の守護神になった阿修羅という像を中心にしてですね、お話をしていたらこうと思っております。



大体一時間程お話をさせていただきまして、一階の方で、お茶とお菓子ということで、皆様に受付でお伺いしている飲み物と食べ物をサービスいたしますので、またよろしく願いいたします。

それでは早速、戸次先生にお話をいただきます。

戸次：こんばんは。今日で二回目ですけども、初めましての方もいらっしゃいます。前回、日本語で読むお経、法事で読むお経の話をさせていただきまして、色んなご質問とかご意見もあったんですけども、一緒に楽しく過ごして、後のお茶とお菓子がおいしくて、私、今日もまたそれを楽しみで。私は、今日はシフォンケーキが出るっていうので、私は資本主義者でしてね、ケーキはシフォン主義が、私シフォン大好きなのです。だから、今日は後を楽しみにしながら、お話をしたいと思います。

たまたま、この間、前回話した後ですね、朝日新聞の文化欄の記者から電話がかかりまして、どこで聞いたのか知りませんが、東京の人

ですけれども、「あなたは日本語で読むお経っていうのをずっと20年来やっているそうやけども、そのことを書いてください」と。「記事にしますから」と言うてくれはってですね、それで原稿を書いたんですけれども、多分ですね、今月の24日、お彼岸の時期に24日の朝日の朝刊に、そんなに長い文章じゃないですけど、前回お話ししたようなことをまとめたようなものが載ることになっております。良かったらまたご覧になってください。オピニオンという欄ですね、朝日新聞の。

さて今日は、阿修羅のお話なのですが、実は私は阿修羅というものに魅せられていまして、ずっと、長年、阿修羅のことを調べたり考えたりしてきましたんで、阿修羅のことを語るぶんには、5時間くらい要るんです。ですけども、今日は凝縮してお話していきたいと思えますし、今、ブームになっている阿修羅ということの背景と言いますか、土台にどんなことがあったのか、ということをお話をして、また、皆さんからも色々質問やご意見やご批評をいただきたいと思えますので、よろしく願いいたします。

これもたまたま、私毎月、『月刊同朋』という雑誌に連載を持っていて、そこでたまたま来月号、10月号で「阿修羅の琴」というエッセイをそれで書いています。それが短い文章ですから、今日の話の背景になりますから、レジュメ代わりにこれを皆さんにお配りしますので、ちょっと回していただけたらと思えます。それを見ていただきながら話しますと、字や言葉なんかもちょうと補足できると思えます。

折々、その、今配っております紙のエッセイを見ながらお話ししますが、前置きといたしまし

て、今、大変な仏像、菩薩像などのブームですね。あのブームっていうのは、私は、一体どういうことなのかと考えさせられているのです。もちろん私も、仏像とか菩薩像、ああいうものを見に行くのが好きですし、関心は深いのですけれども、ただですね、今のブームのずっともとなっているのは、昔を辿れば和辻哲郎という哲学者が、戦前から戦後にかけて、『古寺巡礼』という本を書かれて、これは大変ブームになってですね、あの場合の『古寺巡礼』は主に大和の、奈良の方のお寺巡りから始まるのですけれども、そういう歴史的なお寺の佇まいにおいて、という、それを一つの哲学的、風土と哲学の時代空間で論じるというなかなかすごい本だったのでですけども、それがやっぱり、今の仏像ブームの根元にあると思えますね。それ以前は、お寺で仏像を見るというのは、拝ませただくというのはあっても、美術品、文化財として見るっていうことはなかったのです。

外へ出すのは初めて、明治の始め頃にフェノロサという人が、岡倉天心なんかと出会って、その人たちが日本全国の仏像や菩薩像を調査して、秘仏として、普段はお見せできない、そういうものを、例えば百済観音とか、あんなのも、お寺の側では、そんなものは見たり写真を撮るものではないんだ言うて、と拒否していたものを説得して、見てもらうようになった。そういうところから徐々に、仏像とかお寺の佇まいへの関心が、明治から大正にかけて開いていくのですけれども、今言った、昭和になって、和辻哲郎の『古寺巡礼』がブームに火をつけるわけですね。だから、そんなに昔からあった話じゃないのです。

今のブームの火付け役と言うたら、みうらじゅんですね。みうらじゅんの『見仏記』という、これもおもしろい本なのですけれども、こ

れも大変ベストセラーになりましてですね、今は文庫本にもなって、3冊か4冊出ていますけれども、これが火付け役ですね。みうらじゅんという人は漫画家でもありエッセイストなのですが、何でもやる人で、特に子どもの頃から仏像が好きという変わった人だったので、それで、いとうせいこうとみうらじゅんが一緒に、仏像を見る自分の大好きな、自分に合った仏像に出会う旅をする。それを本にしていた。これがまた割りと、裾野の狭かった仏像やお寺巡りフェチに、燻りを入れて、お寺へ行ったり、仏像見たりするのんって意外とおもしろいんじゃないの、みたいなどころから、じわじわ一っところ、ブームになっていったんですね

その他にも、最近では、はなさんとかですね、ああいう人たちがエッセイを書いたり仏像巡りをしたり。仏像ナビゲーター、仏像ガール廣瀬郁美っていう人も出てきていますね。上智大学を出て、そこで文化人類学か何かやったのですか、仏像に関してメチャメチャ詳しい仏像ナビゲーターとしてあっちこちで講演もし、ひっぱりだこの、26歳か27歳の若い女性ですけど、そんな人まで現れて。

でも、私はなんかちょっと解せないところがありまして、仏像とか菩薩像っていうのは見に行くっていうよりも、本来それを私たちは拝みに行くっていうものだったのが、見に行くっていうことになる、美術品、鑑賞の対象になってしまう。礼拝の対象から鑑賞の対象になっていくには、だいぶ違いがあるんじゃないかと思うんです。

仏教の歴史っていうものをずっと辿っていきますと、遡れば、お釈迦様が2500年現れて亡くなった。それからしばらくはずっと、お釈

迦様はお経の中で予言しているんです。500年ごとに仏教は衰退していくだろう、と。昔の時点で500年ですから、だいぶ衰退しきっているんですね。衰退しきった頃には、世の中に、私こそ仏だ、私こそ最終解脱者だとか、私こそ現代のブツダだ、という、仏様を名乗る者がいっぱい現れるだろう。だけど、全部それは偽者だから気を付けなさいと、ちゃんとお経に書いてあるんですけどね。

そういうことを予言していく中で、お釈迦様の弟子たちは始め、お釈迦様の姿を仏像に刻んだりはしなかったのです。あまりにもすごい、人間を超えた畏れ多い存在だったので、法輪のマークだけ描いていた。法輪っていうのは、お釈迦様が法を説いて展開していくのを、車輪がグルグルと回っていくかのように、教えが広がっていくっていうので、法の輪、法輪という、それを仏教のシンボルにして、作ったり描いたりしていた。

お釈迦様の姿そのものが描かれるようになったのは500年くらい経ってから徐々にです。それもずっとインドから向こう側の、アフガニスタンとか、シルクロードの道すがら、ギリシャの神話に出てくる神々、それと仏教との出会いの中で、仏教でも、ああいう神々のようなアポロン像のような、ああいうお像を作ろうというのがまたブームになるのですね。

ブームになるのは、それだけ私たちがブツダ、お釈迦様から遠ざかってしまった。そして500年ごとにその精神が見失われ、だんだん形骸化していく。形だけのものになっていく。でも、その形を通してしか、今われわれは、仏様の教えに会えなくなっている。とても悲しいことだけど、せめて形で、お釈迦様や菩薩の姿を刻んで、それで仏教に出会う一つの手がかりにしよう、そういう風に悲しみの中から、深い喪

失感と悲しみと、そしてだんだんだんだん、お釈迦様から遠ざかっていってしまって、何が真実か分からない、そういう絶望感、未来への危機意識の中から仏像っていうのはつくられてくるわけです。

だから、仏像っていうのはそういうことから、誕生してきましたので、そういう意味から言いますと、今なぜ、これが、仏像がブームになって、一つの心の癒し、みたいな風にされるのだろう。その中には何か、世の中の大きな歪みがあるまま、歪んだおかしな不正義な世の中を、そのまま、そのことと闘うのじゃなしに、何か、ちょっと、安らぎとか慰めを求めて仏像に心を慰める。それも大事なのですが、そのことで何か、本当の怒りを見失った、牙を抜かれたりしている、そういうものに、仏像がブームという形で、仏像までもが、宗教までもが利用されているような感じも私はして、淋しくてならないわけです。それは、私の感じ方とか、受け止め方ですから、また皆さん方の思いも、仏像とかお好きでしたら、聞かせていただきたいと思います。

さて、今日は阿修羅です。ブルータスで「阿修羅会えた？」という特集号が出まして、これがね、すぐ売り切れて、これ滅多に手に入らないのですよ、なかなか。私持っているのですが、「欲しいー！」と言われるのです。「何万円でも買う」言うてね。そのくらい、やっぱり今ブームになっているのですが、阿修羅、何でやろうかな、と思って。ミニチュアまで出ていますよ、阿修羅像のこんな小さいの。6万円するのですが、もう即完売して、私も欲しいのですが、簡単に手に入らないそうですね。

阿修羅のどこがいいのだろう、それにしても、阿修羅って一体何なのだろう、ということをお話をしてみたい、と、思っています。

す。

2. 阿修羅との出会い

さて、このレジュメをもとにちょっと話をさせてもらいますと、私が阿修羅というのと出会ったのはね、いつかと言いますと、生意気に小学生の頃なのです。私小学校三年生くらいまで、ものすごく引っ込み思案で臆病で、内弁慶の子どもだったのです。学校へ行くのも怖い、嫌だった。行っても、早く帰りたくて仕方がなかった。弱虫だったのですね。

ところが、三年生の時の小学校の担任の先生、青山良次先生と言いましたけれども、この先生と出会ったのがきっかけで、私は自分が変わります。この先生は勉強を教えるのも熱心でしたけれども、あんまり勉強、成績を上げることだけが、私のやり方でない、というので、毎週一回、童話を読み聞かせてくれたのです。童話の朗読。その、色んな童話です。イソップ物語から始まって、グリムの童話、そして小川未明とかですね、聞いたことあると思いますけれども、日本の童話作家も外国のアンデルセン、アンデルセンというものに出会っていて、すごく感動しましたねえ。『人魚姫』の話とか、『マッチ売りの少女』とか。

その中でも宮沢賢治の童話を聞いたのが非常に大きかったですね。『風の又三郎』とか、『銀河鉄道の夜』とか、ああいうのを聞きながら、宮沢賢治っていうのにすごく惹かれていくのです。そして宮沢賢治の書いたものをまた読んでみたいと、小学校五年生くらいになったら、生意気なガキですので、本屋へ行って、探して。その時に手に入るの、岩波文庫から出ていた、宮沢賢治詩集とか、宮沢賢治童話集。それを、細かい字で難しいのに、なんとなく

買ってですね、読む。

特に宮沢賢治の詩集が、『春と修羅』でした。その時まだ、その修羅、『春と修羅』の修羅が阿修羅のこととは知らなかったのです。

「俺は一人の修羅なのだ」という有名なくだりがあります。けれども、その詩を通して、私は、修羅というのが一体何者なのかよく分からないままですね、宮沢賢治という素晴らしい童話作家が、詩集では自分のことを、涙流したり、歯軋りしたり、怒ったり、悲しんだりしながら生きている、私は一人の修羅なのだ、と名乗って、この修羅って何やろうと思いつつ、ずっときたわけですね。

で、高校生くらいになった時に、ああ、この修羅ってというのは阿修羅のことなのだ、ということがだんだん分かってくるのですけども、その時分から、阿修羅というものに大変私は興味を抱くようになって、あちこち、それこそ興福寺の阿修羅像を見に行ったり、初めて見に行ったりも大学生になったくらいの時ですね。それ以来何度、あの興福寺の阿修羅像を見に通ったか分かりませんが。

それとその、書いたものの中にも、真ん中下の段に出てくるのですけども、親鸞、浄土真宗を開いた親鸞という人が、自分の書物の中で、「阿修羅の琴」という喩え話を出しているのです。そのことを下にちょっと書いているのですけども。これでますます阿修羅のことが気になり出しまして、この下の段を見ていただきますと、下の段の、右側の下の段の真ん中らへん、「さて、親鸞聖人は「阿修羅の琴」という喩えによって「他力」とは何かを説いた「他力」というのは、自力と他力という、あの、宗教の世界ですね。「他力とは、如来の起こされた本願力のことである。それは阿修羅の琴が、誰も弾く者がいないのに自然に演奏されて聞こえて

くるようなことをいう」と『教行信証（きょうぎょうしんしょう）』、そういう書物を親鸞さんは書いています。

私なりに解釈しますと、「他力とは、法蔵菩薩の本願のはたらきをいう。それは現実離れた内面世界のことでない。この我が抱えもつ現実の問題を、身をもって受けとめ、そこに広く深い宗教的課題を洞察し見出していこうとする姿勢である。その願いが念仏となり、私にまでひしひしと伝わり、今を生きる私を衝き動かすのだ。それはあたかも阿修羅の琴のような力で思いかけずせまってくる」こういうような解釈を試してみたいですね。

後で言いますが、その阿修羅の琴っていうのはどんな楽器なのか、これも興味があつてですね、あちこち探すのですけども、実は、阿修羅の像を描いたものや、阿修羅の像を彫刻したもので、琴と一緒に描いたり置いたりしているものはひとつもないのです。阿修羅はそんな琴なんか持ってない。なのに、なぜこの仏教の古典の中に阿修羅の琴っていう、これは親鸞さんが引用しているのは、孫引きくらいでして、ずっと古く、『大智度論（だいちどろん）』というインドから中国にかけての仏教の専門書にこの話が、もとは出てくるのです。それを親鸞さんは孫引きしてはるのですけども。

それにしても「阿修羅の琴」っていうことについて解説した本も、阿修羅のことはいっぱい書いてあります。阿修羅の持っている琴っていうのはどんな琴なのか、私興味持ちました。ビルマの豎琴のような、あのたて琴なのか、アポロンの弾いている豎琴のようなものなのか、ハープみたいなものなのか、それとも中国の琴なのか、韓国の伽椰琴（カヤグム）っていう琴なのか、色んな琴も調べたのですが、琴の歴史を調べたり、美術、音楽としての琴、工芸品と

しての琴のことを調べても、阿修羅と結びつける資料は何もないんです。

それでいよいよ気になったのですけれど、誰に聞いてもこれは教えてくれないし分からなかった。それで自分で探して、ああこういうことやったんか、というのを、その中に結論で最後に書いているので、今日の話の締めくくりは、一体、阿修羅の琴とは何だったのか、という話で終わりたいと思います。

3. 阿修羅とは誰か

その前に阿修羅というのは一体どういう人か。

皆さんは六道ということを聞いたことがありますかね。六つの道。六道の辻とか、六地藏。仏教の教えでは、広く、六道輪廻ということを行います。六道というのは、六つの道を私たちは日々、へめぐるっている。これはちょっと書いていませんのでね。でも、聞いたら、ああ、聞いたことあるわ、と。六道、六つの道は何なのか。地獄、餓鬼、畜生、人、修羅、天。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天と言ってもいいのです。言い方は色々あるのです。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天。覚えてください。口ずさんでみてください。地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天。

地獄というのは、地獄です。最も、非人間的な引き裂かれた状態。戦争や殺し合いによって、人間が人間であることを見失ってしまった、一番悲惨な状態が地獄のような世界です。だから、何か色んな、厄介なことで困難な時や苦しい、例えば全部、阿鼻叫喚の地獄とかですね、言葉を使います、受験地獄と言ったり、交通地獄と言ったり。そういう、どうしようもないくらい、人間性が奪われていく状態のことが

地獄。地獄のことも、これは『地獄の思想』という、梅原猛さんが一冊の本にするくらい、豊富な内容がありますので、また興味のある方はですね、『地獄の思想』というのは中公新書から出ています。そんなので調べてもらったらおもしろいのですけども。

餓鬼っていうのは、餓鬼道と言いまして、子どものことをガキと言いますね。このガキ！っていう、あのガキです。餓鬼というのは、人間の形をしているのですけども、口が小さくって、ガリガリに痩せて、おなかだけぽこっと膨れた姿として、『餓鬼草子』というものに描かれたりしているものですね。つまり、食べたいのに食べられない、飢えている状態、飢えて食べたいのに食べ物を与えられて食べようと思ったら、それがばあっと火になってしまって、身を焼いて苦しむ。現代では過食とか拒食とかにもつながるのですけども、餓鬼。子どものことをガキと言うのは、いつでも何か食べ物欲しがって、お父ちゃんやお母ちゃんに、このガキ、と怒られているからガキと言うそうですね。だから、餓鬼という一つの状態です。餓鬼のような状態に陥るのを餓鬼道におちた、と言う。

畜生と言うのは、地獄、餓鬼、畜生。これは、犬や猫や獣、家畜。ちく、しょう、ですから、畜は家畜の畜。蓄えられ、養われて生きる。つまり、奴隷状態です。人間に飼われている。いつでも紐や鎖がついている。一定の場所から動かしてもらえない。でも、その境遇に満足させられて、いつの間にか自分が奴隷であることを忘れてしまっている状態が畜生なのです。私たちがもひょっとしたら、会社とか、あらゆる人間関係とか学校とか、色んなものに縛られて、縛られていることにすら気が付かない。国家とかですね、大きな絆の中で知らず知らず

のうちに畜生になってしまっているのかもしれない。そういう状態のことを、私たちの日常の中で、朝から晩まで、地獄、餓鬼、畜生がしょっちゅう起こっているわけです。

そして、修羅が出てきます。修羅は、阿修羅の略ですね。修羅は、いつでも怒り、戦っている状態です。なぜ、修羅が戦って怒るのか。そのことは後でもうちょっと、阿修羅のことだけ詳しく言いますが、私たちも日常生活の中で、「修羅場を踏む」と言っていますね、仕事であっても、人間関係であっても、お互い命がけで戦う時は、顔が変わって修羅の相になるのですよ。怖い顔になる。でも本当は、人間同士もっと結び合って、睦み合いたいのにお互い背き合ったり、不安になってかえって傷つけ合ったりする。で、悲しくもなる。怒りも湧いてくる。そういう状態が阿修羅なのですね。それを修羅と言います。修羅道に私たちも堕ちることがある。

人、天と言うのは、人は人間の、人間らしく、やっとほっと一息ついて、自分自身の人生を考えたり、他者と自己との関わりを考えたり、この社会の中で一体どういう生き方をすればいいのか、ということを、人心地ついた、人間としての生き方を、落ち着いてもってですね。だから、人間という状態に心がいかないと、宗教というもの、仏教というものには関心は持てないのです。地獄、餓鬼、畜生に堕ちていたら、そんなもん、宗教やそんなどころじゃないのですよ。こっちの方がカンカンになっておって、修羅でもそうです。人間という状態を私たちが、ふっと我に返って保つ時に初めて、真実なるものを求める心が起こってくる。いつでもそこに呼び覚まされる。でも、それをまた忘れていってしまう。

天というのは、神様のこと。神々の世界のよきに、天上。天上というのは、あらゆる快樂、欲望が満たされた状態。天上人のような。天国にも昇る、天にも昇るような。天という世界にも、色んな段階があるのです。仏教では、ずっと、天の段階を下から上まで言うてまして、一番てっぺんを、有頂天と言うて、間に兜率天（とそつてん）という天があるのですね。有頂天というのは、我々でも、鼻高々になって、有頂天になる状態に使われる、あの天は仏教の世界ではちゃんと天上界であるのですね。もう有頂天にならざるを得ないような、最高のいい気持ちの時です。私も、その天が好きですから、時々、わざわざお金を出して天を味わいに、有頂天になり、行きます。綺麗な女性がおる所でカラオケを歌って、わぁ素晴らしいと褒めてもらって、あるいはお酒飲んで有頂天。でも、その天はあつと言う間に冷めるのですね。で、冷めたら地獄へ堕ちる。

そういう、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天という六つの、人間の心の状態、身の状態をぐるぐるぐるぐる、いつでも回っている。それは、迷いの世界だ、と。皆迷いの世界だ、と。天の神々の姿も、迷いの世界なのだと。その迷いの世界から、絆を断ち切って、その六道を輪廻している、ハリネズミのように、ハツカネズミのように、ぐるぐるぐるぐる、同じところを、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天という世界だけを回っている絆から断ち切れて、一步出るのを、六道輪廻の世界から、悟りの世界へ。悟りの世界に出た人のことを、声聞、縁覚（しょうもん、えんがく）とか、菩薩と言うのです。そして、最高に悟ってしまった人を、仏。仏さんだと言うのですね。

だから、私たちも皆、自分がいつまでも人間という世界でやっと、そういう悟りを求める心

にちらっと出会えるのですけども、そこから六道を一步出るチャンスを皆、私たちは待っているわけです。その姿を、私たちに忘れないようにするために、昔の人たちは知恵を働かせまして、六道の辻というのを決めました。

京都に鳥辺野山って、斎場へ行く途中に六道珍皇寺というお寺があるのですけれども、あそこに六道の辻というのを作ります。それが盛んになって、江戸時代になってからは全国各地どこでも、この町でもどっかあると思います、六道の辻、ほんまに六道の辻っていうのはどこ行ってもあるのですよ。建築とか、都市計画やってはる先生方の前でこんな言うたら失礼ですけども、不思議なことにちゃんと配置されて。京都なんか特に、そういう霊界みたいなありますから、いっぱいあるのですけども、どこの土地にも、六道の辻と言うのは、道がちゃんと六つになっているのです。交差点だけやなしに、そこにも六つくらい道がちゃんとなっているところ、必ずどんな町にもあるはずで

す。その辻に、たいてい、昔はお地藏さんが六体置かれておりました。これが六地藏。六地藏というのは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天なのです。その、迷いの姿をへめぐるっている私たちを悲しんでお地藏さんが、子どもを慈しんで助けるように、お地藏さんの姿になって、あなたは今、地獄に堕ちているのと違いますか、あなたは今、餓鬼道に堕ちているのと違いますか、と、私たちの心に呼びかけながら、そっと励ましてくれる。で、人間の心を取り戻しなさいっていうことを教える、そういう役割を果たしていたのです。

この頃、六道に六地藏っていうのは少なくなりましたけれども、やっぱりどこの地方へ行っても、あります。日本だけやない、これは、もとは中国から来ますから、朝鮮、中国、アジアにも、そういう六道の辻や六地藏っていう信仰

は、民間信仰としていっぱいあるのですね。

それで、これは余談ですけども、あのお地藏さんっていうのは、だからと言って、あんまり、子どもを救ってくれる救い神みたいに思っていますけども、実は、あれはなかなか、怪しい存在なのです。気をつけないといけないのです。お地藏さんっていうのは実はね、何でも仏教では仮の姿、この世に現れた時の仮の姿と、本体はこれや、と言うのがあるのです。だから神社の神さまでも、和歌山の熊野神社にまします、熊野権現という神様は、日本に仏法を興隆させるために生まれた阿弥陀如来の化身であるという信仰がずっと昔からあるのですね。そういう本体がある。本体は仏。菩薩。それが人間の前に、親しいお地藏さんとか色んな神さんの姿で現れていると言うのですね。

じゃあお地藏さんの本体は何なのか。聞いたら、びっくり。閻魔大王なのです。閻魔さん。閻魔さんと言うと、裁判官みたいな人です、怖い顔したですね。地獄へ堕ちた人を、死後の世界、三途の川を越えて、閻魔大王の閻魔帳に記された者が、生前、どんないいことをして、どんな悪いことをしたか、閻魔さんが全部調べ上げてですね、お前は地獄行きだ、お前は餓鬼道へ堕ちるとか、また言うのですね。お前は人間に生まれる。お前は極楽浄土へ生まれるだろう、とか。

考えてみたら、閻魔大王は何でそんなによく知っているんや、と。ビデオテープで撮ったかのように、色んな人の過去の行いを全部知ってはってですね、嘘を言うたら、「ああ、嘘を言うてもあかん、分かてるお前のことは全部。ほら、見てみい」って大画面に映し出すのですよ。だからそれが、浄波璃の鏡と言ってですね、大きなテレビの大画面みたいなのがあって、地獄に置いてあるのです。そこへ全部映し

出されて、「恐れ入りました」って言うて。たいていの人は悪いことしかしてないのですね。あんまり、ええことした人は滅多にいない。

何で、でも、知っているのだと言うたら、今言ったように、お地蔵さんを閻魔大王は自分の化身として六道の辻に置いて見てはるのです。だから、人間の世界に置いて、閻魔大王のスパイですわ、地蔵菩薩。だから気をつけないかんです。昔から、村の外れのお地蔵さんは、いつもにここ、見てござるって言うでしょ。見てござるって言う歌は、そういうことを分かった上で、閻魔大王として、こっそりと私たちがいいことしてるか悪いことしてるかを見てござる。という、そういうのが、閻魔大王のスパイが、お地蔵さんなのですね。

ちょっと脱線しましたけれども、そういう六道の辻というのがあって、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天。その巷を生きている私たちを導こうとしているわけです。

4. 三つの顔の表情

さて、阿修羅といったら、その中でも戦いの神様なのですが、阿修羅のことを調べるのに、色んなことをやってみましたけれども、たまたまですね、河内長野と和歌山の間金剛山という山がありまして、その山の中腹に、観心寺というお寺があります。真言宗の素晴らしいお寺です。行ったことがある人もいらっしゃると思いますが、観心寺も素敵なお寺ですから、私は何度か行ったのですけれども。

行った時に、観心寺の門前に一軒の茶店があるんです。その茶店に看板がかかっておって、「阿修羅窟」って書いてあるんですね。えっ、阿修羅窟。阿修羅の洞窟。えらい名前をつけてあるな、と。あんまり、日本全国どこ行って

も、阿修羅の喫茶店ってないやろう。ひよっとしたら阿修羅がやっているのと違うかと思って入っていったら、阿修羅みたいな顔した怖いおっさんが出てきましてね。で、まあ、そのわらび餅がおいしいのですわ。日曜しかやらないのです、今でもね。日曜日だけやっているのですけども、ここのわらび餅最高ですよ。お茶でわらび餅を食べたら。で、食べながらその店の主人に、「ここ、なんで阿修羅窟と言うんですか、何か阿修羅と関係あるんですか」と言うたら、「実はわしが阿修羅やねん」。「ええ、ほんまかいな」と思いましたけれども、「わしは阿修羅が好きでなあ、あんたも阿修羅好きなんか」「ええ、そうなんです」「そうか、そんならお前、話聞かせたるから、部屋へ来るか」言うて、奥の座敷へ通してもうたら、広い座敷が書斎になっておって、ものすごく膨大な本があつてですね。じつは在野の仏教研究者（佐藤任氏）なんですね。高野山大学を出て、仏教、特に阿修羅の研究で一冊本を書いているくらいの人なのです。『悲しき阿修羅』という本まで書いている、すごい人でして、もっと、この人の専門はアーユル・ヴェーダという、インド医学なんですね。それでいっぱい本やら論文も書いている。いやあすごい人がこんな所におるものやなあと思って、ただもんやないなあと思ったのですが、「いやいや、わしはただの茶店のおやじや」言うて、やってはるのですね。

それで、阿修羅のことを色々教えてもらったのですけども、そういうのを色々総合して言いますと、阿修羅っていうのは、ここにも書いていますように、

「阿修羅は、もともと善神・太陽神だった。それがいつしか悪の代表とされ、テロリストのように呼ばれるようになる。そのいわれを尋ねると、アーリアンに侵入され故郷を追われた先住

民アスラの姿が浮かび上がる」ところ、まとめて言えばですね。

アーリアンと言うのは、ヨーロッパ系の人々のことをアーリアンと言います。「アーリアン」という言葉、意味は、「高貴な人たち」という意味だそうです。インド、イラン、ヨーロッパ族の人々が、インドへ、インド亜大陸へ侵入してくるわけです。そしたら、インダス文明をコツコツと築いてきた人民はですね、アーリア人によって追放されるのです。その先住民がアスラと呼ばれた人たちなのです。これは歴史的なことでも本当のことですね。

それから、歴史的には先住民であった、インドのアスラ人は、激しい抵抗をするのですが、その後にインドラの率いるアーリアンによって滅ぼされてしまった。インドラと言うのは帝釈天のこと。帝釈天っていうのは、柴又帝釈天、寅さんの世界でご存知の、あの帝釈天です。神々の中でも、インドの神々の中では最高の権力と力を持った神様です。正義の神様なのです。そういう、インドラという神の名前としても語られるアーリア人によって滅ぼされ、追放され、故郷を追われた人たちが先住民アスラだった、と。

やがて、少数民族になって追い出されていった人たちには、非常に悲しいことに、抵抗した人たちに対して、「あいつらは抵抗ばかりして、テロリストや」と、「悪いやつや」と。今でも、アメリカとアフガンとかの関係を見ますと、アメリカの方が一方的にアフガンの人々をテロリストみたいな呼ばわりをしていますけれども、何かそういうのと、歴史はずっと繋がっているように思いますね。強大な力を持った者が、そこにもともといた人たちの故郷を追って、抵抗したり戦ったり、激しく争おうとして、自分の権利を守ろうとした人を「あいつら

はテロリストだ」とか「殺人者だ」と言ってですね、やっつけてしまう。そういう歴史がアスラの歴史にもあるわけですね。

ところで、その阿修羅は、仏像になった阿修羅はですね、なぜ、あの三つの顔を持っているのだろうか。興福寺の仏像、阿修羅はご存知のように、三面六臂と言いましてですね、顔が三つ、手が天を支えているような手と、挑みかかるような手と、それから合掌している姿と、三つあるのですね。これも、そういう歴史に関わる物語。これは色々な物語が仏典とかの中に出てきますけれども、例えば、こんな話があります。

インドラ、帝釈天という壮大な力を持った神様が、何でも自分の思い通りにしなくては気が済まない。で、アスラ、阿修羅も、今言ったように、戦う神様ですけども、もともとは、太陽神、善神ですから、善い神様なのです。インドラ、帝釈天と仲良しやったのです。一緒に組んで、帝釈天の大きな力を、自分をもっと発揮できるように、あちこちでボランティアのように働いていたのがアスラなのですね。

ところがですね、そのインドラ、帝釈天と言うのが、大変好色な神様でして。すぐ他人の女性に手を出す。全部自分の思い通りにしないと気が済まない神様。だから、柴又帝釈天というのは、本当はそんなにいい神様ではないのですけどね。力を持った者は何でも思い通りにしたくなるのです。食べ物も、権力も、素敵な女性も全部。

で、とうとう、一番仲良しのアスラの娘に手を出すのです。アスラの娘を誘拐します。アスラは、娘を誘拐されて、始めは帝釈天、インドラが連れて行ったと思わなかったのですね。あっちこっち探し回る、自分のかわいい大事な娘ですから。で、どこへ誰がさらったのだろ

う、どこへ行ってしまったのだろう。帝釈天に聞いても、「知らん」って言うのですね。知らんどころか、自分が連れて行って誘拐して。

でも、力のあるすごい、また魅力的な神様ですから、それだけ好色ですけども、女性にも好かれるのです。アスラの娘は、誘拐されて手籠めにされるのですけれども、インドラ、帝釈天に惚れてしまうのですね、悲しいことに。そして、子どもまでもうける。で、お父さんに報告するのです。なぜこんなことになったのか。

ほんだら、アスラはもう怒り狂ってですね、なんちゅうやつや、と。「お前が、うちの娘を勝手に誘拐して、妻にして、子どもまでこしらえて、許せん！」って言うて、帝釈天に戦いを挑みにいくのです。阿修羅も、カーツとなったら、何をするか分かりません。しかも、正義、不正義、ちゃんと分けて、不正義は大嫌いな神様ですから、帝釈天のそんなところは一番嫌いやった。でも、自分の娘がこんなことになったとあったら、許せませんから、戦いを挑みますが、悲しいことに、全力では及ばないんです。アメリカとアフガニスタンみたいなものです。まったく強大な帝釈天、インドラの前では、アスラはいつでも子どものように扱われて、傷つく。悔しいけれども、また抵抗する。そのうちに、だんだんだんだん、恨み、辛み、執念、悪の化身になっていくのです。

だから、三つの顔の一つはですね、自分の娘を帝釈天に奪われ、取り返そうとしても全力が及ばずに、やつつけてやりこめられてばかりおる、でも戦わずにはおれない、怒りの顔なのです。

それと同時に、先程言いましたように、もといた、ふるさを追われた先住民、アスラたちのように、いつになったら、自分たちの国を取り戻せるのだろうか、国へ帰れるのだろうか。故郷を追われ、奪われた者たちの、憂い悲し

む、抑圧に憂い悲しむ顔がもう一つの顔です。

そして、もう一つの顔は、何かちょっと悲しいような、ぐっと耐えているような、顔ですね。誰かがあれを、おしっこを我慢しているような顔やと言ったのですけども、うん、何か耐えている顔ですね。藤本義一が言うたんかなあ。なかなか上手いこと言うねえ、作家は。おしっこを我慢している阿修羅。そうかもしれない。でも、悲しい顔なのですね、あれはね。あれは、最後のその悲しい顔というのは、でも、彼は仏法に出会ってしまうのです。仏様の教えに出会って、仏法のある神様に、今度は生まれ変わっていくのです。だけど、もともとあった自分の心の中にある、怒りや憂いや、そういうものはなくなるわけではありません。私たちの中にも、人に辱められたり、屈辱的な目を受けたり、苦しめられたり、無関心、無視されたりしたら、ふつふつと感情が沸いてきて、阿修羅と同じ三つの顔を持っているのじゃないかと思うんです。

なぜか笑い顔というのがあの三つの中にはないです。しかし、笑い顔はあの悲しい顔に通じるのかもしれない。

5. どこで仏教に出会うのか

その阿修羅がどこで仏教に出会ったか。実はこの阿弥陀経というお経の中ではですね、阿修羅が、お釈迦様の説法を聞いて、喜んで、ありがとうございましたと言って去っていく場面が書かれているんです。私は阿弥陀経というお経を読んだ時に、一番最初に気が付いたんですが、あれ、何でこんなところに阿修羅がおるの？阿修羅言うたら、神様で悪いやつや。戦ってばかりおって、まあ言うたら、仏教を邪魔する神様なのです。仏教を邪魔するのが自分の正義だと思っていた神様なのです。

なぜかと言うと、阿修羅でも帝釈天でも、神々が支配している世界。それは、神々にご祈祷して祈って、そして捧げものをしたら、神々が私たちの欲望を満たしてくれる。今の日本の神様、神社へ参ったりするのも、あれもそうですね。私たち日本人も、正月になったらなぜか、色んな神社や仏閣へお参りして、手をたたいて、わずかに百円くらいでいっぱい願ひ事していますけど。ああいう願ひ事をしたら叶えてやる、というのが神様の仕事なのです。それはやっぱり、願ひ事をせずにおれない人間の弱さとか煩惱、そういうものがあるから、神頼みをしたり、時には仏も頼んだりするのですけども。

仏教の教えと言うのは、そういう神頼みをしたり、他に依存したりして、救いを求めたりご利益を求める、そういう心が必要でなくなってしまうのです。仏様の教えに出会って、そういう、仏様の教えに出会って、人間としての在り方に目覚めた時に、六道の絆から断ち切れて、悟りを求め、道を求める求道心が芽生えて、そして真実に生きようとする。そういうきっかけが与えられると言います。ですから、今の言葉で言いますと、自立していくのです。何者にも依存せず、神や仏にも依存せず、自分で、自分の問題を本当に解決できる知恵を仏教の世界から頂くのですね。

そうしていったら、神頼みする必要がなくなりますから、ものすごく楽になるのです。そういう人が、お釈迦様の教え、仏陀になる。それを広めておきますと、どんどんどんどん、仏陀が増えてきます。そうすると神様、商売あがったりになるじゃないですか。うちへあんま来んようになった、この頃仏教っていうのが流行って。段々、人間が何か自立しやがって、我々に神頼みせんようになってしまった、と。これは

困ったことや、と。

と言うことで、アスラが送り出されるのです。「お前、ちょっと、邪魔してこい」。お釈迦様が説法している座へ紛れ込んでですね、そして「潰して来い」。「はい。任かせてください、そういうのは私は得意」。そしてアスラは行きます。

そしたら、こういう席で、例えばお釈迦様が説法をしていたと言います。そうすると、アスラはだいたいあの後ろ、あの辺に座って、あのくらいの位置で座っているのですわ。それで邪魔するのですよ。大きな声出したり、「わあー！」って言うたり。変なところで「わっはっは」と笑ったりね。立ち上がって、「お前の言うてることはおかしい！」とかね。完全な妨害ですけども、そういうことばかりしに来る。

皆も、初めはびっくりしていたのですけども、「あ、あれ阿修羅や。阿修羅って言うたら悪い奴で、邪魔しに来ているのや、ほっておこう」。お釈迦様はにこにこ笑って、「あ、今日も来ているか」みたいな顔して、知らん顔して、何を言われても、話は途切れなくやっているのです。さすがお釈迦様ですからね。そんなことでいちいち怒ったり、びびったりはしないんです。

それを毎日毎日毎日毎日、三ヶ月ほど続きますと、邪魔しにきていた阿修羅も、毎日のように仏教を聞いていますから。お釈迦様の説法にあっていますから、だんだんだんだん、もう三ヶ月くらい目の時は、かなり通になるのですわ。「今度はこんな説教や」って、楽しみになってくるのです。「いかんいかん」と思いながら、自分で。「いかんいかん」と思いながら、「今日はどんな話やろう」って、身を乗り

出して聞くようになるのです。

あろうことか、「今日は極楽浄土という世界があるのやで」という話だった、その日は。阿弥陀経というお経は、お釈迦様が、いつもだったらお弟子の誰かが、「お釈迦様、質問があります」って質問したのに対して、お釈迦様が「それはね、こういうことなんだ」って答えて、対話しながらやっていくのに関わらず、その日に限ってお釈迦様は、一番前の、ちょうどこの辺に座っていた、あなたのような位置におった舍利弗（しゃりほつ）というお弟子。知慧第一と言われる舍利弗というお弟子に向かって、舍利弗という人に向かってだけ語りかけるのです。

「なあ、舍利弗。わし今日は舍利弗にだけ、聞かせるような気持ちで話をするから、皆もあわせて聞いてほしい」その席には色んな人がいました仏様の十大弟子はもとより、天から神々も降りてきて、聞いていた。で、そこで、開かれた場所は祇園精舎というお寺です。祇園精舎というのは、祇樹給孤独園（ぎじゅぎっこくおん）と、原語では言いまして、身寄りのない人や、老人、病気の人、その人たちを集めて食事をサービスする、そういう場所だったので。そこでお釈迦様は何度も何度も説法をしている。

だからあの平家物語のような、「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり」のあの祇園精舎は、そういう場所が実際にあったのです。今でも、インド行きますと、祇園精舎の跡が残されているそうですけれども。そこで、だから、一般の人たちも、大人も子どももワイワイワイイ言いながら、お釈迦様の説法に耳を傾けに来ていた。阿修羅もその片隅で、「今日もどんな邪魔をしようか」と思いながらおったら、その日に限ってお釈迦様は、非常に精神性の深い話

をした。心の中を、私たちは覗いてみたらどうなのか。

「実は、舍利弗よ、極楽浄土、極楽という世界があるのだよ。阿弥陀仏という仏様がおられるのだ。それは遠い所でね、西方、西の彼方十万億の世界なのだ。そこには苦しみはなくって、ただ楽しみだけがあるから、楽の極み、極楽と言うのだ。どんな世界なのか、これからお話をしよう」と説法が始まるのです。

いつの間にか阿修羅はそれにはまってしまっていて、「こんな話は滅多に聞けんわ、聞こう、極楽ってどんなところや」と身を乗り出して聞いていたら、後ろの方でもっと来ていた人の中に、阿修羅の仲間の神様がいて、阿修羅がえらい大人しくなってしまうているから、後ろから「わーい！」と言うて邪魔し出すんです。

「お釈迦様、何を言っているのか分からへんぞ」とか言うてた。ほな、その時阿修羅がさっと立ち上がってね、「こらっ誰や、言うた奴は！」叱り付けて、「黙って聞かんかい！」って。

阿修羅に叱られたものですから皆も、しーんとなってしまって。阿修羅も自分でハッと気が付く。「あっ！わし、何したんやろう、今。ミイラ取りがミイラになってしもうた。お釈迦様の説法を邪魔する奴を怒ってしまった。ああ、これがでも、私の本当の安らぐ世界だったのだ」と、手を合わせる。その顔が、あの悲しい。そやから、今まで仏法を妨げ、お釈迦様の邪魔をしていたことを、深くお詫びする、懺悔する、仏教では懺悔と書いてさんげ、と読みます。懺悔した気持ちを表すのが、あの悲しい顔だと言われておるのですね。

天を支えようとしている姿は、これはやっばり、私は正義の味方で、天の支配者なのだ、と。帝釈天なんかには負けてたまるか！と言う。

そして、もう一つの、これは戦う姿です。自分の権利を脅かそうとする奴とは徹底的に戦うぞ、っていう、テロリストにも時にはなるぞー、とか、やっぱりそういう負けない、戦う、闘魂の姿ですね。だから、アントニオ猪木にも、闘魂、阿修羅が乗り移るからあんなことするんですね、きっとね。で、私たちの中にも、そういうものが宿っているはずですよ。でも、もう一つの姿は、手を合わせて、悲しい顔の、懺悔する、そういう姿が、三つの顔としてあるわけですね。

6. 阿修羅の琴

まあ阿修羅を巡る物語は色々あるのですが、そういうのが、阿修羅のバックグラウンドと言いますか。だから阿修羅は、興福寺の阿修羅だけではありません。全国各地に阿修羅像があります。特に中国、朝鮮に行ったら、阿修羅は絵にいっぱい描かれていて、チベットの仏教でも。だから、色んな阿修羅があるのにびっくりするのですけれども。

最後に、もう時間がありませんので、阿修羅の物語、もっともっと話したらいいのですが、時間の関係でカットしまして、最後に阿修羅の琴という話をしてみたいと思います。

で、その阿修羅の琴があつてですね、その阿修羅の琴は、演奏する者がいない、弾く者がいないのに、勝手に鳴り出す、と言われていた。これは『大智度論』という仏教書に出てくる。それを親鸞さんが孫引きをして、それを、まるで阿弥陀仏の他力のはたらきのように、自然に、自ら鳴り出す、ということなのだという、例え話としてもってきているのですよ。で、私は、例え話の深い意味はいくらでも、深く掘り

下げて、味わうことは可能なのですけれども、私は、どっちか言うとそのことよりも、あの琴っていうのは一体どんな琴やったんやろか、というのが気になりだして、先程言ったように調べましたら、どの絵にも、どの仏像にも、琴と一緒になってるのはないんですよ。阿修羅は単身で、琴も何も持ってない。

宇治の平等院というところに行きましたら、平等院の中の本堂、雲に乗った供養菩薩という二十五菩薩、出てきますね、たくさん。レリーフ。その中にね、阿修羅はいない、やっぱり菩薩ばかりです。色んな楽器持っているですよ。バンジョーみたいな楽器やら、お琴みたいな、小さい手琴とかですね、それからカランカランと鳴らす打楽器とか、いっぱい出てくるのです。で、多分、阿修羅の琴というのは、これのことやろうというふうに目をつけたのがありますよ、こんな琴を弾いている阿修羅の像があるはずやと思って、探しまくるのですけれども、とうとう未だ、私はわかりません。もし、わたしは知っていると言うかたがいたら教えてほしいのです。そのくらい、持っている姿がないのですよ。

だけど、じゃあなぜ阿修羅の琴ということだけが残っているのか。それのもとを尋ねていきますと、『宇津保物語』というのに出会います。このことをちょっとね、見ていきますと、『宇津保物語』って言うのは、『源氏物語』よりもっと古い、日本最古の長編小説なのです。今、『源氏』がちょっとブームになっていますが、私は、『宇津保物語』っていうのは、また『源氏物語』にすごい影響を及ぼしていますので、『宇津保』を読んだら『源氏』はまた面白さが倍増するだろうというふうに思っています。古いのは、一番古いのは『竹取物語』。それと『源氏物語』の間に入っている、大長編小説です。全二十巻。日本古典文学大系の第十

卷、十一卷、十二卷、十三卷に亘って全部入っています。膨大な量なのです。『源氏』よりちょっと短い。すごいものがある。作者は不詳なのですが、たぶん男性が書いただろう、と。で、『源氏物語』の作者、紫式部もこれ読んでいるから、『宇津保物語』のことを想定しながら、音楽、琴の話は出てくるのです。これは、琴の物語なのです。琴を巡る壮大なロマンが『宇津保物語』なんです。

始まりは、ここにも書いていますように、俊蔭という少年、たいへん賢い、生まれながらにして、賢明で、わずかに六歳くらいで、日本語と中国語、朝鮮語ができた、会話ができたというくらいなのです、そういうふう書いてあるのです、『宇津保物語』。

そして、あまりにも聡明な少年だったので、帝から嘱望されまして、たった十六歳の時に、遣唐使に推挙されるのです。遣唐使、中国へ行くあれですね。お父さんやお母さんは大変悲しみます。でも、お上、帝の命令ですから、仕方ない。送り出して、しっかり向こうで学んで、日本へ帰ってきては、私たち教えてください、この国を素晴らしい国にしてください、みたいなことを託して、送り出すのです。送り出すのですけれども、俊蔭はですね、中国へ向かう途上、嵐に遭って、漂流するのです。

で、見知らぬ国へ辿り着きます。『宇津保物語』では、波斯国と書いてあるのです。でも、波斯国がどこに当たるか、学者の間でも定説はないそうですが、一説にはペルシャとか、インドとか、南方のフィリピンあたりとか、色々な説があるそうなのですが、定説はないのです。全然見知らぬ土地。中国ではとてもない。

そういう国へ流れ着きまして、そこで、命は助かって、浜辺を歩いていますと、美しい琴の音色がするので、その音を辿っていきますと、

琴を弾いている六人の男たち。木の下で琴を弾いているのに巡り会うのです。なんと素晴らしい琴の音色だろう、と。琴と言っても、その琴は、中国、日本のいわゆる琴の形の楽器なのです、弾いているのに出会った。

「お前はどっから来た」「実は私は日本からやって来ました。中国へ行く遣唐使になって、船に乗ったのですが、こういうことで流されて、こんなところへ来てしまいました。ここは一体どこですか?」「こんな国、お前は知らないやろなあ。帰るにも手立てがないし、しばらく、おれ。いずれお前の国へ帰るチャンスも巡ってくるだろう」と。「せっかくなので、私たちと一緒に暮らさないか」で、世話をみしてくれるのです。

それだけやなしに、「僕もその琴を習ってみたい。その楽器を使いたい」「そう、やってみる?」っていう形で、琴を教えてもらう。琴はなかなか難しい楽器で、色々な秘曲があるので、それも全部、賢いですから、あつという間に上手になって、他の六人の演奏者たちが、わあーって、感動するくらい素敵な弾き手になっていくのです。

そして何年か経ちます。何年か経つうちに、国へ帰ろう、帰りたいと思う心が湧くのですけれども、なかなか容易に、日本へ帰る船とか、手立てがない。

ある時、遠いところから、カコーン、キコーンという、木こりが木を切っている音が聞こえてくるのです。その音がいかにも美しい、琴の響きのように美しい。木を切っている音が、カコーン、キコーンと聞こえてくるのです。

「一体、あの音はどこからするのだろう。あんな綺麗な音がする木は、どんな木だ、誰が切っているのだ」音を尋ねて、旅に出ます。どうもそんな近くにはいそうにもない。山の中をさまよい、湖をまた渡り、川を越え、谷を越え、何ヶ月も何ヶ月も、その音のもとを突き止

めて、ようやくたどり着いたのが、山深い里、人里はるかに離れた山の深いところに、音が本当に近づいてきた。これや、近づいてきた、ここやここや、と言って、俊蔭はそこへ分け入っていくんですね。

そうしますと、そこで、恐ろしいものに出会うのです。目が爛々と、車の輪のように大きな目で、ぐるぐると回って、頭から火を噴くように、怒髪天をつく、髪の毛はわあーっと逆立って、口は上肢のように裂けて、巨大な体の下には恐ろしいものたちが、わやわやーっと出てきて、「お前はどっから来た、この里へ入ってはならぬ、殺すぞー！」と脅すんです。「あなたの方は何ですか?」「知らなかったんか。ここは我々阿修羅の里なのだ」

なんとそこはですね、阿修羅の里だったのです。阿修羅というのは、そんな恐ろしい姿で描かれているのです。実際に、『宇津保物語』の中では、もっとすごい表現で描いているので、実際に読んだら怖くなるのですけどね、「えらいものに会ったなあ」と。

「それにしても、こんなところまでお前はなんでたどり着いたのや。すぐに食ってしまうところだけれども、話だけは聞こう」と言うて、首根っこを押さえながら、「話を聞くから言え！」言わされるのですね。

「分かりました、言います。実はこれこれこうで、私は、この国の浜辺に流れ着いて、お琴を習っていたものです。それが素晴らしい、木の音、木こりの音がするから、どんな木が生えているのか、誰が木を切っているのか、あんな木で琴を作ったら、さぞかしい音だろうな、と思って、捜し求めて何ヶ月もやって来たら、ここだったのです。どうか、私にその木を分けてください。この木で私は琴を作って、これを土産に、国に帰りたいのです、日本へ」「何という、勝手なことを言うか、お前は。こんなとこまで来て、殺されかけているのに。この木

は、わしらの木ではないのじゃ。我々阿修羅の身は、天の神々によって、罪を罰せられて、長らくこの地で、これで楽器を作れば、素晴らしい音のする木を守らされている、守り神、阿修羅がわしらなのだ。だからここには阿修羅の間が集う。他の普通の者は、絶対入れないようにしている。こんなところに近づくだけでもありえないことなのに、お前は近づいてきた。木を分けて欲しい?とんでもない。この木は、ずっと、わしらが百年、いや、千年、育てて、その報いとして、天の神々から、ほんの少しだけ分けてもらう。あとは天の神様に捧げたり、仏様に捧げたりするものや。お前らに分ける分など、これっぽっちもないわ。今から食ってやるから、覚悟せい！」

と、まさに、かぶりつかれんとしたその時に、天がにわかになんて暗になって、雨がざーっと降って、風が吹いて嵐になって、天の神様が現れるんです。美しい天人の女性が現れて、「これこれ、阿修羅ちゃん。何を怒っているの、あんたは」と言うてなだめるんです。「この者は只者やないですよ。日本という国から来た、素晴らしい才能を持った少年だから、あなたたち、そんなに怒らないで、わたしが許すから、わたしの命令で、あなたたちはこの木を作っている私が許すから、この子に三十本ばかり木を持って帰らせなさい」

こう言うて、許すのですね。天の神様はそう言うて、自分たちの支配者にそう言われたものですから、阿修羅もはは一つて言うことを聞いて、「先程は失礼をいたしました」と言うて、大変なもてなしをして、お土産に、楽器を作るための木を三十束ほど持たして、送り届ける。

そして、もといたところへ着いたら、ちょうど日本へ行く船があるという情報が入ってですね、それで、俊蔭君は、その船に乗って、無事に日本へ帰る。そしてその木で美しい琴を作っ

て弾きますと、まさに、極楽浄土の音が響いてくる。弾き手が弾かなくても響いてくるような音がする。これが、阿修羅の琴なのだ、と。

これが、『宇津保物語』の第一巻の始まりなのです。ここから壮大な、全二十巻に及ぶ大ロマンが始まるわけです。全編、琴の物語。琴をめぐる男と女の素敵な物語なのです。だから、『宇津保物語』、大変なものですけれども、いづれまた、日本の文学全集で現代語訳が多分出るはずですね。簡単に読んでみたい人はですね、『宇津保物語』もつい最近、文庫本が出ました。今までこんなものはなかったのですが、角川ソフィア文庫で『宇津保物語』を要約してですね、一部を現代語訳して、全体を見事に要約した、全巻を要約した文庫本が出ていますから、興味がある人は読んでみてください。この最初の方に今言ったお話が出てきます。阿修羅との出会い。

つまり、阿修羅の琴と言うのは、阿修羅が持っている琴やなしに、阿修羅が守られている、素晴らしい、それで作ったら素晴らしい音のする、楽器ができる、その木のことを阿修羅の琴と言っていたのです。そういうものがもとになって、阿修羅の琴の話ができた、ということがありますので、今日はそのお話で締めくくって、阿修羅に関して、ほんのさらっとですが、そのバックグラウンドということに興味持っていただけたらと思うのでございます。

どうも、ご清聴ありがとうございました。



～Cafe-Time～

1. 失われた宗教の教え

川浪：せっかく阿修羅のお話があったので、画像を持ってきましたので、ちょっと見ていただきたいと思います。

これが阿修羅でございます。三面六臂、顔が三つで手が六つという、非常に変わった像ですね。これは興福寺の仏さんなのですけれども、本来ならば、興福寺には三つの金堂っていうものがありまして、東金堂、中金堂、西金堂。まあ、東と真ん中と西にありまして、これは、阿修羅像は西の金堂にありました。この西の金堂はですね、これを作られた方が、光明皇后というお后様ですけれども、亡くなったお母さん、橘三千代あるいは、色々、名前が、言い方があるのですが。この人の菩提を弔うために建てられたお堂の中にあります。

そこは、中央に、釈迦如来像というものがございまして、それをぐるっと取り囲むようなかたちで、色んな仏さんがおりますけれども、それを八部衆と言いまして、これからちょっと像をお見せしますけれども、そのうちの一つです。

で、他の八部衆の他の七人は、非常に、おもしろい格好をしていますけれども、この阿修羅だけはですね、非常にこの、菩薩さんという分け方の仏さんに似ておられます。これ、見ていただいたら分かりますように、何かこう、華奢なですね、少年っぽい感じですね。腰に、裳裾の裳というものをつけておりますけれども、今のインド人も巻きスカートをはいておりますけれども、それと同じですね。

で、手をこういう風にしてはいますけれども、



この上には実は、色んな宝珠というものが乗っていたのじゃないか、とか、正面で合掌してはりますけれども、合掌したところにも何か持っていたんじゃないか、と言われております。

これが巻きスカートの部分で、顔が三つありまして、手が六つありまして、この上に何か乗っていたのじゃないか、と言われるます。

阿修羅像を始めとして、これは脱活乾漆像と言いまして、これ何かね、麻布の上から漆を塗って型抜きしたもので、非常に軽いですね。軽いからこれ、何回も何回も、この興福寺は焼けておるのですけれども、そのたびに運び出されて、今の姿になっている。

で、当時はもちろん、ここに彩色と言って色を塗っておりましたので、もったきりびやかな色をしておりますけれども、これが正面です。

今回ですね、東京や九州で見ていただいたら、僕らも、興福寺の、こういう宝物があるところへ行きますと、正面からしか、今まで見れなかったのが、今は背面が見れるそうなのですね。これが、今回の特徴、人気を呼んだところですね。普通は正面しか見られなくて、僕もこの顔がどんな顔しているのかとか、後ろ、背中、いつもどな

いなっとなのや、と気になるってたんですが、今回この背面を公開したということで話題になっております。

これが正面のお顔ですね。非常にこの、阿修羅を始めとして、眉間にしわを寄せておりますね。これは解説があったかどうか分かりませんが、皆非常に憂いを含んだ、ある種、ちょっと怒りを込めてですね、睨み付けているような表情をしております。

これがやっぱり、脇面の、右のお顔。ちょっと正面のお顔とは、表情が違っております。

これが左。非常に、唇をかみしめてですね、この表現が非常におもしろいと思います。

これは臂釧（ひせん）と読みますが、この上腕部のところですね、手のこの辺に付いている飾りであります。これは首のネックレス。瓔珞（ようらく）と言います。

これは洲浜座（すはまざ）っていう、これは岩の一種なのですが、おもしろいのは、サンダルみたいなものを履いてはりますね。板金剛と言うらしいですけども、今もインド行くと、こういうサンダル履いているインド人がたくさんいてはりますけども、他の八部衆の七人は、杳（くつ）と言うですね、こんな素足で歩いておりませんが、この阿修羅だけが唯一、この肌を露出して、足も素足でいらっやいます。

他の七人をざっと見ましょう。

五部浄さんっていうのは、この上半身しか残っておりません。

これが沙羯羅って、何かこう、童顔の、可愛らしい顔をしておりますね。

これが鳩槃荼って、すごい、この炎のような頭髪になっておりまして、恐ろしい顔してはります。

これは乾闥婆ですね。頭に獅子の被り物

をしておりますね。

これは迦楼羅っていう、鳥の顔をしておりまして。こんなん、僕好きですね。非常におもしろい顔。

緊那羅さんですね。

畢婆迦羅さん。これも、難しい字ですね、これ。急いで覚えました。

と、言うことで阿修羅像の解説でした。あまり長くやると、もうこれだけで終わってしまいますので、ここでおしまいです。

水内：私、大阪市大の都市研究プラザの水内です。一応、ここのお部屋を大学として、使わせていただいで。ちょっと軌道に乗ってきたっていうか、色んなことで使うようになってきました。で、今日、このように非常にいい雰囲気、昭和の始めの、小市民的建物の中で、欄間もあり、ですね、ちょっと蛍光灯も、こういう白熱の感じでされて。

そういう中で、今日はまた戸次さんのお話をお聞きしてですね。もともとの知識がないものですから、全てが、こう、まだ吸収されているっていう、小学生になった気分です。教えられることが全部新しいっていうので、非常に、ただ、どっかに響くものがあるってですね。これ、ずーっと聞いてみたいなって。今日のお話でも、やっぱり途中で飛んでいるところがたくさんあるのじゃないかなって思っ。もっともっと聞いていきたいなあという風に思っております。

六道のお話が出てきましたが、確かに、日本橋の電器屋の裏に六道ヶ辻っていう地名が残っていて、ああ、あるなあって思いながらですね。あれも、そういう由来のところなのですかね。ありまして、色々勉強させていただきました。

これずっと続けてやっていきたいと思えますので、ずっと案内流させていただきますので。今日、最後に喋るべきでしたが最初に喋ってしまいましたが、また今度ともよろしく願いいたします。

A：すみません、今日突然殴りこみにかけました、Aと申しまして、僕もちょっと僧侶の端っこにしまして、本職じゃないのですけども。本職と言いたい恥ずかしい話なのですけども、僧侶のちょっと端っこにしまして。さっきの水内先生とは西成の楽塾（らくじゅく）で一緒に勉強したり、教えたり教えられたりというご縁で、彼ともご縁がありまして、本職は、他にも色々な仕事を、四つ五つ仕事をしていますので。一つは、今の皆さん大丈夫だと思いますけども、心の病を持っている、そういう精神障害の方の就労支援と言うか、社会にもう一回挑戦したい方の応援を、今やっています。皆さん、大丈夫ですか？ そういう時はいい先生いますのでご紹介しますので。自分一人で抱え込まないように。色々ご相談もしますので。Aです、よろしく願いします。今日はどうもありがとうございました。

B：Bと言います。大阪市大の文学部地理の卒業生で、今は会社員をしています。今日は水内先生に声を掛けていただいたので、ちょっとお話を聞きに来ました。

印象深かったのは、仏像がギリシャの文化と出会ってできた、みたいなことは聞いたことがあったのですけど、その背景が、お釈迦様と遠ざかっているのが悲しくて、つくったのやっという話が非常に特に印象に残りました。今日はどうもありがとうございました。

C：先生、今日はありがとうございました。おそらく私が一番、この中で年上ではないかと。先生も含めて。と言うのは、私も大阪市大の文学部を、これ言うとなが分かるのですが、昭和32年に卒業しています。それですでに、一番始めは新聞記者をやりまして、その後はちょっとホテル関係の会社へ行き、そして最後は大阪教育大学の理事を4年ほどしました。色んな仕事をしてきまして、今日ね、阿修羅像のお話が大変、私かねがね興味がございまして。と言うのは、我々くらいの年になるとね、本当にこの前のへんに、しわが寄っている人が。年寄り皆そうです。皆とは言わないな。いっぺんよく見てください。やっぱりこれは、その人の人生を表しているの tochやうかな。つくづく、今日のお話聞いていて、やはり、笑い顔っていうのは、今の世の中にある。これは日本の中だけやなくて、世界の問題だろうと思うのですけれども。そんな感じが非常にしております、阿修羅っていうのは、ある意味では、我々のこれまでの生き様をある意味で表現しているのではないかな、という気もしております。ちょうど大阪市大の今の学長が、浄土真宗。あの方、本願寺派の僧侶でございます。実は私も、浄土真宗本願寺派の、一応家がそれでございます。お寺とは違いますが、そんな高貴な生まれではございませんが。何も浄土真宗だけじゃなくて、私、日本の仏教っていうものが、もういっぺん、きちんとしたかたちになってほしいなあっていうことは常々思っております。さっきもちょっと水内先生とお話しておったのですけれども、四天王寺の前の官長の出口さんっていうのは、私のちょっと後輩になりますけれども、彼と話していました

ら、彼はやっぱり、日本の教育で足りるのは宗教教育違うかっていうことを言っていました。宗教教育が絶対ええ、とは言いませんけども、やはりそういう、何かこう、簡単に割り切れないものがいっぱい世の中に、正直に言いますけど、75年生きてきましてね、割り切れんことはいっぱいある。それを最後救えるのは何や、言うたら、やっぱり私は宗教ではないかな、それもやっぱり仏教ではないかな。特に私、子どもの頃からお寺へよくおばあちゃんに連れられて行きましたもんですから、その感が非常に深うございます。ぜひこれからも、ひとつ先生どうぞ、そういう意味でも、仏教をもう一度しっかりしたものに。えらい説教がましいことを申し訳ありません、恐縮でございます、あんまり長くなったらいけませんので、失礼いたします。

2. お地蔵さん辞めますという貼り紙

D：今月も来させていただきました、Dです。ありがとうございます。一月ぶりに、このおうちで、先生のお声、本当にいいお声ですね。お話も楽しかったですけど、声をずっとこう聞いていると、何かすごくいい気持ちになります。本当楽しいひとときでした。

川浪さんが、初めて賢そうなこと言うてはるのを聞いて、ちょっと感激でした。いつもはお店で会う時はそんな感じじゃないので、賢いことも言いはんのやなあと思って、感激新たにいたしました。

また、私の知りたいのは、お祀りの仕方っていうの、ちょっとまた教えていただきたいなっていうのがあります。ありがとうございました。

E：北沢長衛という居酒屋を、立ち飲み屋をやっているEと申します。今回も二回目、参加していただきまして、ありがとうございます。同じく、川浪さんが今日は賢く見えました。うちのお店で、わあーって、いつでもようやっってはるような、いつもいい、楽しいお酒で、色々お話を聞かせていただいているのですが、今回ちょっと、阿修羅像の中に、お地蔵さんの話が、閻魔様やっていうのを初めて知ったのですよ。で、ああ、閻魔さんやったんや。周りの子どもたちを守っているのがお地蔵さんなのかなあと思っていたのが、閻魔様やったってことなののですが、私のこの近所に何かの事情があったのだらうと思うのですけども、お地蔵さんのところに一枚の紙が貼られていたのです。それが、「お地蔵さんやめます」という一枚の言葉書かれていたのですね。で、お地蔵をやめるっていう言葉がね、正直怒りを感じたのですよ。地蔵をやめるなんて言葉、絶対ない。何かの事情は多分あるのだらうとは思いますが、「お地蔵さんをやめます」ということにすごい怒りを感じて、でもその怒りを感じたことに、何の努力もできていなかった私にもっと怒りを感じたのですけども。今日はこういうお話を聞いて、これから、何かそういうことがあったら、川浪さんに相談をして、ちょっと色々動いてみようかな、と思いました。ありがとうございました。また、来月もよろしく願います。

F：王子町でカンボジアカフェをしております、Fと申します。今日、映像とお話と聞かしまして、カンボジアでも阿修羅像見たな、とか、今見た、鳥の顔した仏像見て、

あ、ガルーダやな、とか、色々共通点、もちろんね、あちらの方から伝わってきてるんで、共通点多いと。非常に興味深い話でして、また機会がありましたら呼んでください。

G：同じくカンボジア料理店の方で、料理を作らせていただいているGと申します。やっぱり川浪さんがすごく格好良く見えて、本当にすごいなあと思いました。初めて、ああサラサラと、難しい漢字を読んで、スラスラと進行されている姿を見ると、やっぱりすごい人なんやなあと思ったわけなのですけれども、最近、宗教の成り立ちと言うか、そういう歴史にすごく、何か興味を持ち始めていた時に、川浪さんと出会って、そしてここでこういう宗教の話をしてくれる会を持ってくれるということで、すごく行きたいなあと思って、今日が初めてなのですけれども、一番とっかかり易いというか、阿修羅像とか、ぐっと気を引くようなところからとっかかり、こうやってお話聴かせていただいて、また何か、自分で色々感じるところもあったので、また、しっかりと勉強して、色々考えていこうと思っています。ありがとうございます。

H：今回また、二回目参加させてもらいました、Hと申します。私、阿修羅像がそんなブームになっているとかいうのも全然知らなかったのですけれども、今日のお話聞いて、阿修羅っていうのが神様なのだけでも、その、怒りとか悲しみとかそういう思いを抱えているっていうのを表現しているのが、親しみ持てるって言ったらかしいのですけれども、そういうのがブームになっているのに関わっているのかなって、そこらへん、私は感銘を受けました。ありがと

うございます。

I：西成で、平均年齢が78歳くらいのおじいちゃんたちがやっている、紙芝居のマネージャーというか、私がお世話されているような感じなのですが、やっているIと申します。ちょっとアレンジ紙芝居劇みたいな感じで、素人のおじいちゃんたちが、素人丸出しでやっている感じの紙芝居で、ちょっとずるい感じの紙芝居なのですけれど。

今日は阿修羅っていうことで、うちの母は私が子どもの頃から阿修羅のすごいファンで、部屋にすごいポスター、多分ビジュアル的に好きなのだと思うのですが、べたべたポスターとか貼っていて、私は子どもながらに時々、母の寝室にもぐりこんで、こっそり阿修羅の顔を眺めたりして、子ども心にちょっとこう、すごく切ない顔だなあと思っていたのを思い出しましたので、また今日の話をもに伝えたいと思います。ありがとうございました。

J：はじめまして。今日は初めて参加させていただきました、Jと申します。色々な仕事をしているのですけれども、一つには西成市民館の相談員としても携わっておりますので、多分こちらにいらっしゃっている方々で、色々とお世話になって、これから先もお世話になることが多いと思いますので、よろしく願います。市民館と、あと、以前携わっていたホームレス支援の関係で、川浪さんとはちょこちょこご縁があって、お会いする機会があったのですが、Iさんに「同い年」でって言ったから、川浪さん年齢不詳にされているそうですね。すみません。まだ私の年齢言ってないので。川浪さんと同い年なのですけれど。

それはさて置いて、小学生の娘が、実家が私、福岡で、この夏帰省した時に、娘だけ大宰府の阿修羅像を見に行く機会がありました。私見に行けなかったのが、早速ですね、帰ってきたら、新聞紙とダンボールで二つ顔を作って、新聞で顔を作って、手をダンボールで作ってくれて、うちにはまた別の阿修羅像があるのですけれどもね、けっこう娘自慢ですけども、目とかが、今見せてもらったら、よくできているなってこともあって。今日は帰ったら、娘に戸次先生の、分かりやすかったのを、それを解説して伝えたいと思います。できたらここへ連れて来れば良かったなっていう風にも思っています。本当に分かりやすく楽しいお話で、吸い込まれていきまして、ありがとうございました。

3. 日常の中にある宗教

平川：どうも、こんばんは。また引き続き、西成の釜ヶ崎ってところから来たのですが、私、ココルームっていう、アートNPOなのですが、そのスタッフをしていまして、釜ヶ崎では、西成のおっちゃんたちとか、地域住民らと一緒に交流するスペースを運営していたりします。ここに来たのも、やっぱり川浪さんと知り合って、紹介してもらったのですが、やっぱり普段の川浪さんは、今日のように真面目なところを見せることはほとんどないかなって。ついこの間は、マイク握ってビートルズを熱く語って熱唱してくれたりとか、そんなとこぼっかし見てたので、今日は仏教の話っていうことで、色々本当に勉強させてもらいました。

で、特に僕の中で印象に残ったのは、阿

修羅が権力に対して色々な葛藤を繰り広げるのも、現代風にアメリカとアフガンとかそういう風に説明して下さって、あ、こういうことって他にもいっぱいあるなっていう風感じまして。僕、つい先日なのですけれども、韓国の方に行きまして、韓国行った時に、いわゆるバラックみたいなところが今でも残っていて、そこを立ち退きさせるっていう、いわゆる行政の権力の行使と、そこに立ち向かう住民たちっていう構図を目の当たりにしたりだとか、日本でも、特に釜ヶ崎なんかでも、そういった権力構造なんていうのはあるんじゃないかなって。こういうことを、仏教を通じてまた再認識させられたっていう風に、本当に勉強になりました。

実は僕、仏教の高校に行っているのですが、こういった話聞くのは本当、初めてのよ様な感じなので、またちょっと勉強させていただければと思いますので、よろしくお願いいたします。

K：今回初めて、っていうのは、動機は不純で、萌木星（ほうきぼし）さんのケーキが好きで、昨日の晩にメール送って、慌てさせて申し訳なかったのですが、それともう一つはね、ここの家が前から知っていて、ああ、変わった家だなと思っていて、一回入ってみたいと思っておったので。家はすぐそこなのですが、だからただ単にそれだけの理由で、仏教の方はね、そんなに興味があるかと言うたら、まあやっぱり日本に住んでいる限り、けっこうね、縁があるのですが。家では、毎朝4時半に起きては仏壇にちゃんとお仏飯供えたり、神棚にも色々供えたりしているのですが、拝むか、言うたら、拝んでないのですよね。単に置いているだけ、

というね。その程度のことで。ただ、日本人、お寺っていうのは非常に落ち着くか何か知らないけど、行くことは多くて、ただ、そしたら宗教心があるかと言うたら、そんなに拝まない。というような、中途半端な仏教との関わりなのですけど。

それとあと、私、実は市大の土木出ておりました、今、都市政策、ある府下の市で都市政策をやっていますので、それでまた、近々市大の方にお世話になることもございますので、よろしく願いいたします。

非常におもしろいお話だったので、次回からも、ぜひとも来たいなど、思っております。

それとね、六という数字がよく出てきて、あれは何か意味があるのですか。私は山が好きでよく登るのですけど、大峰山登ったことないのですけど、さっきの懺悔やないのですけど、懺悔さんげ、六根清浄言うでしょ。六っていうのは何か意味があるのかなあ。

戸次：意味はあります、六とか七とか。・・・
また機会があったら。

川浪：はい、お願いします。

L：Lと申します。このケーキを出してくれている萌木さん行って、こんなんあるよって言われて、フライヤーもらって見たら、阿修羅像のなんたらかたらって書いてあったもんだから、まあ行ってみよかって、まあそんなくらの動機です。友だちが、仏像に凝ってまして、三年くらい前ですかね、京都行った時に、時間潰しに三十三間堂へ連れて行かれたのですよ。で、ずらっと千体ですかね、五分か十分くらい、それ見て、すごいなって。その前か

ら京都は大好きで、お寺とか行っていたのですけども、その像っていうか仏像っていうのは、信仰じゃなくて、さっきの話じゃないけど、美術品として見ておりました。今でもそうなのですよね。今日お話を聞いて、何か、うーんと思いつながら、右から左っていう感じで半分抜けていってしまっているのですけども、ほとんど抜けてしまっていますけども、これからもね、ちょっとどうなるか分かりませんが、どんどん、そういう仏像なんかを見たいなあと思います。で、今日の話の中で、六道珍皇寺ですか、っていう話もありましたけれど、この春にちょっと行ってきました。行ってきましたけれども、何て言ったらいいのか分からなかったですね。そんなところで、これからもどんどん仏像を見ていって、そこで何かを感じるかなあというところです。以上です。

M：大阪市立大の都市研究プラザの研究員のMと申します。私は仏像が怖くて仕方なくて、今日も阿修羅像の話でちょっと嫌だになって思いながら来たのですけど、なぜ怖いかって言うと、やはり母が仏像を好きで、写真集をいっぱい持っていて、本棚から表紙が、恐らく阿修羅像だったと思うのですけど、それがたまに覗くと、それが怖くて仕方ないっていうのがあって。それが未だに続いていて、仏像は怖いのですけど、磨崖仏は大丈夫なのですね。何か動きそうっていう、そういうのも、恐怖としてあって。京都とか行ったり、最近仏像が流行ってるっていうのでいっても、それが全然理解できなかつたっていうのが正直なところなんですけど、今日、お話聞いて、半分すごくやっぱり話としては怖かったんですね。やっぱりすごく恐怖っていう気持ち

があって、でもやっぱり引き込まれるものもあって。やっぱり最近流行っているのは、仏像を擬人化している。多分、みうらじゅんとかはそういう形で書いていると思うのですが、ああ、そういう見方もあるのかなと思いながら、今まで恐怖の方が大きかったですけど、ちょっと親しみを持ってたかなっていう風に思いました。

それと、私の名前は、漢数字の七に海と書いて、ななみと読むのですが、数字の7の意味がラッキーセブンとかで、数字としてはいい数字なのかなって思うのですが、仏教的にはどうなのかなっていうのがちょっと気になる場所なのですけど。

戸次：満数ですよ。六を越えてね、七になる。六から十までであるのですが、七っていうのは、仏教でも、お釈迦様が誕生して七歩あゆみ、天上を指差して・・・六道を越えたって意味があります。

M：安心しました。ありがとうございます。

戸次：完全という意味もあります。

M：分かりました。ありがとうございました。

N：今日初めて参加させていただきました、先程のMさんと同じく、大阪市立大学の都市研究プラザで研究をしています、Nと申します。建築系の出身で、住宅の問題とかをやっているのですが、お寺とか行くのは私も好きなのですが、建築出身だとしても建物とかですね、庭とかを見る方が好きで、あまり仏像はですね、最近ブームで人が集まっているのを横目に、いいじゃん、建物の方が気持ちいいのにな、とか思いつながりながら見てたんですけども、今日お話し

色々伺って、あ、きちっとそれなりに知識を持って見方を覚えていくと、それはそれですごい色んなものが見えてくるんだなって感じがしました。その辺は今後勉強したいと思っております。

あと、今日、お話聞いていて一番思ったのは、語り口がすごく柔らかくて分かりやすく素晴らしいなあって、それが感銘を受けました。我々研究者というのは、比較的何かこう話す時に、短い時間にどれだけ情報詰め込むか、みたいな感じでも、今日のお話はうまく間を置きながら、分かりやすいように繰り返しながらとか、やっぱりああいう語り口は我々も少し勉強しなきゃなあって、その辺も参考にさせていただきたいと思います。今日はありがとうございました。

川口：前回に引き続いて、今日の会のスタッフをしております、川口夏希と申します。前回来ていただいた方も、今回来ていただいた方も、けっこうたくさんの人に来ていただいて、良かったなあって思っているのですが、前回もそうだったのですが、今回もお話が全然聞けていなくて、もしかしたら私はずっと、このレリジョンカフェの話が聞けないのじゃないかなあと思って、どうしようと思っているんですけど、どうなるんですかね。次回からは、ちょっとずつでも参加できるように、していきたいなあと思っています。次回も戸次先生ということなので、何とか次回はって思っています。またよろしく願います。

O：今回はこっこの運営の方でお手伝いさせていただきました、大阪市立大学のOGのOと申します。今は銀行員をしていま

す。本日はお手伝いさせていただいたので、師匠のお話、全然聞けなかったのですが、前のお話の中でご紹介していただいた、絵本とか本をちょっと読んでみたんけれども、すごくおもしろかったですけど、やっぱり、前のお話を聞いて、自分の普段の生活の中で仏教っていうものはどの辺に位置づけられているのかなって考えたのですけれども、日常の生活を思い起こしても、思い当たる節があまりなく、いただきますとか、ごちそうさまとかもなんですかね。そのくらいかなって思っていたのですけれども、その絵本とか、『イマジン』の詩とか読んでみて、自分が何か嫌なことを受けても、それをマイナスに捉えるだけじゃなくって、そこからどうしていかとか、色んな想像を働かせて行動したりとか、他の人のことを考えたりとか、そういうことも、詳しくないので合っているか分からないのですが、仏教精神とかに繋がるのかなって思ったら、やっぱり普段嫌なこととかしんどいこととかあっても、それを発想の転換をしたりとかして、自分をいい方向に向けていけられるのかな、とかちょっと考えたりしていました。それはあまり宗教宗教っていう感じではなくても、自分の生きていく上では、すごいプラスになることやなって思ったんで、これからも実践していきたいと思います。ありがとうございました。

4. 危うい仏像ブーム

黒木：阿倍野レリジョンカフェの運営スタッフをしております黒木と申します。一応所属は大阪市立大学の都市研究プラザで研究員をしています。僕もなんですけれども、裏

方でドタバタしていて、一度も実は戸次先生のお話を聞いたことがなくて、でも録画をさせていただいているので、あとでゆっくりそちらを見ながら勉強させていただきたいなと思っております。

毎回色んな受付というか、参加申し込みの方の対応もさせていただいているのですが、やはり最初は2、3人とかで、今回どうなるのかなと思いつつも、やっぱり最後にはこう、二十人くらい来ていただいて、本当にありがとうございます。

また、来月も戸次先生ということなので、すけれども、また知人の方とかお知り合いの方も色々お誘い合いの上、また色んな人に来ていただきたいと思いますので、よろしく願います。以上です。

P：水内俊雄の息子でございます。なんかね、僕も川浪さんとのエピソードあったら喋れるのですが、ないのでまた、次あったら喋りたいな、と。

今回ちゃんと聴かせてもらったのですが、阿修羅っていうのは僕全然知らなくて、知っているのも、阿修羅の形と名前と、それこそ興福寺っていう三つしか知らなかったのですが、阿修羅像があって、自分が見て、その二つで、阿修羅像っていうのはセットで完結しているのかなって、今日のお話聞いて軽く思ったのですが。

あと、これちょっと脇道なのですが、他力本願って言葉をおっしゃられて。これ、別の機会に思われたのですが、他力本願って、僕らが使う意味と仏教用語の他力も本願も全く全然違うのだからっていうのも今日改めて思って。そういう仏教用語と、今、自分たちが使っている言葉っていうものの乖離っていうのが、いっぱいあるなあって、懺悔にしても、そう思いまし

た。

あとで疑問に思っているって思われた、阿修羅像ブーム。僕もやっぱりちょっと疑問に思っただけ。それこそ、ブルータスとかマガジンハウスの、あれですよ。んで、これ話すのは違うと思うんですけど、やっぱり、みうらじゅんさん。おもしろいと思うんですけど、あの人がやっていることは、いい意味でアホな方。中年男子が仏像に関して熱くアホみたいに語るっていうおもしろさだと僕は思うんですけど。それがどうも、変てこな感じでブームになって。

僕もサッカーやったので、2002年ワールドカップの後のブームがあって、ちょっとなんかサッカーおかしくなったな、みたいなのがあったので。やっぱりこのブームの後、この仏像っていうのがちょっと変な方向にフューチャリングされていくのじゃないかなって、それがどうなんかなって、思ってます。以上です。

川浪：私は砂糖壺を買いに行っていて、お話は全く聞けてないので、どういう展開をされているかちょっと分からないので、あとでゆっくり総括させていただきます。

このレジョンカフェでは、一つの宗教につき、二回、もしくは三回でお話をさせていただいて、ということを考えております。一回だけではやはり、何となく消化不良かなと思ってまして、三回くらい、また前半後半っていう形でお話していただければいいなという風に私は思っておりますので。戸次さんの三回目っていうことで、お話をお伺いしたいのですが。どんな感じでお話を進めましょうか。

次のタイトルは「浄土真宗入門」という風子に書いているのですが、浄土真宗の話は、あまり正面切って話していない。今

おっしゃったように、他力本願という言葉が、いつも何かこう、他人任せっていう意味で、マスメディアでやっぱり使われて、いつもそのたびに西本願寺は抗議して、「それ違うねん」って。何か人任せって使い方は違うと抗議しています。

西本願寺は抗議していますが、東本願寺は抗議してないのです。「もう、ええやん」っていう感じで。なんです、やっぱり、仏教の高校行かれても、おうちの宗旨が浄土真宗でも、やっぱり全くとっていいほど仏教のお話、あるいは浄土真宗のお話も浸透していないですね。僕なんかよく思うのは、全然勉強していないけれども、実はキリスト教の方がやっぱり、何かこう、「狭き門より入れ」とかです、何となくそういう聖書の言葉はいっぱい聞くのですよ。ところが仏教の方は、じゃあ何を知ってんねん、って言ったら、全然皆知らないっていう。で、こんな風に仏像ブームでもものすごい人に見に行きはんに、うーん、何で皆見に行きはんのかなあと、僕も非常に思ってます。僕も、大体、仏像は好きじゃないです、はっきり言って。何でかって言うと、やっぱり小さい頃からこの近所で住んでましたから、私らの学校ではほとんど近鉄線で遠足に行くんですね。そうしたらだいたい寺に行って仏像を見る機会が多くて、これが仏さんやって言われて。

ここから何を学べって言うんよっていう風に思ってますね。おばあちゃんちに行った時も、まずは、お仏壇へ手をあわせてっていう話になるんですけど、何にも分からんもんに対して、こう、何か拝めって言われても、何にもありがたくもなんとも無くて。で、二十代の頃にようやく仏教の勉強をし出して、ああ、こんなことが教え

られていたのか、という風に納得した時です
ね、やっぱり、子どもの時見ていた仏像
とか、おばあちゃんに教えられた仏壇の前
で手を合わせるってということが、ほとんど
乖離しているんですね。

で、やっぱり、うちの家の宗旨のお坊さ
んなんか、おばあちゃんの法事で来た時
に、うちらのおじやおばも、お話をお伺
いした時に、おばあちゃんのためにどんな
供養をしていただけますかって言うたら、
熱いお茶を一杯そえたら、それが一番の
供養になる、とか言われてね。またこんな、
あいまいな話やなあ、とか思うのですけ
どね。

だから、しっかりとやっぱり、最後は
オーソドックスに、浄土真宗の開祖が親鸞
であるとかですね、ご本尊が阿弥陀如来、
と言うか、本当は南無阿弥陀仏というの
ですけれどね。と言うものであるとかです
ね、本願寺はなぜ東と西に分かれているか
とか。そういう非常にシンプルな、ベー
シックな。先程Nさんは、短い間にど
っと情報を入れなきゃいけないという風
におっしゃいましたが、僕も何となく、普
通に喋る時はどっと情報を入れたいな
って思っていましたけれども、皆さんが
ベーシックな部分に仏教がないといわ
はるので、そういうお話を最後はお伺
いしてということにしたいなあと思
っております。次回はもうオーソドク
クスに。

戸次：分かりました。では、浄土真宗入門
ということで。それとさっきも出ていま
した、そういう中で、仏事作法の話とか、
さっきも質問出ていました、数字六とか
七の意味とかですね、それから生活の中
で、いただきます、ごちそうさまみたい
なことしかないのか、みたいなことから。本

は、違うのです。私たちが普段ちょっと
交わす挨拶にしても、実は全部そういう
仏教儀式が絡んでいるのです。

それこそベーシックに。そういう話と、
興味深いところでは、本願寺がなぜ東
と西に分かれたのか、今もなぜ、す
ごく張り合っているのか、っていう
ようなことを歴史的に尋ねてみたい
と思います。お楽しみにしてください。



阿倍野Religion-Cafe



京都府京都市中京区錦町、大塚町に於けるカフェ・レストラン

川島 武と川島 信子

「日本文化の歴史を現代におゆるす場所」---P92-113

- 1. 大塚町に於ける「Religion-Cafe」の歴史
- 2. 「Religion-Cafe」の歴史
- 3. 「Religion-Cafe」の歴史
- 4. 「Religion-Cafe」の歴史
- 5. 「Religion-Cafe」の歴史
- 6. 「Religion-Cafe」の歴史
- 7. 「Religion-Cafe」の歴史
- 8. 「Religion-Cafe」の歴史
- 9. 「Religion-Cafe」の歴史
- 10. 「Religion-Cafe」の歴史

「ゴスペルの歴史と現代における展開」

2010.2.24 (水) 18:30~21:00

■講師：藤林いざやさん

1964年、京都市生まれ。1989年、同志社大学文学部卒業。2003年、同志社大学神学研究科博士課程前期終了、修士（神学）。歴史神学専攻。現在、京都中央チャペルの牧師をつとめる。

1. ゴスペルとは

川浪：どうも、皆さん、こんばんは。定刻を5分過ぎましたけれども、第5回のレリジョンカフェでございます。今日は、春を思わせるような陽気になっておりますので、それで、京都から藤林いざや先生をお招きしております。今日は初めてプロジェクターを使いますので、私の前説が長々とあるよりも、早速、先生にお話していただきたいと思っております。それでは、よろしくお祈りいたします。

藤林：皆さん、こんばんは。藤林と申します。私は、京都で牧師をしております、今回ですね、こうしてご縁をいただきましたのは、白波瀬先生とひょんなことからお知り合いになったということで、と言いますか、向こうが私を知ってくくださったということで、お声かけをいただいて、今日、お伺いできたことを嬉しく思っております。

私は、今、専門としては同志社大学の方で私のルーツでもあります、ペンテコステ運動というものがアメリカで展開したのですけれども、その歴史を研究しております。



2. ゴスペルの歴史的展開

今回、ゴスペルの歴史ということで、特にアメリカで展開しているゴスペルを取り上げさせていただきまして、それが日本との関わりや、また、日本にどういふふうに入ってきているのかとか、そういったことも少し触れながら、お題としては、「ゴスペルの歴史と現代における展開」ということでいただきましたので、一応そういう基本で進めさせていただいたら、と思っております。

せっかくですので、ゴスペル自体も、多少味わっていただけたらと思ひまして、今日は私の教会のメンバーであり、また、ゴスペルクワイヤーのメンバー3人ですね、連れて参りました。よろしくお祈りいたします。後ほど、ちょうど真ん中くらいで、ブレイクをしながらですね、一番メジャーと言われている歌『アメージング・グレース』を皆さんと一緒に歌ってみたい、と思っております。

クリスチャンであるとかクリスチャンでない

とか、キリスト教を知っている、知っていないに関わらず、『アメージング・グレース』のメロディーはよくよくご存知じゃないかと思えますし、日本のゴスペルクワイヤーの中でも、最もよく歌われている歌の一つでありますので、この機会に味わっていただけたら、それは一つの体験としたら素敵なものになるのじゃないかな、とっております。どうぞよろしく願いいたします。

まず、ゴスペルとは、ということで、今回のレジュメをお渡ししまして、パワーポイントの四角い中を説明しながらお話をさせていただこうと思っております。

ゴスペルっていうのは、どんな意味があるのかっていうことは色んな言い方をしますが、「God Spell」とか「Good Spell」とか、「神様からの良い知らせ」とかいう意味から、基本的には「Good News」「良い知らせ」という意味合いでよく用いられております。一体、何が良い知らせなのか、と言いますと、いわゆる人生には色んな苦しみがありますけれども、そういったものから、日本的に言いますと解脱すること。苦しみから抜け出すことです。そして、抜け出しただけではなくて、その後、幸せに生きられますよ。そういうお話。それが、良い知らせとして、一番、メッセージの中心にある、ということでございます。

ですから、ゴスペルっていうのは、歌ではあるのですが、どっちかと言いますと、音楽はある意味で何でもいいと言いますか。その文脈に合わせて、その時代に合わせて、その国の色んな民族音楽でも構わないわけでありまして、要は中身に、「あなたが苦しみから解放されて幸せに生きられますよ」そういう、知らせが盛り込まれておれば、基本的には何でもゴス

ペルになる。そういう具合に考えられてもよろしいかと思えます。

ですから、よくゴスペルと言いますと、ブラック・ゴスペルっていうようなイメージで、特に黒人の方がノリノリで歌うっていうのが、ゴスペル。それ以外はまがいもの、みたいに考えていらっしゃる方も時としておられるんですけども、実際のところは、そのスタイルというのは一様ではありませんで、特に良い知らせを明かすと言いましょか。ご紹介する、お伝えしていこう、そんな意図が常にゴスペルの中にはあるということは、まず一つ押さえていただけたら感謝だと思えます。

今回、歴史的展開ということもございまして、何かあるかな、と思って色々考えたのですが、その中で我々平たい感じではございますが、ざっとまとめとして、適当なものとして、塩谷達也さんの『ゴスペルの本』ということで、特に日本のゴスペルブームから、また各地にクワイヤーがありますけれども、そういったクワイヤーの方々にアンケートを取ったりしたものをまとめていらっしゃるものがございまして、これが軽いタッチではありますけれども、割合、網羅的な、大づかみをしていただくにはいい本ではないかと思ひまして、今回はこれを踏まえながらご紹介をさせていただこうと思っております。

もう一枚、こうしてお渡ししたのが、ゴスペルのトゥリーということで、過去の歴史から現在に至るまでの、だいたいの主だったゴスペルの内容がまとめられております。これは74から75ページからのものがございます。

まずですね、ゴスペルを考える上で、どうしても避けることのできないのは、黒人霊歌であ

るということでございます。いわゆる、ニグロ・スピリチュアルと言われているものでございまして、ご存知の通りアメリカに西アフリカから黒人たちが連れてこられて、奴隷として使われるようになりました。

その中で彼らが、苦しみに耐えていくために、アメリカで体験したキリスト信仰ですね。特に、大覚醒運動というのが18世紀、19世紀に起こってきますけれども、その大覚醒運動の中で、黒人たちもキリスト教徒にしよう、という動きがありまして、キリスト信仰というものがそこで増えていきます。

そういう中で、特に、黒人の人たちが最も深く感銘を受け、そして自らにも重ね合わせるかたちで、よく味わっていたのが、皆さんもご存知の『十戒』という映画にもなっておりますが、モーセによる、出エジプトの出来事です。ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが、いわゆるイスラエルの民が、カナンの地に住んでおりました者が、その後エジプトに行きまして、そこで代が変わった時に、奴隷になってしまった。その苦しみの中で、神に助けを求めて叫んでおりましたら、神がモーセを起こして、そして指導者として立てて、イスラエルの民は、カナンの地へもう一度連れ戻していく。奴隷からの解放ということを起こしていくのが、出エジプトという出来事です。チャールトン・ヘストンの有名な映画もありますので、ご覧になった方もいるかもしれません。

実はそういうような中で、奴隷ということで非常に深く共鳴するところがあったんでございましょう。黒人の方々は、この出エジプトの出来事、この物語に、やはり自らを重ねあわしていったんですね、そのようなかたちで希望を見出していこうとしました。そういう中で、イメージ的には、当時歌われていた賛美歌に、西アフ

リカから持ち込んできた、いわゆる自分たちの音楽というものをミックスするようなかたちで、歌を作り出していったわけでございます。

ですから、このモーセという人物は、ニグロ・スピリチュアルの中でも解放者としてよく取り上げられる人物でありますし、また、一番古い部類にあります歌がございますが、『ゴー・ダウン・モーセ』という歌がございます。その歌詞を少しご紹介しておきたいと思えます。この中には、実は訳が色々あります。インターネットでも見ましたら色々あるのですが、多少物足りない気がしましたので、今回、私が適当に訳をつけました。適当に、というのは、いい加減に、というのではなくて、少し言葉を足して、訳をつけておきました。ですから、いわゆる訳詞として、歌う歌詞ではございませんので、この点はご了承いただけたらと思えます。

この意図するところはですね、イスラエルの民がエジプトにいた。その時、主が語られた。「我が民を去らせなさい」奴隷の苦役は余りに厳しく、我が民は耐えられない。そこで主が語られた。「我が民を去らせよ」そしてサビの部分に入りまして、「さあ、行け！モーセよ！エジプトに下って行け！年老いたファラオに告げよ。我が民を去らせよ！」と言うのだ。そういう歌詞がついています。

二番になりますと、有名なこの10の災いというものがありまして、その一番最後に来るのが、天使が下りてきてまして、エジプトの国々を巡ります。イスラエルの民の家だけは、柱と鴨居に血を塗りまして印しとしましたので、その前を天使は通り過ぎるんですけど、血を塗っていないエジプトの家庭には天使たちが入りまして、そこの長男を打って、殺してしまう。そういう災いがエジプトに起こります。これにも

う耐えかねて、最後、ファラオは、もう出エジプトして良い、という具合に、心を動かす。そういう出来事が起こるのですが、こうして主はモーセに語られた。それに勇気を得たモーセは、王の前に行って、我が民を去らせよ、と語ります。もし去らさなかったら、お前たちの初子、長子は皆死ぬだろう。だから、私の民、イスラエルを去らせなさい。という具合に語っていきます。

こういう10の災いを織り込みながら歌っていくわけです。そして、途中で段々とその事柄を繰り返しながら、同じように、今度はモーセを通してファラオに語られた。さあ、今こそ我が民を去らせよ、と。非常に切迫した雰囲気を持って行きまして、お前たちの長男が死ぬから、今こそ去らして行きなさい。そういうことを歌い入れて、17節、全部で25節ある歌でございますが、17節になりますと、ついに黒人の方々がイスラエルの民に自らを重ね合わせていくようなイメージになっていきます。

さあ、今度は我々の番だ、と。我々が苦役から自由になる時が来た。主が語られる。我が民を自由にせよ、と。そして、キリストにあって、私たちは自由なのだ。だから、主は語られる。我が民を自由にしなさい。

ここにはもう、黒人たちが自分たちの存在を、重ね合わせながら語っている。そんな部分を読み取れるわけです。そして、25節の最後になりましたら、私は、もうまごうことなく、信じる。主の語りかけは実現する。主は、我が民、黒人たちを自由になさるのだ。クリスチャンには、叫ぶ権利がある。自由だ、と叫ぶ権利がある。そして、我が民を去らせよ、と主の語りかけを自ら持って、生きることができる。

こういう具合に、白人の主人から解放されるイメージをエジプトの民の解放の物語と重ね合わせながら歌っていきました。

実はこの19世紀のあたりは、アンダーグラウンド・レイルロードと言いまして、いわゆる地下鉄道と言われているものですが、カナダとか、北部へ、奴隷たちが逃亡するのを援助する組織がありまして、その指導者は、いわゆる逃亡奴隷を集めるために、この歌を歌いながら、それを合図にしながら集めていた、ということも伝え聞いております。

3. ペンテコステ運動とのかかわり

そういう中で、段々と黒人霊歌というものが広がっていくわけでありますが、一番突破口として良く言われているのが、フィスク・ジュビリー・シンガーズというのが非常に活躍してきます。実は、19世紀の半ば過ぎに黒人学校ができて、それがフィスク・スクールという名前でありました。でも、非常に資金が不足ですね、集めなきゃならない。そういう必要性がありました時に、実はその中の学生たちを歌い手として磨きまして、ツアーを起こしていきましたら、大変、あちこちで寄付金が集まって、非常に好評を博した。

そしてついに、オハイオ州のオベリン大学で、初めて白人の聴衆の前で歌う。そういう機会を通して非常に好評を得たものですから、ついには、グラント大統領に招かれまして、ホワイトハウスでも歌う。そういう形で段々、黒人の歌が広くアメリカ社会にも認知されるようになっていくわけです。しまいには、ヨーロッパツアーで15万ドルも集めてくるような成果も得たということでございます。

こういう中で、このシンガーズたちが生み出したのは、いわゆる9名のメンバーなのですが、合唱を基本としながら、そこにリードボー

カルと言いますか、シンガーが立ちまして、掛け合うようにしながら歌っていくような形でございます。そして、この時期に非常によく歌われた歌が、『アメージング・グレース』でございました。

なぜ『アメージング・グレース』がよく歌われたか。これはもうご存知かもしれませんが、この歌詞をつくりましたジョン・ニュートンという方が、元々、奴隷商人でいまして、西アフリカから黒人たちをアメリカへ運ぶ、またはヨーロッパへ運ぶ、そういう船の船長をしておりました。しかし、大嵐に遭って、彼自身が、神様、助けて、と願いを持った時、そして命が助かった時、ああ、私はこんなことをしてはいけな、ということで、最終的に彼は奴隷船を下りまして、そして牧師になりました。そして、キリストの教えを伝える、ということになった時に、自分のような、本当にひどい人間が、神によって許されて生きるということは、自分の努力とか修行とかをはるかに超えた恵み以外の何物でもない。しかも、驚くべき恵みだ。ということで、『アメージング・グレース』という、こういう歌詞をつくって歌にしていっていったようです。作曲者が誰かは、よく分かっていないようでございますが、やはりそういう奴隷商人であった人が、人生が変わって大きな展開を見た、というのは、やはり黒人の方々にとっても非常に心惹かれる歌になった一つの理由ではないかと考えられます。

黒人霊歌というのは基本的には、隠れ家の中で皆、声をひそめて歌い始めたという成り立ちがございますから、あまり露出度の高いものではありませんでしたが、こういうシンガーズの活躍を通して、次第に世間にも歌が広がっていくようになります。

そういう中で、段々と、世間で音楽性を持っている人たちが、やはりその歌を歌うのですけれど、かつて世間で歌っていた音楽の歌い方であるとか、スタイル、また楽器ですね。そういったものを段々取り込んで歌うようになります。それが世俗音楽との出会い、ということができると思います。1900年くらいから1930年くらいまでの間の流れでございます。

そういう中で、これが段々と広がっていく、浸透していく中で、また実際に確立していくには、一つベースとなるような舞台がありますね。実はそれが、チャーチ・オブ・ゴッド・イン・クライスト (Church of God in Christ) という教派でございます。これは後で説明しますが、黒人系のいわゆるホーリネスの背景を持ったペンテコステ教派で、最大のものでございます。

ですから、黒人の人たちが非常にそこに入るわけですが、この辺で、私もゴスペルについて話させていただくので、非常に親近感を持ったわけです。というのは、私がメインにしております研究の中で、ペンテコステ運動というのは大きなものでありますし、その白人系と黒人系の流れが大きくアメリカにありまして、実はその黒人系の中に非常に深く根ざした、こういう音楽的展開がゴスペルの中にあつたということでございます。ゴスペルはある意味でペンテコステのブラック系の中で、非常に確立していったということが見えてきて、大変参考になりました。そういう意味で、今回準備させていただいたのは、大変、私的に表現させていただきますと、神のお計らいであった、ということでございまして、感謝している次第でございます。

そういう中で、このチャーチ・オブ・ゴッド・イン・クライストはペンテコステ系という

ことで。ペンテコステ系とは何かと申しますと、要は、霊のはたらきをダイレクトに体験するというのを重視します。ですから、目に見えない神様が、霊として私たちにはたらく。そこに色々な現象が起こるということを素直に受け止めていくのですね。ですから、いわゆるトランス状態になったり、いわゆる陶酔状態とか言われることを普通に受け止めていくようなメンタリティーが強くてございまして、これが黒人の方々が日常的に培っている民族性なんかも非常にシンクロしながら広がった、ということなんです。

そういう黒人の文化の中には、ジャズであるとか、ブルースということがありますがけれど、そういうものが、この賛美歌と融合するようなかたちになってまいりまして、初めて、1930年代にゴスペル・ソングという表現が出てまいります。それを生み出した人が、トーマス・ドーシーという方でございまして、そのトーマス・ドーシーを通して、ゴスペル・ソングという表現が使われだしたようでございます。

1930年代、これはアメリカでは大変な、深刻な大恐慌の後でございまして、人々が失意の中に落ち込んでいたわけでありましてね。そういう中で、やはり、人々を励まして、希望を持って生きていく力を湧き立たせたい、そんな願いからですね、やはりブルースのスタイルとリズムを用いながら、歌詞の中身は、この賛美歌を基調としますから、神を讃えながら、人生は必ず開けてくる、というようなメッセージ性を乗せて、生活苦、現実のしんどさ、そういったものを乗り越えていこう。そういうような歌として確立していったわけでございます。

先程少し触れました、チャーチ・オブ・ゴッド・イン・クライストは、実は19世紀の終

わりに、C.H.メイソンという方がもう一人、C.P.ジョーンズという方と一緒に始めた教派でございまして、1906年にアズサ・ストリートというところがロサンゼルスにあるのですが、そこで聖霊体験をした黒人の指導者がおりまして、ウィリアム・シーモアという方がおられますが、そういう噂を聞いてですね、同じ黒人ということもございまして、このメイソンはわざわざロサンゼルスまで参ります。

そして、そのロサンゼルスで聖霊体験をして、いわゆる異言という神の霊によって語らせられる言葉。ペンテコステ系の一番の特徴とも言われてきたものでございまして、いわゆるお祈りをしておりまして、段々舌がもつれてきましてですね、最初はハレルヤ、ハレルヤと言っていたのが、ハレルヤハレションダラ・・・こういう感じで、別の言葉になっていく。そして、ハッタラベカラショッタラビカラバカラシャンダ・・・という感じで、何の言語かよく分からないけれど、何か言葉のように出てくる。それが最終的には、人とコミュニケーションする言葉ではありませんで、神との交わりを、深く魂の奥底の部分で体感する。そんな祈りとして確立していきまして、そういう体験をメイソンはいたしまして、ジョーンズという方と別れまして、このチャーチ・オブ・ゴッド・イン・クライストがペンテコステ派に鞍替えしていきます。

そして、このペンテコステ派の中でも、黒人たちが拠点とするような、ベースとなるようなところになりまして。有名な話ですが、公民権運動の指導者であります、マーティン・ルーサー・キングも、各地のチャーチ・オブ・ゴッド・イン・クライストの教会で公演しましたし、彼が暗殺される前の晩も、メイソンズ・テンプルと言いまして、本部教会で、山の頂上に立っているという有名な演説がありますよね。あのスピーチをして、彼は翌日亡くなる。そん

ゴスペルの歴史と現代における展開

なことがございます。同じ黒人ということもありますので、公民権運動も力を入れて支援した流れになっております。

4. ゴスペルの社会的認知

そして、次第にゴスペルが、色んなシンガーやシンガーズが合唱でハモる、ということを経段々始めていきます。カルテットが生まれまして、そこにリードシンガーが入る、というスタイルで、ハモりを非常に重視する流れが出てまいります。これが、40年代から50年代に広がったものでございます。後で歌ってもらうのも、ハモりますけれども、今では普通に使いますし、私たちの教会なんかは、礼拝の中でサイドヴォーカルが入ったりするんですけど、司会者とサイドヴォーカルがハモったりするというのが、よく起こります。

ハモるっていうのは、きれいですよね。単声よりは豊かになります。色々都合の手を入れたりするので。こぶしと言われたり、フェイクと言われたりする部分でありますけれど、語りがぼっと入ったりですね。歌のフレーズを自然な形でぼっと出したり、繰り返したり、要は印象付けていく。そんな形で何を狙っているかと言うと、簡単に言うと、聞いている人たちが高揚していくように方向付けをしている、と言ったらいいでしょうか。

ですから、聞いている人たちの琴線にぼっと触れるようなフレーズが良く出る人は、それが非常に効果的に出来ますから、その人が歌う、という時にはやはり、人々がその高揚感を求めてよく集まる、ということになっていくわけです。

そういうような中で、黒人の歌手の中では非

常にメジャーになりました女性のシンガーで、マヘリア・ジャクソンという方がいらっしゃいます。この方も50年代にヨーロッパツアーをしまして、特に黒人がそれまでの社会では到底メジャーのレーベルから歌を出すことができなかったのですが、この方が初めて、コロンビア社に契約を取ったということで、時代を画する方になりました。60年代には公民権運動にも参加してよく歌って、72年に60歳の若さで召されていきます。

そういうような中で、彼女はどのように表現しているのですね。ブルースはやはり、絶望を歌うのだ、と。ああ、本当にダメだ、っていうように歌うんだ、と。しかし、ゴスペルは希望を歌うんだ。自分は時として、絶望に落ちようとするような状況によく遭遇する。しかし、その時にブルースに入る誘惑に負けないで、ゴスペルを歌うのだ。そして本当に希望に溢れて生きていくのだ。そんなことが、言葉として残っております。『アイム・ゴーイン・トゥ・リブ・ザ・ライフ・アイ・シング・アバウト・イン・マイ・ソング』というのは、そういうような意味でございまして、歌っている歌が希望に溢れているから、やはりどんな状況でも、希望に溢れて私は生きていく。そんなことを残している方でございます。歌を聴かれると、もしかすると何かの音楽の流れの中で、あ、聴いたことあるな、という方かもしれません。割合、よく知られている方でございます。

60年代に入ってきますと、ソウル・ミュージックと融合していきます。ソウル音楽がメジャーの中に広がった時期でございますが、そういうものとゴスペルが融合するようなかたちで展開してまいります。

先程の歴史の年表の中には出ておりますが、アレサ・フランクリンという女性の方がいらっ

しゃいまして、この方がポップス界に60年代にデビューしてから、最終的にはクイーン・オブ・ソウルと言われるくらい、ソウルの女王と言われるくらい大活躍をしています。

有名な牧師様の、またゴスペル・シンガーの娘さんとしてお生まれになったのですが、家庭ではお母さんが家を出てしまうとか、あまり幸せ感がなかったようでございまして、大変内気な生い立ちであったようでございますが、その中で、自分自身を解き放ってくれる、そういう歌、というイメージでソウル音楽に入っていかれて、人生の中の辛さとか、悲しさ、そういったものをよく味わった方ならではの歌だ、ということで、聴く人の魂を非常に揺さぶる歌を歌い上げていかれます。それが最終的には、自分が育った教会の中で馴染み知ったゴスペル・ミュージックも80年代になりましたら歌っていく。

そして、こういうゴスペルとかソウルというような流れから、また近々来る(来日する)ホイットニー・ヒューストンなんかが出てくるような流れに繋がっていきます。ホイットニーは大阪公演をやった時に、東京に移動する途中、旦那さんと喧嘩して結婚指輪を窓から放り出したとかいう話がありまして。それ以来、彼女は離婚してズタズタになりまして、薬物に大分はまったようですが、こうやって戻ってきたところを見ると、抜け出したようでございますね。

アメリカの歌い手さんと言うと、非常に振幅が大きいんですね。売れた時には莫大なお金が入ってくるので、自分を見失ってしまうことが多いようでございまして、それで奈落の底に落ちるのですが、もう一回そこで立ち上がるという時に、このゴスペルの福音の中で、もう一回やり直そう、という転回があるというわけでございます、そういう絶頂から奈落へ、そしてもう一回這い上がってきた、というよう

な、こういうパターンは何人も見ております。

ソウル音楽との融合で、エドウィン・ホーキンスという方が、この方も先程のチャーチ・オブ・ゴッド・イン・クライストで育ってこられたので、非常にペンテコスタルな歌ですね。聖霊に満たされて、自由に崩しながら歌っていく。

黒人だから崩す、というような言い方もあるのですが、私自身なんかの、内側で体感している部分でいきますと、ある意味で聖霊体験というものがリアルに感じられる状態の中では色んなひらめきが生まれてくるんですね。それで、もうちょっとこういう風に歌ってみたいとか、こういうメロディーの中でこんなのを入れたらきれいだ、とか、そういうものがピカピカくるわけですね。それを歌ってみると、それが非常にはまる、ということがよくありまして、ある意味で私たちの命の部分が活性化するような感覚ですね。それで生きているっていうことは本当に感謝だなあっていう思いが溢れてきた時に、思わずそれを実感として、生きているっていいな—って思ったら、ああ—って、言いたくなりますよね。そんな感覚ですね。そういう、思わず心から沸き出でるような喜びとか感嘆とかいうものを、こぼしと呼んでいるのだらうと、いう具合に思います。

ですから、実感の部分で、ああ、本当に生きているって感謝だなあ、嬉しいって、それが感覚ですね。これが非常に重要なところだと思いますし、単にそれは人種とか、民族性っていうものだけで止まらないものがあるのではないかな、という具合に、私なんかは思っております。

それを、より自由にやっていいのだよ、というプラットフォームを開いてくれたのが、ペンテコステ系の教会でありまして、そこは基本的

には何でもありですから、倒れようが転げ回ろうが、独楽みたいに回転しようが、走り回ろうが、跳んだり跳ねたり、叫ぼうが自由、というようなものであって、それは聖書の中では御霊は自由、というところからもきておりまして、その表現方法は本当に豊かに受け止めていくような素地がありました。

そういうような中で、『オー・ハッピー・デイ』を作ったホーキンスも育ってきたということです。『オー・ハッピー・デイ』も『アメージング・グレース』と並んで多分、日本のゴスペル・クワイヤーの中で歌わないクワイヤーはないのではないかと、言うくらい、有名な歌になりました。シンプルな歌ですね。「♪オー・ハッピーデー」という歌ですね。「♪オー・ハッピーデー」という感じの崩し方がありますけれど、何て幸せな日だろう、と。「♪ジーザス カム」キリストが私に来てくださった。それによって幸せな日になった。ただこれだけのフレーズで、これを延々と繰り返しながらいくわけですけど、こういう喜びとか、そういったものを非常に端的に表現している歌として売れました。例に漏れず、エドウィン・ホーキンスも、大ヒットした後、2年後くらいには奈落の底に落ちてまして、ナイト・クラブを転々としながら、キリストに救われて感謝だ、と歌っていた人が、2年後には酒場で歌っている、というようなところを通るんです。

ところが、チャーチ・オブ・ゴッド・イン・クライストの牧師さんの一人に、彼の一番下の弟がなっております、兄貴はこんなんじゃないかん、ということで、もう一回立ち直らせていく、というようなところを通して、今度はゴスペルで表舞台に出てくる、というようなところが出てまいります。

こういうように考えてきますと、一番下のラ

インですね、ここはちょっとアンダーラインでもしておいてもらったらいと思うのですが、ゴスペルというのは、常に時代と融合すると言いましょか。その時代で最も華やいでいる音楽性とミックスしていく。こういう性質がございます。それは一体なぜか、ということは、最初にちょっと触れたこととリンクして、最後にまとめをしたいと思います。

5. ゴスペルとクワイヤー

さあ、ここでちょっと。ちょうど20分くらい経ちましたかね。もっと経ってる？あ、大分経ってますね。テキパキと喋ったつもりなのですが、少しブレイクということで、今日、参りました、うちのクワイヤーのメンバーで、教会のメンバーでございますが、3名の方に2曲ほどゴスペルを歌っていただきたいと思えます。じゃあ、こちらに出てきてください。

♪

もう1曲歌わせてください。『ジーザス・イズ・アンサー』という曲です。

♪



ありがとうございました。と、というような感じでございまして、お楽しみいただけたでしょうか。

ずっと、ハモリなども今も継続して用いているものでありますけれども、その時代、その時代に生きている人たちが一番響く音楽性を活かしながら、取り込んで、ゴスペルというものは育ってきたことは、少し押さえておいていただきたいと思います。

80年代に入りまして、マス・クワイヤーが非常に隆盛する時期になります。50人から100人くらいの大規模な合唱団と一緒に歌うというスタイルが確立します。その中でも有名なクワイヤーが各地に色々とできるのですが、こういうスタイルを確立した一人が、ジェームス・クリーヴランドという牧師さんでございまして、牧師でありながら非常に歌が上手なのです。ですから、説教しながら、最後、段々後半になりましたら、バンドのセッションも反応し始めて、語りながら歌に入っていっちゃう、という流れが出てきてまして、そこにはクワイヤーが後ろに控えていて、一緒に関わってくる、というようなかたちでございまして。

そして、特に私どもが影響を受けている一つは、ブルックリン・タバナクルという教会があります。ニューヨークのブルックリンという、非常に治安の悪いところに教会が建っております。ニューヨークというのは一番、人種的に融合されたところでもありますから、色々な背景の方がいらっしゃいます。社会層もまちまちでありますし、経済的にも格差が非常にひどい場所でもあります。

そういう中で、色々な方々が共に集って、そ

してクワイヤーとして歌う。表現としたら、弁護士とかホームレスとか看護師とかクラック中毒者が歌う、というふうによく語られるのですが、厳密に言いますと、「元」ホームレスであり、「元」クラック中毒者です。

そして、このクワイヤーのすごいところは、全部と言っていいくらい、「元」素人さんです。あんまり、プロとしてトレーニングを受けた方が入るようなクワイヤーではありませんで、普通の一般の方が色々な信仰体験をして教会に加わりますね。その方々の中で、オーディションはありますけれど、それに加わっていく。

そんなかたちで、実はこの教会のクワイヤーはグラミー賞を5回も取っているという、大変有名なクワイヤーになりました。ただ、「元」ホームレスとか、「元」クラック中毒者っていうのは、実際にどうやって生まれるかと言うと、支援施設のようなものを持っておりまして、そこで例えば就業支援であるとか、教育支援なんかもしております。

ですから教会がNPOのような働き、または社会福祉の穴を埋めるような部分の働きをしております、実際にそういう中で人生自体が変わった。そういう喜びですね。単に心が救われて、気分が良くなった、とかですね、ちょっと憂さが晴れたから嬉しい、というようなことではなくて、本当に、自分の人生、生き方そのものが変わったのだ、という喜びがこの中には満ち満ちているかな、と思います。

ですから、立ち場は違うんですけど、共通のコアとして持っているところとしては、そういう人生の変化というものを喜ぶ、というような部分でしょうか。これが非常に端的に出ているクワイヤーだな、という具合に見ております。

最近になりましたら、コンテンポラリーです

ね。現代にはR&Bやヒップホップの要素が非常に大きくなりまして、ゴスペルの市場も巨大化していきます。500億を超える市場規模になっておりまして、今はもう1兆円とかいうくらいになってきているようでございます。

その中で一人、カーク・フランクリンという方が、時代を画するような働きをしました。彼はメジャー音楽家で、洗練された方なのですがぱっと見たら、非常に背が低いのですね。160センチくらいでありまして、生い立ちを見ましても、そのことを大変気に掛けて育っていることは確かなようです。

彼はお父さんがどこにいるか分からない。そしてお母さんは育児を放棄しましたので、おばあちゃんの養子として育つような、家庭環境にあまり恵まれない中で生育をしました。そして、実際、社会人になっても、経済的にはあまり恵まれずに過ごして、養育のためにピアノをセールスするような仕事に就いていた時期もあるようでございます。

そういう中で、彼自身が神様の体験をベースにしながら、自分が本当に一番好きなのは音楽で、それを持ってクワイヤーを編成しながらゴスペルを歌い始めた時に、実は、彼のアルバムの一発目が大ヒットになりまして、200万枚を超えるようなセールスになりました。その中にありますのが、『マイ・ライフ・イズ・イン・ユア・ハンズ』という大変有名な歌でございます。私の人生はあなたの手の中にある、という賛美はあちこちで歌われている曲になりました。

彼自身が時代を変えた、と言われている要素は、93年に黒人系のグラミー賞みたいなものと、それから白人系のクリスチャン・ミュージックのグラミー賞を受賞しました。簡単に言うと、黒人系と白人系の音楽が、ミックスダウンされるような状況をつくり出していったので

すね。大体、時期的にはマイケル・ジャクソンが『ブラック・オア・ホワイト』を出した頃です。ですから、アメリカ社会の中で、黒人がいわゆる社会の上層に入ってきたり、白人の人が黒人の人に対して、嫌悪感を強く感じなくなってくる時代かな、という感じ。1980年代の後半くらいから、そういう雰囲気は出てきますし、それに非常に大きな影響を与えたのがマイケル・ジャクソンではないかと、私は勝手に思っていますが、やっぱりそういうことはゴスペルでも言えるのであって、カーク・フランクリンは正しくゴスペルの中で融合させていく流れをつくった人です。

そしてもう一人、1900年代の後半から21世紀、今、非常に活躍している人に、ドニー・マクラーキンという人がいます。この方はアンドレ・クラウチにも師事された方でございます。非常にペンテコステの生い育ちやなあ、ということを実感する方でございます。

実は、私は96年に神戸でベニー・ヒンという方の大会をしまして、伝道者で有名な方なのですが、実はゲストとしてこの方を呼んできたのです。要はデビュー間なしの頃ですから、まだそんなに忙しくなくて、来てくれました。この方が歌った時に、私は、いわゆるアカペラで、身体全体が総毛立つという歌を初めて体感しました。それだけじゃなくて、大体5500人くらい集まっていたのですが、神戸のワールド記念ホールの人たちが、うわあーっとなるような、何と言いますか、歓喜の思いと言ったらいいんですかね。そんなものが、皆からふわあーっ湧き出てくる、そういう鳥肌ものの瞬間を、私は舞台上で司会をしております、彼自身を紹介して歌ってもらったんですが、こんなすごい人がおるんや、と思いましたが、その時はそんなにすごくなかったんですけど、間もなく21世紀になってから大ブレイクしまして、

今はそんな近くに寄れないような人になってしまいました。

『鹿のように』、という歌があるのですが、「♪谷川の流れを慕う鹿のようにー」という歌があるんですが、これを日本語で歌ってくれました。だから日本人はメロメロになりました。ただ、ローマ字読みで書きますと、アメリカ人は発音ができないのですね。英語が堪能な私の友だちが、例えば主という言葉がありますけれど、靴のシューズのシュをね、当てるとか。そうするとちゃんと日本語音になりまして、この時に彼の日本語の歌で涙を流して感動した人は数知れずおりました。彼は味をしめたようで、実はその日本語の歌を世界各地のコンサートで歌っています。日本語の歌、ということ。日本語で歌うのです。この前、アメリカのゴスペルを聴いておりましたら、いきなりね、「♪愛します 愛します 救い主 助け主 主よー」これ、ドニー・マクラーキン違うか、と思ったんですけど、神戸で覚えて帰った歌を、未だに使ってはります。

何でそんなことを申しますかと言いますと、ゴスペルというものが日本に根付くために、必要なところ。最後にやっぱり、日本語で歌えるか、ということかな、ということを実感させられた。そして、アメリカの歌手で力のある人が日本語で歌うと、それは、僕らがちょっと一生懸命練習して歌うのとはまた違う、凄まじいパワーがあるということを実感した、お人までございまして、今日は、つい、出してしまいました。

そんなことで、ゴスペルをずっと見てまいりましたら、色々な流れがありますが、白人系と黒人系と、色々あります。そういうものが、やはりゴスペルの多様性として出てまいりまして、そういう系譜は色々あるのですが、その中の受賞する人たちがそれぞれ融合してきて

いるのが現実でございます。

6. ゴスペルの爆発的人気

さあ、そして現代日本における展開ということで、やはり忘れてはいけないのが、『天使にラブソングを2』で、爆発的人気を、このゴスペルが博します。1993年までございまして、これ以降、各地でゴスペルクワイヤーというものが開かれるようになりました。キリスト教会が主催するものもありますが、カルチャースクールとか、宗教色の薄いものもたくさんございまして、いわゆる、聖歌隊で最初おどおどして、歌えなかった女の子が、段々上手になって、ある瞬間ブレイクして、ものすごいリードボーカルになっていく、という、あれに憧れて歌いました、という方は非常にたくさんいらっしゃるし、音が取れずに、不協和音だらけの、そういうクワイヤーが段々上手になっていく。しかも、年齢がいった方も、歌っているうちに上手になっていくっていう、そういう希望を持った方がいらっしゃるって、私も歌ってみたい、というかたちで来られる方が増えたようでございます。

ゴスペルを楽しむ日本人で、先程の塩谷さんのアンケートを見ますと、大体7割くらいがクリスチャンではない方々が歌っていらっしゃるということでございます。何で歌うのですかと、シンプルな問いで、答えは明快でしたね。元気をもらいたい。癒されたい。ストレスから解放されたい。でも、これは非常に、ゴスペルの生い立ちとか展開とか、色々見ますと、まさしく、今でこそ奴隷制度はありませんし、別に誰かの奴隷になっているわけじゃないけれど、会社に擬似奴隷、ではないですけど、ちょっとそういう、自分の思いに任せない現実ね、し

んどさを抱えている現実がある。また、家庭の中で身動きがとれないとか、色々なことで縛られている感覚を持っている方々が、やはりゴスペルを歌う中で、そういうものから解放される実感を抱かれるということは多いようでございます。

また、癒し、ということも非常に多かったですね。そして、何より元気になる、というのは良いことだな、と思います。実は聖霊のパプテスマ体験というものの、聖霊が働いて何が起こりますか。一言で言うと、元気になる、ということですね。華やぎが溢れてくる。そして、シャイで内気で、あまり人前で何かやるのが億劫だっている方々が、大胆にできるようになる、みたいなことがよく語られますけど、やはりそういったことが、クリスチャンであるとか、ないとかを問わずに、ゴスペルを歌っていると実感されるということは、音楽性の中に、キリスト教的に言うと、聖霊の働きが如実にある、というようなことになるわけございまして、そのことがやはり、人間というのは神様の被造物としての作品、というメッセージが聖書には強うございますから、それが宗派としてキリスト教徒になっているかどうかは別として、神の前には、そういう人間に恵みを与えたいという思いが強くなる、一つの間口と言いますか、そんなものとしてゴスペルが用いられているかな、ということを思います。

そして、私どもの教会は実は、京都ミラクルズ・クワイヤーと名乗っております。奇跡の数々が詰まったクワイヤーといった、そんなイメージでございまして、簡単に言うと、クワイヤーで歌う方々が色々な体験をしていらっしゃるのですけれど、ちょっと尋常では考えられない変化というものを体験していらっしゃる方もたくさんいらっしゃるものですから、そういっ

たかたちで名前が付いているわけでございます。

こだわっていることはいくつかございまして、一つは、プライスレスな内容なので、できるだけ安く、ということですね。値段を付けたら、べらぼうに高いものになる、価値ある内容を分かち合うので、だから、無料なのです。というような言い方をしますけれど、私どもは、その会場費だけいただいているようなことございまして、実際に教えるとか、一緒に歌う経費とか、そういったことには、ほとんど負担をしていただいております。それで、割合お金があまりない、という方も気楽に入っております。

あと、ゴスペルの多様性ということで、今までのジャンルは色々ありましたけれども、歴史の流れのステップがありましたけれども、そういった系譜や歴史的な展開の中でゴスペルにも色々なものがあるので、やはりブラック・ゴスペルだけに限っておりません。バラード調のようなものもよく取り込みますし、できるだけバランスを取った内容にしたい、というふうに思っております。

そして、最後は、先程もお聞きいただいたように、あの曲は元々、英語です。でも、私どもが訳をつけたり、訳のあるものを使ったりしながら、できるだけ日本人として素直に聞いていて分かるように。それを目指しております。そして現代に生きていますから、現代の方に響くような訳になるように、ということも心がけております。そういうことは、つまり、ゴスペルを体感していただくことが大変重要なことだな、ということを実感しているからなのです。

バッハの『マタイ受難曲』ってありますね。

あれもドイツ語で歌いますね。私はいつも思うのです。あれは本当にしみじみ良く分かる日本人はどれくらいいるのだろうか。2000人とか集まっているコンサートがありますけれど、この中に本当にドイツ語がよくよく分かってね、ああ、本当にすごい、って思っている人はどれくらいいるかな、って思うのですね。私なんか聞きますと、ドイツ語じゃなくて、音ですね。音として何か心地よい、とか、そんな感覚的なものにやっぱり止まる。内容が非常に豊かなものであるにも関わらず、そうやって言語が違うだけで、分からないってことはもったいない、ということがありまして、実は私はバッハの『マタイ受難曲』にコラールとアリアだけを抜粋したものに、歌えるように聖書朗読を入れて、その場面場面を聖書朗読してから歌ってもらう、というような試みなんかもしております。いつか、イースターの劇を入れながら、その劇中の人にマリアとかを置いておいてですね、そのマリアがアリアで歌うとか、やれたらいいな、という具合に思ったりもしております。やれることはたくさんあるわけですが、特に良い内容もお伝えしたいというところには、日本語にするとということ、とても重要なことだろうと思っております。

7. アイデンティティーの新しい形成

あと、以下の写真は私どもの教会の可愛らしい子どもたちから青年たち、色々ございます。

下は幼稚園の年中くらいから歌い始めておりますので、皆でスイングしたら確実に反対にいくとかですね、見ていたら微笑ましい感じもいたします。

次はユースですね。中高生がメインでございまして。ちょっと写真を縦にひっぱりすぎまして、こんなに足は長くありませんね。ちょっと

間延びした感じになってすみません。

子どもたちは、できるだけ楽器もできるように、ということで、バンドにもしております。やっぱり、歌って弾ける、ということはこれから重要な、ということで。真ん中の、歌いながらベースを弾いている女の子が私の長女です。中3でございまして、受験の時でございます。

そして、次が大人のクワイヤーですね。私どもも、後ろにこういうようにクワイヤーが並んで、リードボーカルが絡むというようなスタイルをとっております、一番影響を受けておりますのが、先程のブルックリン・タバナクルのクワイヤーでございます。

そして、次はクワイヤーのバンドですね。大体キーボード2台、一つはピアノ、そしてもう一つはシンセサイザーとして使いまして、一番右端がエレキギター、そして左端がベース、そして真ん中にドラム。こんな感じです。これが基本のセッションで、あとはここにパーカッションが入ったり、ギターをもういっちょ入れたりとか、そういう感じでバランスを取ったり増やしたり豊かにしたりしております。

あと、クワイヤーで非常に重要なのは、ノリですね。一般にノリと言われているもので、ちょっと興奮してんちゃうか、というくらいですね、燃えてきます。実はこれ、場所はどこかと言うと、京都コンサートホールでございましてね、あのホールでこんだけ激しい歌は我々以外歌ったことはないのではないかと、というくらい、普段はクラシックの静かな感じの歌うところで、手拍子を入れ、時には飛び跳ねながら歌っております。

そして、クリスマスなんかには、生誕劇とのコラボレーションをしながらゴスペルをお出しする。子どもたちにクリスマスページェントを

してもらってですね、幼稚園のちっちゃい子なんかは、羊さんの役でね、めえーとか言ったら、皆本当にキュンとなる、可愛らしい雰囲気ではありますが、ゴスペルの歌と、場面を重ね合わせながら、クリスマスの歌がたくさんありますから、こういう劇と一緒にコラボレーションしたりしております。

私どものクワイヤーで非常に大事にしているのは、説教ですね。けっこう、喜んで楽しんで歌います。私です、これは。こんな感じですが、何が嬉しいのか。これはお伝えする必要がありますし、また、聖書というものと現代に生きる人たちと結び付けていく。その一つのポイントがこの説教になります。

そして、最終的に会場に来ていただいた方や、ゴスペルに触れられる方々に体験してほしい。リアリティですね。やはり、生き方として日本人に掴んでほしい。そういうメッセージがあります。それは、人が変われるという可能性の話ですね。そして、それが本当に良い知らせとしてあるのですよ、その中身をご提示しているのが三つのポイントです。

一つが、洗礼という体験ですね。これが、ローマ書によりますと、キリストの十字架体験でありまして、死と葬りと復活にあやかる体験として洗礼があります。こういう中で、私たちが色々な人生の中で生きてきた過去と、一つ区切りをつけるのですね。そのポイントとして洗礼を体験することができますよ、ということ。

そして、そこから新しい復活をした後、神の子として生きる。これは、新しいセルフ・イメージをつくると言ってもいいと思いますね。日本人で、一番、私は現実問題として格闘しているのはセルフ・イメージの低さですね。自分が素晴らしい存在だと思えないという方が大半である、ということでございまして。いや、私

は素晴らしいのですよ、と強がって言う方は別としまして、素直に、本当に自分のことを素敵だな、と思って生きている人がどれだけいるだろうか。これは、私が現実にお話して実感するところです。そういう中で、神の子という新しいアイデンティティーを置き換えて生きる。だから、これを親換えと言ったり、自分のアイデンティティーの新しい形成と言ったりします。

そして、それでも前に向かって生きるためには、どうしても過去と切れなければいけません。いや、私はああいうことがあったし、許せないし、みたいなことを引きずっておったら、足に重しを付けて歩くようなものなので、あなたはもう死んだんですから、さよならできたんですよ、という体験で、過去とさよならして生きる。

そういう変化というものを、人生で体験できるということが良い知らせでありまして、そういうことを考えますと、先程出てきました、『アメージング・グレース』をつくりました、ジョン・ニュートンは正しくそういう人生を生きたと言っていいと思います。彼自身、新しいセルフ・イメージを持って、そして過去を引きずったら、彼は決して人前に立って堂々と話をすることはできません。「お前、元奴隷船の船長やろ。そんなお前が、どうして人前でそんなに偉そうに人の道を説けるんじゃ」、ということを言われたら、多分もう、口を閉じて、はい、すみませんと下りざるを得ない。

しかし、彼がどうして大胆に立っていられたか、と言うと、そういう私は、過去に縛られないで生きることができる。過去からさよならして、今、本当に神様の前で生きていいのだ、というリアリティを掴んだので、牧師としても働くこともできたし、それからの人生、元気に輝いて生きることができた。そういうことになります。

ですから、そういう体験というものを、ゴス

ペルのリアリティとしてお分ちしていきたい、というのが私どもの実践でありますし、また色んなクワイヤーの方々が最終的に目指しているの、そういう部分の共有とか、そして一体感の中でそういったものを掴んでもらう。そんなことになっているようでございます。

日本はあまり、皆が一体感を常時持てる舞台というのはそうそう、現代にはありませんね。だからそういう中で、ちょっとコミュニティー的な、親しい交わりの中で、一つになって声をミックスしながら、ハーモニーをつくりながら、自分もその一部として機能する、という感覚を満たしている。これが、ゴスペル・クワイヤーが根強く日本にも残っている理由であろうかな、と思います。

8. 『アメージング・グレース』

そんなことで、長々と話してまいりましたが、最後、皆さんと一緒に、『アメージング・グレース』を歌ってみたいと思います。英語の歌詞を見ながらお聞きいただいてもいいですし、せっかくですから皆さんも、メロディーはご存知じゃないかと思いますが、真珠の宝石店のCMとかにもよく使われておりますね。と一緒に歌っていただいたら感謝でございます。

実は、7番まであったのですね。今回は全部歌ってみようと思いますので、長うございます。そしておまけに、日本語はこんな歌詞です、というのをつけておきましたから、合計11番までございますので、最後に「ハレルヤハレルヤ」とありますね。これは、『アメージング・グレース』のメロディーで、「♪ハレルヤハレルヤー」という歌があるのですね。「♪ハレルヤアーメンー」という具合にはめていき

ます。この時は、今回はせっかくでございますので、ちょっと手を挙げて歌うとかね、けっこうかと思えますね。「♪ハレルヤハレルヤー」という感じでやりますと、ああ、心も晴れ晴れ、という感じでございますね。

キリスト教って、雨の日も晴れの日も、うまくいくようになっているんですね。晴れの日もハレルヤ、雨の日もアーメン。そういうことでございまして、一緒にやってみたくと思います。最後はおっさんになってしまいました。それでは、『アメージング・グレース』です。途中で、長うございますので、半音ずつ上げていきますけど、それは付いてきてください。うまくいくかどうか、というよりは、楽しんでいただけたら一番幸いです。じゃあ、お願いします。キーはFで。

♪ *Amazing grace*

how sweet the sound

That saved a wretch like me.

I once was lost but now am found,

Was blind but now I see.

'Twas grace that taught my heart to fear,

And grace my fears relieved,

How precious did that grace appear,

The hour I first believed.

Thought many dangers, toils and snares

I have already come.

'Tis grace hath brought me safe far,

And grace will lead me home.

The Lord has promised good to me,

His Word my hope secures;

He will my shield and portion be

As long as life endures.

*Yes, when this heart and flesh shall fail,
And mortal life shall cease,
I shall possess within the veil,
A life of joy and peace.*

*The earth shall soon dissolve like snow,
The sun forbears to shine;
But God, Who called me here below,
Will be forever mine.*

*When we've been there ten thousand
years,
Bright shining as the sun,
We've no less days to sing God's praise
Than when we'd first begun.*

驚くばかりの
恵みなりき
この身の汚れを
知れる我に

恵みは我が身の
恐れを消し
任する心を
起こさせたり

危険をも罌をも
避け得たるは
恵みの御業と
言う他なし

御国に着く朝
いよいよ高く
恵みの御神を
たたえまつらん

ハレルヤハレルヤ
ハレルヤアーメン

ハレルヤハレルヤ
ハレルヤアーメン

どうもありがとうございました。
これで終わらせていただきます。どうもありが
とうございました。



～Cafe-Time～

1. 日本人のノリ

白波瀬：せっかく良いお話、貴重なお話をいただきましたので、皆さんの方から藤林先生の方に質問等あれば、ここで質疑応答の時間とさせていただきたいのですけれども、いかがでしょうか。

どうぞ。そしたら、お名前と。

A：Aと言います。ちょっと歌をやったり、バンドをやったりしています。

神秘主義とか、そういう主義もあるのですか。例えば、神から降りてきたインスピレーションが、とか言ったら引く人もいると思うのですけど。そういうところに、引くかなーみたいな、けっこうないですか。私は信じているのですけど。人によると思うのですけど。そういう、不思議な。神様からインスピレーションが降りてきて、それが歌になるのだよ、みたいな。言ったら、引く人がいるのじゃないかな。ちょっとカルトかな、と思う人もいるかもしれないのですけど。そういう抵抗はないですか。

藤林：アメリカでゴスペル歌っている人はよく、そういうことを語っていますけどね。そういうことを喋っているのですけど、日本に来てコンサートされて、日本人で引いている人はあまりいないですね。誰も分からないのかな、と思います。日本語で言うと、皆引くかもしれないけど、日本ではあまりそういうことを、アメリカのゴスペルの人で引いているところを見たことない。逆に、ノリで、ハレルヤー！とか、アーメン！とか言って答えるのですけどね。そういうのはよく言いますね。



でも、我々が教会でそういうことをやるっていうのは、うちの教会の方々は知っていますけど、初めて来られた方はびっくりしますよね。そして、引くっていうことは当然ありますよね。だから、あんまり激しいのを、日曜日の朝の礼拝ではしませんね。どっちかって言うと、祈禱会とか、会員だけが集まるとか、そういう時間帯にそういうのは自由にどうぞ。礼拝はもうちょっと、抑え気味と言うか。それも、よし悪しだな、と最近思っています。抑え気味にいくと、日本人の性質は、どっちかと言うと大人しいのですよ。静かになる。もうちょっと激しくてもいいかな、と最近思っていますね。

今回、ゴスペルの勉強をしながら、もうちょっと激しいこうかな、と思ったくらいですね。後は、ハーモニーですね。最近、イベントとかでも、メロディーと一緒にやるのです。だから、音楽が流れている中で、さっきのようなイベントみたいな歌も歌うのですよ。祈りの言葉なのですけど、歌うみたいにして。さっきのイメージング・グレイスのメロディーみたいに、♪ ---みたいな感じで、要はメロディーみたいになってくる、と。そうすると、案外

受け入れられやすいですね。逆に、牧師さん、さっき言うてはったあれ、格好良かったです、とかって言う人もいました。要は、出し方もあるのかな、とっています。

白波瀬：よろしいですか。後でまたつっこんだ質問をしていただけたらと思います。他はなにかありますでしょうか。

B：皆さん、どんな感じで歌われているのかな。

藤林：あまり一辺倒じゃないですね。激しい一辺倒でもないし。要は川の流れみたいなイメージですね。歌の流れは。だから、急流のところもあれば、緩く流れるところもあるし。そういう一つのストーリーみたいな感じで、全体になるように、手拍子を入れたりする歌もあれば、しっとりと歌い上げる歌もあるし、というような感じには、一応しています。

そりゃあ、年齢を重ねた方が、あんまり激しいのばかりするのは、歌えないっていうことになるので。

白波瀬：よろしいですか。そしたら、他、何かありますか？せっかくなので。はい、どうぞ。お名前をお願いします。

B：場所とかに融合するようなもの、ゴスペルとかっていうお話があったと思うのですが、日本である場合、例えば日本独自のゴスペルとか、そういうのをやられるのですか。

藤林：はい。日本の演歌は多分、アメリカのブルースかなって感じがしますね。酒と

女と溜め息とか。ああ、人生って何でうまくいかないのだよ、とか、ずっと歌われますよね。ブルースの中身も、やっぱり酒と女と、人生暗くて、基本は。やっぱり日本の、そういった意味ではゴスペル演歌っていうのはいいよなって思っているのですね。こぶしの入ったですね。

だから、最初に申し上げたように、ゴスペルっていうのは、メッセージ性がありますので、どういうコンテンツかが大事ですから、スタイルは自由にいけますし、ゴスペル演歌を一生懸命やっている人もおられます。

それから、三味線で歌うとか、和太鼓をコンサートに取り入れたりね。それとか、獅子舞をやろうと思って、止められた人が一人いましたけど。日本的な情緒という部分になるものは全然いいのではないかな、という具合には確かに思いますけどね。よくやるのは、賛美歌とかのゴスペルの歌は、お琴を七奏くらい並べてやるとか、というのはよくやりますね。

B：分かりました。ありがとうございます。

2. 長屋でのゴスペル体験

白波瀬：よろしいですか。他、何かありますか。

一言二言で結構です。今日のお話をどのように受け止めたかとか、あるいはどういふふう感じたかとかですね。あるいはそこで質問を出されてもけっこうです。皆さんから簡単な自己紹介をお願いします。そしたら、一番奥の方からお願いします。

C：Cと言います。今日、こちらに初めて来まして、非常に素敵な場所でびっくりしました。ちょっと裏方の仕事でゴスペルのお話はちょこっとしか聞けなかったんですけど、一つ質問として、こういう長屋で歌われるのも、なかなか珍しいと思うのですが、他に、どこか、ゴスペルっぽくない場所で歌われた経験などありましたら、お教えてください。

藤林：ゴスペルっぽくない場所。

白波瀬：質問は、後で。

D：カンボジア料理のお店をやっています、Dと申します。

今回、こういうのに行くねん、ということクリスチャンの友だちにお話すると、先生の名前をがーっと指差して、あー、知ってるー！みたいな感じなので、そしてまた、偶然が繋がって、更に今日行くのが楽しみで、来ました。そして、すごく素敵な歌も、ゴスペルも聞かせていただいて、知っている歌も自分が歌って、とても気持ち良かったです。ありがとうございます。

E：はじめまして。近所のおっさんでございます。Eと申します。すぐ近所のおっさんですの。

も非常におもしろいのですが、興味としては、キリスト教的な組織化の仕方ですね。一つ間違ったら、靈感商法と間違ような、歌で人を陶醉させるという、その危うさっていうのが非常におもしろいな、というので。

僕も日本ではとりあえずは宗教家を名乗っていますが、そういうところは非常に勉強になりますね。世界を制覇してき

たというテクニックのすごさっていうのは、敬服する限りです。以上です。

F：Fと申します。大阪市立大学の院生です。韓国人の留学生です。

自分は、おじさんが二人いて、二人とも牧師なんですけど、それで、もともとキリスト教の家では、韓国の法事とかはしないようにしているんですが、うちでは、法事をする時には、ちょっと小さい礼拝みたいなものをやって、こういった歌と一緒に歌ったりしてたんですけど、こういう空間でゴスペルを聞いていたら、その法事のことをすごく思い出して。何かやらないといけないかな、という気もしつつ、アーメンとか、こういうふうにしったりするんですけど、そういうのを思い出して。

自分はキリスト教徒ではないのですが、やっぱりゴスペルを歌っていると、ここに入っているのは、スピリチュアルというか、そういうのを感じて皆で歌ったりするのがすごいことだな、と思ったりします。そういうような感想です。ありがとうございました。

G：Gと申します。大阪市大の院生をしています。

私は、キリスト教とちょっとは縁があって、ずっとクリスチャンスクールに行っていたっていうことと、その時に歌うのが好きなので、よく歌っていたっていうことと、あと私は長くアメリカにいたんですけども、アメリカでもちょっと縁があって、ギリシャ正教会にずっと行ってたんです。ギリシャ系アメリカ人が行くギリシャ正教会と、あとはアンティオキヤン、アラブ系の人たちが行く正教会に縁があって行って、たまに歌わせてもらう。

普通、正教会ってコーラスがないのですけれど、アメリカにある正教会はすごくアメリカの教会の影響を受けていて、コーラスがないといけないような気がしてコーラスを作っていて、歌うのが好きだったので、参加していたのですけれど。それはしばらく前のことなのですけれど。今日、来てみてすごく懐かしいな、と思って聞いていました。

あと、ゴスペルとかのことについて、歴史とか、語源とかもほとんど知らなかったのので、今日お話をさせていただいて、すごく勉強になりました。すごく興味深かったです。ありがとうございました。

H：今回、クワイヤーメンバーとして来させていただきました、Hと申します。大阪市立大のセミナーっていうふうに聞いて、最初はもっとものすごくフォーマルな、正式なものをイメージしていて、緊張していたんですが、こういうフランクな、いい意味で緊張感のない、と言うか、ものすごく気楽にできる、こういう場で歌わせてもらったことを、とてもありがたく思います。ありがとうございました。

I：同じく、クワイヤーで今日参加させていただきました、Iです。本当に、このようなほっこりとした場所でゴスペルを歌うことができたことを、すごくありがたく思います。すごく楽しい時間を過ごさせていただきました。ありがとうございました。

J：こんばんは。感謝します。今回、いざや先生から、一緒にゴスペルを歌うために来てください、ということで、どういう感じの場所で、どういう人たちの前で、どこに行くのか、っていうのは、大阪って

うことしか聞いてなかったのので、しかも近づくにつれて、町屋風カフェという感じで聞いていたので、京都の町屋風カフェとイメージが違って、本当におうちな感じで、素朴なところで賛美をさせていただいて、感謝です。とっても緊張してしまいましたが、聞いてくださって感謝します。

私は、ゴスペルクワイヤーでアルトをしているのですが、礼拝の時には、サイドヴォーカルっていう奉仕もさせていただいて、特にアルトで歌っているので、ハモるのが好きです。高い音が出ないので、ハモります。平日は保育士として働いています。ありがとうございました。

3. ゴスペルの響き

K：今日はどうもありがとうございました。宗教家をやっています、Kと言います。金光教という宗教の教師をしています。レリジョン・カフェの雰囲気が好きで、前も参加していたのですが、今回も参加して。

ゴスペルとか、キリスト教の背景っていうのは全然詳しくなかったのですけれども、自分がぼんやりとしたイメージで持っていた、キリスト教だったりゴスペルだったり、そういうものが、本当にかちかちかちと組み合わせさっていきような、そういう楽しさをずっと感じながら聞かせてもらっていました。

ついつい、私自身、宗教家ですので、抑圧からの解放とか、魂が助かるんだ、というふうなことの観点で見ちゃうんですけど、それには神様ありがとう、とか、単純にもっと表現していいんだな、というのが、今日は勇気付けられたような気がしました。ありがとうございました。

黒木：研究員をしています、黒木と言います。
このレリジョン・カフェのスタッフとして、毎回参加させていただいているのですが、この時間が僕にとって一番辛くて、毎回準備でなかなかじっくり聞けなくて、毎回記録したビデオを後でブログにアップするんですけど、その時にやっと、大体の内容が分かるという感じなんです。

一階で色々準備していたのですが、皆さんでハモられた時に、ハモりってやっぱりすごいなって思いながら。別に、キリスト教を信仰しているとか信仰していないとか、関わらず、歌うことを共にすることで、通じ合うものがあったりとか、そういう素敵さがあるのかな、と思いながら準備をしながら感じておりました。今日はどうもありがとうございました。

L：Lと申します。教員をしております。宗教関係のことを勉強しているのですが、

ゴスペルと言うと、皆さんは多分ご存知ないかもしれませんが、私の学生時代でしたから、クラダウオードシンガーズという、黒人のおばちゃんの4人組くらいの、太ったおばちゃんのコーラスがあって。私はテレビなんかでそれを見て、びっくりしたと言うか、歌の域を超えていると言いましょかね。大地から湧き上がってくるような、そういうふうな感じの音楽で。その時はそれで、びっくりした、くらいのところで終わってしまって、そのことを今日、お話伺って思い出したりしました。

実は、色々宗教のことを学生に指導したり、研究、勉強のことですね。別に信仰者っていうわけではないのですが、例えば、卒業論文を書く時に、「先生、宗教

はちょっとうまく書けないので、音楽について卒業論文を書きたいのだ」っていう、そういう学生がけっこうおるんですね。学生にとっては、自己表現とメッセージと言うかな、自由に自己表現ができるということと、メッセージを託せるっていうことと、音楽っていうのは結びつくのだけど、それと宗教っていうのは実はあんまり結びつかないところがあって、ある意味ではゴスペルっていうのはそれを結び付けているっていうことなのでしょうけど、それが、どういうかたちで結びついていくのかとか、結びつかないのかっていうことを色々考えてみたいな、というふうなですね、課題を与えられたようなお話でありました。どうもありがとうございました。

A：Aと言います。今日は色々楽しく体験させてもらって。

日本語でゴスペルって初めてで、賛美歌のイメージが強かったのですが、また新しいイメージなので、またそういう目で色々見てみようかな、とか。アレサ・フランクリンとかは聞いたことあったのですが、昔のゴスペルの人は聞いたことがないので、カーク・フランクリンさんだとか、また聞いてみたいです。ありがとうございました。

M：看護学生をしています、Mと申します。私も、キリスト教とかほとんどイメージがほとんどなくて、周りにキリスト教を信仰している友だちも別にいないし、ゴスペルについても、それこそ、「天使にラブソングを」くらいのイメージしかなくて今日来たので、非常に興味深くお話を聞かせていただきました。どうもありがとうございました。クワイヤーの皆さんも、素敵な歌を聞

ゴスペルの歴史と現代における展開

かせていただいて、ありがとうございました。

一つ質問があったのですけれど、日本にゴスペルが入ってきた、日本のゴスペルの歴史は、同時多発的に関係のある教会から入ってきたのか、何かきっかけがあって入ってきたのか、どういうふうな感じで今みたいになっているのかなっていうのが、お話聞きながら気になった部分だったのですけど。今日は本当にありがとうございました。

4. 日本の宗教音楽

水内：大阪市立大学の水内と申します。

この阿倍野プラザも含めてですが、私のところ、都市研究プラザというものを大阪市立大学でつくっております。普通の大学の組織というよりは、全学組織であって、かつ、市内に飛び回るといふか、あるいは世界に飛び回るといふか、あちこちで現場に近づいて調査や研究をしていこうということで、主に、社会的な排除を受けた人を社会的に包摂するとかですね。文化や宗教やアートを用いながらクリエイティブな仕組みづくりをソフトに考えていこう、なんてことをやっているところです。そういう理念でやっておりますので、今日も何人か研究員の方がおられますけども、世界から50何人くらい来ておまして、その親方をしているといふか、何でしょうね、仕切りをしているような役をしております。このような、現場プラザという名前を使っておりますね、大阪市内に5箇所くらい持っております。それぞれかたちが違うのですけども。

北の方では、この長屋よりはもうちょっと母屋風の、大きな、豊崎の方に、中津といふか天六の方にあるのですけれど。そこは建築の学生さんが入って、長屋のコンバージョンとなっていてですね、7つくらい賞をもらっているっていうすごいところでございます。こちらは、物理的にあまりお金が足らへんものですから、直してないということで、照明とか机とか、そういうものは一応大阪市立大学のお金を投じながらやっている、というですね。

ここのコンセプトっていうのは、このスペースを時々使用させていただいて、色々な、単にイベントだけじゃなくて、つながりづくりといふか、いったん顔を合わすとですね、次に色んなことでつながって、新たな知恵が湧いてくる、というような。そこに大学がそっと入って、どっちもウィンウィンで得をするような関係をつくりたいなあ、といふふうに思ってやっております。そのキーとなる川浪さんも宗教家ですので、レリジョンといふか、宗教といふのと、カフェ、といふので、食べながら、といふかたちで、企画をといふことで、このレリジョンカフェが5回目になっております。僕も全然レリジョンに関係ない、空気のような仏教を信じている、真言宗なもので、お経も分からんでええもんやと思ってましたので。浄土真宗はちょっと分かるのですよね。ちょっと日本語に近いな、と聞いていたり、それくらいのことしか分かりませんが。

今、ホームレス支援といふことで、研究、調査の中心をやっていますので、やっぱり、キリスト教系さんの運動っていうのが8割くらい占められているのかなあ、と。今日もね、日本の新宗教、仏教もがん

ばらなあかん、ということで川浪さんやEさん、それから金光教さんも一生懸命やられていますけども。

現場で、歌って何かこう、盛り上げていうっていうシェルターとか、どっちかと言ったら釜ヶ崎の方にあるのですけれど、いわゆる、ホームレス支援でゆっくりとアパートに住んで、元野宿やった人が地域で住んでいるっていう時に、声を出して、日常生活の元気付けをするっていう場面を、あんまり僕は見たことがなかったので。今日のお話の中でも、ホームレスの方とかアメリカの方では確かにそういうかたちで歌ったり、何かすることによりながら、自分の人生というのが、生き様っていうのをですね、少しでも心穏やかとか、快適にしていってっていう効果があるのかな。もうちょっと、こういうのもあったもいいのかな、と思いますけども、この辺はちょっと、質問なのですけども、シェルターとか、色んな中間施設のところで、ゴスペルみたいなもので発声をして、ええ気分になって、これがけっこう、その後の生活にプラスの効果が出ているのかどうか、あるいは、それやったけども、全然効果がなかったのかとかですね、効果がなかった人もあったのか、とかですね。その辺、ゴスペルというものと、社会包摂みたいな、福祉っていう言葉で語るには語れないんですけども、そういうものに対する一定の効能、効果とか、そんなのもちょっとお聞かせいただければ、ありがたいなと思っております。どうも本日はありがとうございました。

川浪：川浪と申します。司会をやりつつ、裏方のコーヒーも淹れつつということをやっているんで、前半のお話は聞けたのですが、

後半の歌の方に参加できなくて残念やな、というふうに思っております。

私も浄土真宗の僧侶なのですが、浄土真宗には、昔は節談説教というものがありまして、歌うがごとく語るがごとく、と言いまして、説教しながら途中で感極まると、それで節がついて、浪曲のようなうたのようなことをやる、という、そういう芸能があったのですが、明治以降に廃れてしまったのですね。明治になって学者さんたちが、ああいうのは前近代的で、時代遅れだから、やめよう、って言ってやめちゃったのですけれども、関山和夫っていう仏教大学の学者さんが、説教の歴史的研究というものを書いて、ああいう情念に訴えることこそが大事なんや、いくら知的理解で宗教が分かったって、情に訴えなければまったく広まれへんで、と言って、ほんまに仏教は衰退の兆しが見えます。

私、八王子でお坊さんをやったことがあるのですが、その時、霊園のところで法事をやっていたのですね。20分ごとにどんどん法事をするのですが、そこは別に、仏教のお墓ばかりやないので、後ろにキリスト教のお墓があって、そこで法事がかち合ったのですね。後ろの人らは、牧師さんが聖書の言葉を朗読してそれについて皆が聖書を読み出す。そしてさらに賛美歌をやりだす。私、一人お経で対抗していたんですが、やっぱり負けてる、ということがありまして。うちの師匠がですね、この第1回目で喋ってたんですが、現代語日本語訳でお経を、法事をお勤めする、という試みをやってるんで、なんとか盛り返そうと思っているんですが、まだまだ歴史は浅くて、あと200年かかるかな、というふうに

ゴスペルの歴史と現代における展開

考えております。

明治以降に、仏教讃歌もつくったのですが、なかなかこれが普及しないのですね。お経の意味不明な方がありがたい、というおばあちゃんがたくさんおられまして、あんなだけお経あげるときなはれや、と言われて、皆、歌を歌わないんですね。そういうふうにして、仏教の歴史から音楽性がどんどん遠のいちゃって、言葉としても理解できないし、音楽としても一緒に歌えない、ということがあって。私なんか、嫌やから違うことをやっている、というようなことなのですけれども。

僕が17、8の頃は、教会に行って、そこそそ賛美歌を歌って、そこにゴスペルフォークやゴスペルロックと言うて、皆が勝手に、普通の集会が終わった後にエレキベース持って来てびっくりしたことがあって、ドラム叩いて、ドンジャカジャカジャカやりはって。ああいうふうに、僕らお寺っていうのは、やっぱり世襲制で家がお寺の子が継いで、更に家の宗旨としてどんどん継いでいてですね、自ら仏教徒だと言って、自分たちが教えに遇った喜びを創作に向けるって言うことがなくて、その時は自分が取り残されたような気がずっとしているんですが。未だにですね、先程も言うてはりましたアレサ・フランクリンとか、僕も大好きですね、マヘリア・ジャクソンも大好きなんですが、これを皆神様は阿弥陀さんに替えて歌っているというような、そんな人生でございます。

N：Nと申します。大阪市大の仕事は今やってみて、ここのスタッフのPさん、今日はいらっしやらないですけど、の紹介で、二

週間くらい前でしたっけ。川浪さんを紹介していただいて、今日初めてここでのイベントに参加させていただいたのですけど。ゴスペルって、やっぱり映画の影響もあって、一つの音楽ジャンルだと思っていたのですけど、今日のお話でそうじゃない、ということが分かって、すごくおもしろかったです。僕は4年前まで、アメリカに長いこといたのですけど、一回もゴスペルを聞く機会を持ってなくて、一回くらい聞いておけば良かったと今日思いました。そんなところですよ。

平川：どうも、大阪市立大学の研究員の平川です。今日は、この後、黒木さんとか、スタッフが見れていない今回の会を記録して、見て、また振り返られるように、ビデオをずっと握っていたんですけれども。

僕の家は仏教なので、ゴスペルっていうのは実は初めて。生で聞くのは初めてで、どうも本当にありがとうございました。ただ、歌を歌うのが好きだ、と言うよりも、皆と一緒に何かすることが好きなので、釜凹バンドというバンドの、メンバーというか、名付け親になっちゃったのでメンバーに入っているのですけれども、釜ヶ崎って、すぐ側にある日雇い労働者の街の人たちが気軽に参加できるようなバンド、歌を歌ったりとか、一緒に楽しんだりする場があったらいいよな、ということで、今釜凹バンドをやっています。

こういうのって、ゴスペルのリアリティ体験とか、その場の一体感を楽しむというところと、けっこうつながっているのじゃないかな、と思って。やっぱり皆、歌はへたくそなのですよね。皆、好き好きに楽器を持って、がんが鳴らして、歌いたいや

つは歌って、とか、そんな感じなのだけ
ど、なぜかその場の一体感はすごく感じら
れるようなグルーブをつくれていたりもし
ます。

こういうのって、何が要因と言うのか
な、どういうところが作用しているのか
な。特にゴスペルだったら、こういうハー
モニ―とか、色々あったと思うのですけど
も、人をつなげて、こういうふうにしてい
くゴスペルの力っていうのはすごく神秘的
でもあり、すごくいいなあ、参考にしたい
な、と思ったりもしました。今日はどうも
ありがとうございました。

5. 韓国での宗教音楽

O：大阪市立大学のOと申します。もうちょ
と早く来たかったのですが、明日から韓
国に行くことになっていて、いきなり。
ちょっと遅くなりました。

実は、私は韓国から、生まれた時から
ずっと教会に通っていて、中学校頃からゴ
スペルや聖歌隊とか。今も大阪の、純福音
教会っていう教会も通ってまして、そこ
でも賛美チームとか聖歌隊とかで奉仕して
います。そういうところで、ちょうど黒木
さんから、今日のテーマがゴスペルだっ
ていうことを聞いて、すごく興味深くて、
ぜひ参加する、ということで来たのですが、
遅くなって最後に話をするようになって。

やっぱり韓国はゴスペルっていうこと
が、中学や高校の時から教会で、さっき
言ったドラムとかエレキとか、そういうの
を組んで、自分なりのコンサートみたい
に、ライブみたいに曲をばんばんやってい
ますよね。それで、高校生とか、そういう
人たちに、人と交流している、パートとし

ても広がっているし、若い人が教会に集ま
る機会にもなっていて、教会の中でも聖歌
隊やゴスペルっていう力が強かったです。
今はどんどん落ちているのですけども。そ
れで、ぜひ、日本人の方や、色々な話を、
日本での話を聞きたかったのですが、ちょ
うど終わったところで来てしまったことが
本当に残念で、個人的にも機会があったら
聞きたいな、というふうに思っております。
遅く来てすみません。

水内：韓国のゴスペルってすごいんですか。

O：すごいですね。生まれた時からずっと。教
会の幼稚園で育っていて、教会からゴスペ
ルっていうものは自分の人生の中でも大好
きなことだし、今でも家でキーボードとか
弾きながら、たまに歌っているのですけど
も。

中学校の頃も、教会にいたら、韓国は日
本に比べて、あまりクラブとか部活つ
ていうものが、中学校とか高校の時にない
のですよね。日本と比べて、そうだと思います。
そういう人が、音楽をしたいって
いう人とかが、ドラムをどこでやるという
と、教会へ行けばあります。エレキとかギ
ターとかも全部あるし、そういう音楽に情
熱がある人が集まって、しかも男女共に
やっているということが。今は違うのです
けれど、前はけっこう、男性高校、中学校
とか、そういう意味もあるのですけど、そ
ういう交流の場としていっぱいあって、多
分、賛美の教科書みたいな、音楽集がある
のですけど、皆どんどんつくって、ゴスペ
ル歌手とかも増えたり。

今も、インターネットが韓国でけっ
こうはやってまして、そういうインターネッ
トのCCM(Contemporary Christian Music)

ゴ
ス
ペ
ル
の
歴
史
と
現
代
に
お
け
る
展
開

とか色々なサイトがあります。CCMと言って、ゴスペルを専門とした、ゴスペルが集まっている音楽サイトがあるのです。そのサイトで一日ずっと音楽を聞きながら勉強していたり。

韓国は30パーセントくらいがクリスチャンであり、アジアの中ではクリスチャンがすごく多い国でありまして、そういうこともあると思うのですが、やっぱりそういう面では違うな、と思いますね。

白波瀬：最後になります、白波瀬と申します。大阪市立大学の都市研究プラザの研究員をしております。今回、藤林先生にお話いただくということで、色々アポイント等も取らせていただきました。ゴスペルっていうお題を川浪さんからいただきまして、誰か適任者はいないか、ということで、私の方で色々、誰がいいかな、と思って思案していたのですが、ちょうど学会で藤林先生の研究発表を聞くことがあって、それこそゴスペルチックな学会発表でした。この人の話はすごいな、と。非常にお話がお上手で、しかも聞く人を魅了する力があると言うか。やっぱり学会発表となると、どうしても淡々とね、ぼくとつとした語りになって、途中で席外そうかな、と思ったりするのですが、興味のないテーマであったとしても、人をずっと20分、30分キープできる力を持っているっていうことは、これはすごく言葉の力とか、パワーがある方だな、と思って、何年か前だったのですけれど、ずっと頭に残っていたのです。それで、藤林先生しかいないな、と思って。特別の面識はなかったのですが、連絡を取らせていただいて、こういう機会を設けさせていただきました。本当にありがとうございました。

僕自身は、ずっと黒人音楽がすごく好きで、どちらかと言うとセキュラーな音楽ですよ。いわゆるR&Bとか、ヒップホップとか、あるいは70年代のソウルミュージックとか、こういったものがずっと好きで。70年代とかっていうのは、僕は現役じゃないんで、79年生まれなんですけど、90年代にR&Bとかが非常にはやっていたんですね。そういったR&Bとかの歌手が一線退いて何をしているのっていったら、けっこうゴスペルの領域で活躍していたりするんですね。またR&Bの領域に戻ってきたり、とみたいな感じで。いわゆるポピュラーなミュージックの領域と、もうちょっとキリスト教のミュージックの領域と、行ったり来たりするっていうのがあって。こういう関係というのは非常におもしろい。そして日本にはあまりないことやな、と思って、ずっと関心を持っていたんですね。ただ、掘り下げて色々調べたりすることもなかったので、今日は歴史的に色々とお話だけですね、ゴスペルっていうふうにしてアメリカの中で展開されてきたのだな、ということが分かって非常に良かったです。ありがとうございました。

6. キリスト教と音楽

藤林：ありがとうございます。しっかり色々聞いていただいてですね、私もお伺いした甲斐があったな、と本当に嬉しく思っております。ありがとうございました。

まずは、Cさんでしたかね。ゴスペルっぽくないところで、どこかで歌ったことがありますか、ということですが。ゴスペルっぽいのかぼくないのか、っていうのは

よく分かりませんが、鴨川の三角州で歌ったとかですね。公園というか、鴨川と高野川が合流している地点があるのですが、そのちょうど三角州に野外ステージを組んで、発電機をつけてコンサートをしたりしたことはあります。

もっとおもしろいな、と思うのは、今年の8月ですけど、JAYE公山っていう人が、ゴスペルをやっているんですが、浪速ゴスペルの主催者。彼が下賀茂神社の境内でやりますね。今度ね。8月29日やったかな。8日やったかな。ですね。そして、その翌日は東大寺の大仏さんの前でやるという。これは非常にゴスペルっぽくないところでやっているな、ということで。京都の時は手伝え、と言われたので、今度手伝えることにして。私も下賀茂神社にゴスペルを歌いに入るのは初めてですね。遊びに行ったのはいくらでもありますし、いたずらもしたことありますが。あ、残るところに残してはいけません。詳しいことは言いませんが、とりあえず、そういうことで、ちょっとおもしろいかな、と思っています。

あと、Kさんでしたかね。神様ありがとう、と単純に言えばいいのか、と思って、励まされましたとおっしゃいますね。大変光栄でございます、大変。なんか嬉しいですね。とっても嬉しいな、と思いました。感動しました。それだけ、お伝えしたかったです。

それから、Mさんですね。日本のゴスペルで、ぱーっと広がる、そのきっかけと言いますかね。やはり一番大きいのは、日本の音楽、教会のキリスト教音楽を一番大きく変えたのは、小坂忠ですね。小坂忠っていう方が「HORO」っていうアルバムを出したり、マニアックな人たちに人気のあつ

た人です。昔の細野晴臣とかと一緒に組んでやったり、奥さんが高叡華と言うんですが、彼女がプロデュースして彼が歌う、みたいなことをやっていた人ですが。70年代の半ばに娘さんの事故を通して教会に駆け込んで、それで信仰を持ったのですね。76年くらいですかね。ミクナムレコードというものを出版して。特に日本のクリスチャンの音楽が非常に、一般の音楽レベルからいくと、はるかに遅れている、と。未だにバブパオルガンでね、賛美をしているのが賛美やとか、ギターを使ったことがない教会は山ほどあった時代ですね。だから、ピアノくらいは入っている教会はそこそこありましたけど、それもペンテコステ系とか、特殊なところであって、いわゆる日本キリスト教団はまだ足踏みオルガンで賛美をしている、という。

そういうのに衝撃を受けて、キリスト教界の音楽を変えよう、ということで80年代以降はずっと、ミュージック・セミナーをやってくれたり。ミュージック・セミナーというのは、要は楽器の奏楽とかだけじゃなくて、舞台をつくって、演出をどうするかとか、光をどうするかとか、設えた舞台装置をどうするか。それから、PAですね。PAを実際に触ったことのない人がほとんどだったので、そういうセミナーをやってくれたのですね。これが、ものすごく大きなヘルプになりましたですね。この10数年の下積みがあったので、そういう中でちょうど私が大学に入ったのが80年代半ばくらいで、セミナーに行きまして、実際うちの教会は翌年に会堂を建てることになって。その時に、会堂のいわゆるPA。今までそんなもの見たことないようなPAを入れて、それからスピーカーを

ゴスペルの歴史と現代における展開

BOSEのものをどンドン、と入れたり、配線をやったりね。予算は1000万円くらい上がったのですが、絶対要る！とか言ってですね、訴えたもので、入りまして。そうしたら、コンサートができるようになった。そういうことが、私たちだけじゃなくて周りの教会でも起こっていくようになりました。でも、これは小坂忠さんが本当によく頑張ってくれたおかげです。

そして、特にゴスペルにつながる流れとしては、ジェリコジャパンという、クリスチャンが集まって賛美集会をしよう、という大仕掛けの企画ですね。それを始めてくれました。その前に、全国で20箇所くらいかな。出会いのコンサートというものをずっとやっています、京都も大阪も、名古屋も色んなところで。そこでネットワークができますよね。友の会員になった人たちに声をかけて、日本全体から結集して、賛美集会をしよう、ということ、80年代の終わりから始めまして、7年間やりました。ジェリコというのは、要はエリコの城壁っていう聖書の記事からきていて、7年目は7箇所です、とか言ってですね、やっていたけど。それで、数千人から一万人が集まって歌うっていうようなこと。それから、クワイヤーも、マスクワイヤーを初めて体験したのは、あれが最初じゃないですかね。僕も入りましてけど、1000人のクワイヤーに入って歌う。やっぱり、これ、ちょっと感動なんですよ。そういう規模の教会がまず日本にないし、小さい教会が多いわけですから、たくさんで歌うこと自体がすごく興奮することだけれど、クワイヤーだけで1000人っていうのは、もう、ちょっと想像を超えているもので。それで京都から40人50人連れて、

有明コロシウムに行ってますね、金曜日の夜、徹夜で走って行って、午後から夜まで歌って、土曜日徹夜で走って帰って、日曜日礼拝に出るというようなことも何回もやりましたけども。

彼が中心になりながら、そこにアーサー・ホーランドとか関わって、ちょっと人目を引く人たちが中心になったので、賛美がすごく盛り上がっていったっていうのはあります。そして、それを引き継いだのは、甲子園ミッションをやりました、日本リバイバルクルセードという流れで、そういう人たちが甲子園で集会ができたりしたのも、やっぱり忠さんたちの下積みがあった、ということは非常に大きいです。

甲子園ミッションは93年にあるのですが、91年くらいから2年かけて、日本全国津々浦々の教会に行き、決起大会をする、というのをやったのです。決起大会というのは、お金はいりません。招いてくれたら、どこにでも行きます、と。本部がお金を持っている。そのチームを送ります、というスタンスでやったので、それはそれは、離島で5人くらいしかいないところにも行ってくれた。でも、行ってくれた時に必ず、そこその規模であれば、30人40人くらいであれば、必ずPAチームも行くんですよ。それでバンドを組んだりして、賛美リードをして、それで集会をする。それをね、本当に今まで体験したことのない教会が一番体験した機会になったのじゃないかと思います。

そういうのが下ごしらえにあって、ゴスペルというものに興味を持つ人たちがクリスチャンの中でもゴスペルを歌いたっていう人が増えてきて。クワイヤーっていう

のも、マスクワイヤーを体現した以後、各地で始まっていたのです。そこが、ゴスペルブームとちょうどリンクした、という感じが、ブレイクしていく大体の流れかな、という具合に思います。そういう流れに、私はどっぷり浸かって大きくなりました。私が生まれ育った曲はPAなんて、本当に置いてあるだけの、会場アナウンスみたいなPAでした。私の小学校時代は。中学でもそうでしたね。大学に入る時に、ちょうど、その会堂を建てるという話になったので、本式のPAシステムが入ったっていうのが、やっぱり私なんかは人生変わりましたね。それから、グループサウンズと一緒にバンドやったりしていたのが、私の音楽の、同時にクリスチャンとしての生きる人生の始まりにもなりました。全体を見ても、その辺で大きく流れが変わったかな、と思います。

先の行き来の話ですけど、忠さんもここ7,8年前かな。もう一回セキュラーでやってみようか、ということで、戻って、牧師なのですけど、一般向けのコンサートも始めて。7年くらいですかね。機関車という新しい歌をつくって。それは、細野さんとかと一緒にコラボレーションしてアルバムをつくったのだと思います。そうすると、尾崎亜美とかね。忠さんが好き、っていう人がミュージシャンの中にもいるのですけど、そういう人たちも一緒にコンサートをするとか、ということも最近は起こっています。何で日本に行き来がないかと言ったら、あんまり売れた人がいないっていうことです。それで、知られていないので、行き来どころか、こっちに来ているだけ、という感じではありますね。ってな感じでしょうか。よろしいでしょうか。

それから、ゴスペルの効力ですね。先程、水内先生がおっしゃってくださった部分もあるのですが、キリスト教的な部分でいくと、礼拝で、常に賛美というものはあるので、ゴスペルクワイヤーとしての、ということまではいっていないかもしれませんが、歌で気分が晴れるというようなことは、確かに起こっているようでもありますけれども、あまり私は、そういった感じでは見ておらなかった。ブルックリン・タバナクルは実際、クワイヤーで大きくなった教会なのです。特徴は、社会的に見ても、経済的に見ても、非常に最下層であったり、ダメージを受けて落ちてしまった人が回復して、それを証として歌う、みたいなことで人々が集まってくる、っていう展開なので、非常に特徴的な教会のクワイヤーのあり方だと思いますけれど。

先だって、白波瀬先生がおっしゃったお話の中には、教会がそうやって社会復帰や、実際の働きをしているということは聞いたことがありますけれど、アメリカにはそういうのはけっこう多いかな、と。やっているところはけっこう多いなっていう印象はあります。ブルックリンはちょっと特徴的なところだ、ということですね。

あと、川浪さんが、現代語、日本語訳のお経ですか。いいですね。楽しみにしております。よく分からないですよ、本当に。お坊さんのお経はよく分からない。仏教の葬儀に行くと、空しさを覚えることが多くて、一体この人はどういう人で、どういう人生を送って、どう死んだのか全然分からないで、終わる、と。あとは世間話して、会った人と久しぶりですなあと言っ

ゴスペルの歴史と現代における展開

て、話す。という、何か非常に悲しいなあというのがあって、御葬儀がもうちょっと改革できないかしら、と。別に何も考えなくていいのですが、勝手に思っています。やっぱり御葬儀なんかやると、キリスト式だと経歴がちゃんと話されたり、死の意味とか分かちますよね。だから、そういう機会は仏教の部分が日本はよほど多いわけですから、やっぱり死への備えとか、死というものをどのように授与していくとか、そういった事柄がお葬式で語られるだけで、まったく入り方が違うとちゃうかな、と常日頃思っております、何かそういう試みをしようとなさっているとか、あと、音楽があったんですね。とても素敵ですね。ぜひ、聞かせてください。

私は実は日本語でキリストの十字架を語る時には、どうしても仏教用語を使わなくてはなりません。というか、仏教用語が日本語のリアリティを物語っているのはものすごくすごいな、と感動してはいます。簡単に言うと、仏教用語だったものが日本語になったと言った方が正確ですかね。ですから、結局、キリストの十字架を語る時にどうしても仏教の話をするのが最近やっぱり多いのです。仏教用語で話すと、日本人の方はやっぱりよく分かるので、いけるところまで仏教用語のお話で、仏教の宗教性を使わせていただいて、キリスト教のユニークさって、やっぱり十字架なので、十字架の体験とか、そこら辺になった時に、これは置き換えるものが仏教にないので、やむなくキリスト教用語でお話する、と。それをできるだけ心がけるようになってから、割合、日本人の方にキリストの十字架が分かりやすくなった、という実感があります。私も語っていて、しっくりくるよう

になったというか。ああ、やっぱり日本人やな、としみじみ思います。だから、外国の方が持ってきたキリスト教の救いの話があるのです。全部、神から入るのですよ。でも、社会の中で神というものが当たり前の前提となっている人たちのマインドには訴えるのですが、日本だと八百万の神だし、仏教的な背景もありますから、神様がおられて、というと、何の神や、という話になりますので、天地宇宙をつくられた神様で、と言っても、そんなの聞いたことあらへんで、というのが現実ですから、そういうアプローチというのはやっぱり全然通用しないな、と思っております。そこを本当に見直す時に、宗教性として仏教というのは卓越したものを持っていますから、そういったあたりを踏まえた時に、ああ、なんだ、キリスト教って伝えやすくなったな、っていうのがすごくありまして。その辺の実感があるものですから、お話は大変興味が湧きまして、また、お聞かせいただいたら感謝でございます。

あと、Oさん。チョン・デウォン（鄭大垣）先生の教会ですね。去年やったかな。純福音学校で教えていました。日本のキリスト教史を教えておりましたけれど。純福音教会は最近、私もずいぶん親しくなりました、お付き合いが増えておりますので、感謝しています。また、何かの機会にお会いしたいと思います。

これで一応、網羅しておりますでしょうか。ありがとうございました。

川浪：それでは、最後に二人来てはりますけれども、時間がないので、後から来られたのが大阪市立大学のPさんとQさんというこ

とだけで。今晚はこれでお開きということで。

どうも今日は、藤林先生ありがとうございました。京都から来ていただいたお三人さんの、素晴らしいお歌も聞かせていただきました。

次回、3月31日水曜日に、次のレジョン・カフェはもう決まっております、神田神父ですね。阪神淡路大震災から今年で15年経ったのですけれども、非常に壊滅的打撃を受けたカトリックの教会を復興させられたたかとり教会の元神父さんをお呼びしてですね。またまたキリスト教シリーズはどんどん続くということで。

またご縁がありましたら、お会いしましょう。それでは、今日はありがとうございました。



ゴスペルの歴史と現代における展開

